

目 次

I 教育理念・目的・目標	1
II カリキュラムの概要	2
III 実習単位・時間数	3
IV 実習進度	3
V 実習の履修要件	4
VI 出欠席の管理	4
VII 実習評価	5
VIII 補習実習・再実習について	5
IX 患者同意について	6
X 情報管理と職業倫理	8
XI 実習カンファレンスについて	9
XII 実習上の注意事項	13
XIII 臨地実習における安全管理	14
XIV 感染予防対策について	19
XV 災害時対応について	20
看護者の倫理綱領	21
専門分野 I	
基礎看護学実習	22
基礎看護学実習 I	23
基礎看護学実習 II	38
専門分野 II	
成人看護学実習	54
成人看護学実習 I (健康の急激な破綻状態にある対象の看護)	56
成人看護学実習 II (疾病・外傷の回復過程にある対象の看護)	61
成人看護学実習 III (慢性的な経過をたどる健康障害をもつ対象の看護)	66
老年看護学実習	74
老年看護学実習 I (入院・治療を要する高齢者の看護)	75
老年看護学実習 II (介護老人保健施設における高齢者の看護)	83
老年看護学実習 III (介護老人福祉施設における高齢者の看護)	94
小児看護学実習	111
母性看護学実習	126
精神看護学実習	146
統合分野	
在宅看護論実習	158
統合実習	174

I 教育理念・目的・目標

教育理念

東京女子医科大学の理念である「至誠と愛」に基づき、女性の自立と看護の専門性を追求することを通して、主体性を啓発し、生涯に亘る自己教育能力を培い社会に貢献し得る人材を育成する

教育目的

人間として女性として豊かな感性を養い、人間尊重に基づき、多様化する医療ニーズに対応できる実践的基礎能力を持った看護師を育成する

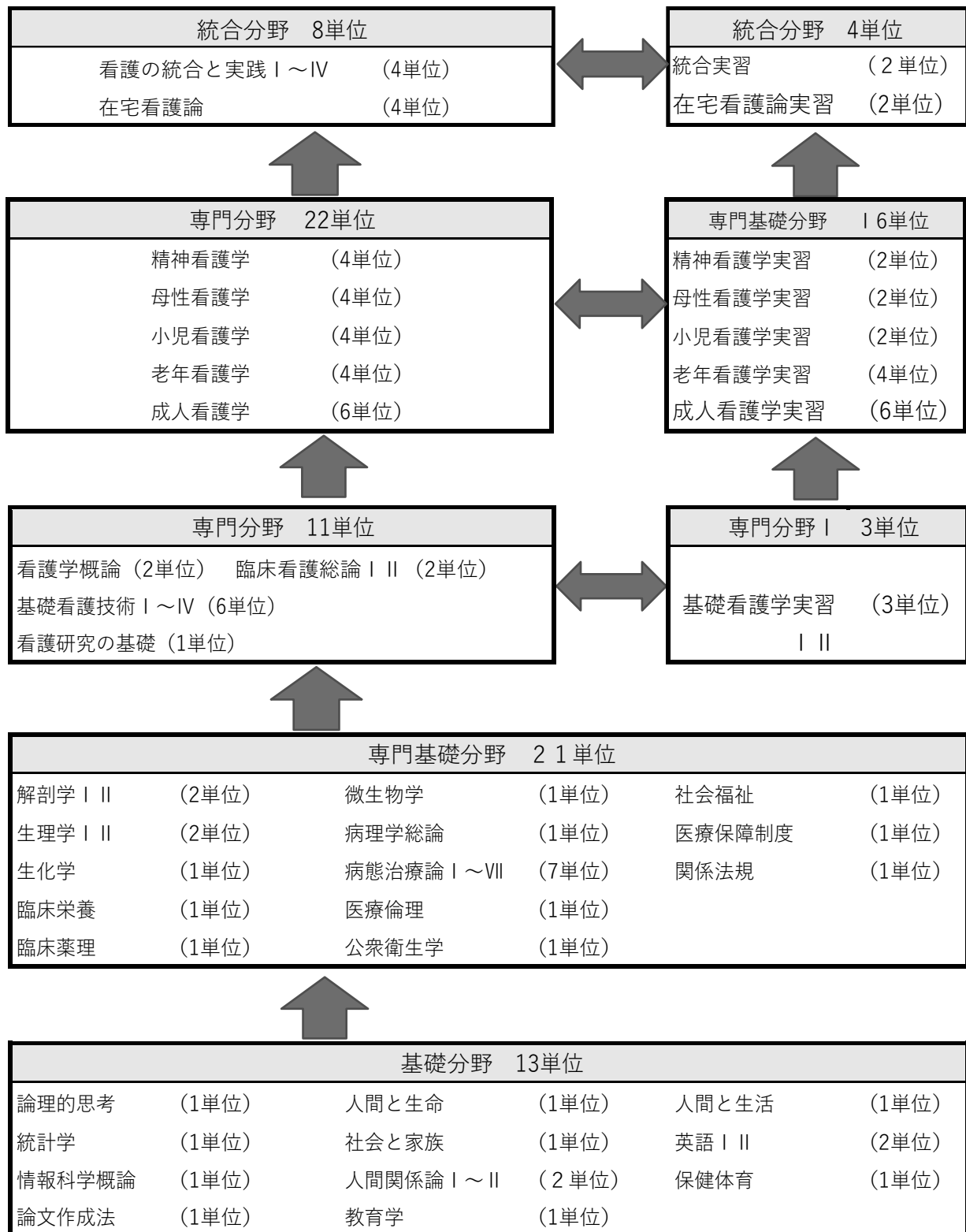
教育目標

1. 看護を志す人として人間愛に基づいた温かで誠実な心を育む
2. 生命の尊さを認識し、人間を統合的された存在として幅広く理解する基礎的能力を養う
3. 人々の健康のあらゆる状態に対し、科学的な根拠に基づいた看護を実践するために必要な基礎能力を養う
4. 看護を発展させるための対人関係能力を養う
5. 専門職業人としての倫理に基づいた看護が実践できるための基礎能力を養う
6. 保健医療福祉における看護の役割を理解し、チームの中で協働して人々の健康支援ができるための基礎能力を養う
7. 看護について継続して自ら学び、探求する姿勢を養う

臨地実習の目的

1. 個別的な看護を実践するための必要な基礎能力を養う
2. 看護の実践を通して既習の知識と技術を統合し、発展させる
3. チーム医療及び他職種との連携を通して、看護師の役割を認識する
4. 看護の実践を通して自己をみつめ、倫理観を持つ人間として成長する
5. 実習という学修方法により、主体的な学修姿勢を身につける
6. 専門職業人としての姿勢を学び、看護を探求していく態度を養う

Ⅱ カリキュラムの概要



Ⅲ 実習単位・時間数

	領 域	実習科目	時間数	履修学年	評価単位
専門Ⅰ	基礎看護学実習 (135時間)	基礎看護学実習Ⅰ	45時間	1年次	1単位
		基礎看護学実習Ⅱ	90時間	2年次	2単位
専門Ⅱ	成人看護学実習 (270時間)	成人看護学実習Ⅰ	90時間	3年次	2単位
		成人看護学実習Ⅱ	90時間	3年次	2単位
		成人看護学実習Ⅲ	90時間	3年次	2単位
	老年看護学実習 (180時間)	老年看護学実習Ⅰ	90時間	2年次	2単位
		老年看護学実習Ⅱ	45時間	3年次	1単位
		老年看護学実習Ⅲ	45時間	3年次	1単位
	小児看護学実習	小児看護学実習	90時間	3年次	2単位
	母性看護学実習	母性看護学実習	90時間	3年次	2単位
	精神看護学実習	精神看護学実習	90時間	3年次	2単位
統合	在宅看護論実習	在宅看護論実習	90時間	3年次	2単位
	統合実習	統合実習	90時間	3年次	2単位

Ⅳ 実習進度

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1年												基礎Ⅰ
2年				基礎Ⅱ						老年Ⅰ		
3年		成人Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、老年Ⅱ・Ⅲ、小児、母性、精神、統合(在宅)						統合				

V 実習の履修要件

1. 専門分野Ⅰ、Ⅱ及び統合分野の実習は、以下を履修要件とする。
 - 1) 3年生の領域実習前に必要な単位が認定されている。
 - 2) 2年生の基礎看護学実習Ⅱ、老年看護学実習Ⅰに関して、単位未修得もしくは単位認定の結果が出ていない場合、実習の履修は、検討事案とする。
 - 3) 実習オリエンテーションを必ず受講する。(オリエンテーションの時間は各実習科目による)
 - 4) 実習のための準備状況として、心身の健康状態が整っており、看護学生として自己管理の必要性を認識し、対処行動がとれていると認められる。

VI 出欠席の管理

1. 出席の確認
出席は、必要事項を記載した実習出席表を、所定時間に指導者もしくは担当教員に提出することをもって確認される。
2. 遅刻・早退・欠席について
 - 1) 当日欠席・遅刻の場合は、実習開始30分前までに自分で学校へ連絡する(7:30以降)。
 - 2) 遅刻の場合、到着及び実習開始の時間を指導教員に確認を受ける。
 - 3) 交通機関のトラブルによる遅刻は、遅延証明書をもらい、裏に学籍番号、氏名を記載し、遅刻届と共に、速やかに指導教員に提出する。
 - 4) 早退の場合、指導教員と指導者に相談・報告し、許可を得て時間を確認する。
 - 5) インフルエンザ・麻疹等、学校保健法に定める出席停止感染症については、医師の診断書をもって公休扱いとして処理し、卒業時の欠席日数には算入しない。
 - 6) その他、感染症が疑われる場合は、必ず早めに指導教員に相談し指示を受ける。
 - 7) 実習中の忌引きや事故などに関しては、指導教員へ報告・相談し指示を受ける。
忌引きの扱いについては、学校の取り決めに準じる(学生便覧参照)。
 - (1) 欠席届に会葬はがき等を添付し担当教員に提出する。
 - (2) 欠席として理由を明記し実習出席表に記入する。公休扱いとして処理し、卒業時の欠席日数には算入しない。ただし、実習履修に満たない場合は、補習実習の対象となる。
 - 8) 日々、自己の健康・生活管理に留意し、遅刻・早退・欠席がないよう努力する。
3. 実習出席表の記載方法
 - 1) 必要事項を、記入例を参考に記載する。
実習中の出席確認は、学生個々の責任において本人が実習出席表に記入し、実習指導教員に確認印をもらう(鉛筆・修正液不可)。
 - 2) 遅刻・早退・欠席の場合についても、記入例を参考に記載する。
 - (1) 学生は、実習時間の中で抜けた時間帯をそのまま記入する。
 - (2) 指導教員は実習中抜けた時間数を累積集計し、欠席時数を算出する(規定時間を基本として欠席時数を算出する)。

<記入例>

月 日	出席時間	実習内容	欠席時間		指導者印	備考（体温・風邪症状等記載）
○月○日	1.5	オリエンテーション	～			36.1℃
	8	臨地実習	～			36.5℃
	8	学内実習	～			36.3℃
	3	臨地実習	11～16	5		36.4℃ 体調不良 頭痛
	7	学内実習	9～10	1		電車遅延

Ⅶ 実習評価

1. 評価の規定について

- 1) 実習規定時間数の5分の3以上出席した者を評価の対象とする。
- 2) 評価はA・B・C・Dの4段階とし、A・B・Cは合格、Dは不合格とする。
- 3) 評価は実習内容及び実習記録の内容・提出状況、出席状況をもって総合的に行う。
- 4) 評価は、学生の自己評価表を参考に指導者と指導教員が協議し、評価会議を経て決定する。

2. 実習記録 最終提出について

- 1) 実習記録類は、実習終了時に指導教員に最終提出する。
ただし、体調不良等により提出ができない場合は、指導教員に報告後、診断書の提出とともに実習記録を提出する。
- 2) 必要なものが時間内に提出されない場合は、審議の対象となる。

Ⅷ 補習実習・再実習について

1. 補習実習とは

- 1) 補習実習は、下記の理由により実習規定時間の5分の3以上の出席を満たさない場合で、学校長 が認めた者は対象となる。
 - ① 病気により欠席した者（診断書提出）
 - ② 災害（交通事故含む）により欠席した者（但し交通渋滞は除く）
 - ③ 近親者の死亡（二親等以内）のため欠席した者
 - ④ その他
- 2) 補習実習はその年度内の所定の期日に実施する。
- 3) 補習実習の評価は、得られた評価を最終評価とする。

2. 再実習とは

- 1) 再実習は、実習内容不足等によりD評価を受け、評価会を経て学校長が認めた場合に対象となる。
- 2) 再実習は、その年度内の所定の期日に実施する。
- 3) 再実習の評価は、原則として得られた評価が合格点に達した場合C評価となる。

3. 補習実習・再実習の手続き

- 1) 実習終了後、各指導教員より評価を受け、評価会議後単位は認定される。
- 2) 補習・再実習を受ける意志があれば、伝達翌日より3日以内（週末や祝日を挟む場合はその期間 を除く）に指導教員に「補習実習願」または「再実習願」を提出する。

補習実習の場合は、診断書若しくは証明書類を添えて提出する。

- 3) 補習・再実習が認められた場合、指導教員又は実習調整教員より実習許可が伝達される。
- 4) 補習・再実習許可を確認した後、指導教員と調整し、「補習実習届」又は「再実習届」及び「補習・再実習受験料・受験票」を記入し、伝達日翌日から3日以内に(週末や祝日を挟む場合はその期間を除く)実習費用を添えて事務手続きを行う。手続きは、学校事務窓口にて時間内に行う こと。
- 5) 「補習実習届」又は「再実習届」及び「補習・再実習受験料・受験票」を補習・再実習指導教員へ提出し確認を受ける。

IX 患者同意について

＜東京女子医科大学病院・東京女子医科大学附属足立医療センター・八千代医療センターの場合＞

- ・三施設看護部・東京女子医科大学看護学部合同の「臨地実習における患者の同意手続きマニュアル」に基づき、患者を選定し、説明と同意を得て、受け持ち患者が決定される。
- ・病棟師長・指導者及び担当教員が連携をして、「患者同意書」を用いて実施される。
- ・説明は、必ず患者本人に行われるが、本人が判断できない場合は、家族にも行う。
- ・見学実習の際は、口頭同意とする。
- ・学生は、同意書の誓約に基づき、行動をすること。

＜外部での実習の場合＞

- ・施設の取り決めに従って、説明と同意を得て受持ちが決定される。

看護学生臨地実習説明書および同意書（例）

実習施設控え

様

東京女子医科大学附属足立医療センターにおいて、東京女子医科大学看護専門学校____年生
学生_____の_____実習 にあたり、 年 月 日より
年 月 日までの間、受け持ちとして看護実践をさせていただきたく存じます。

なお、学生の臨地実習は、以下の基本的な考え方で臨むことしております。看護教育の必要性を ご理解
いただき、ご協力をお願い申し上げます。

1. 学生が看護を行う場合、事前に十分かつ分かりやすい説明を行います。
2. 学生が看護を行う場合、安全性の確保を最優先とし、感染予防策を徹底し、事前に実習指導者・
実習担当教員等の助言・指導を受けてから臨みます。
3. 患者様とご家族は、学生の実習に関する意見や質問があれば、いつでも実習指導者、実習担当教
員、看護師等に直接おたずねになることができます。
4. 患者様とご家族は、実習に同意した後も、実習の受け持ち患者となることを無条件に取りやめにし
ることができます。また、取りやめにするを理由に看護および診療上の不利益を受けるこ
とはありません。
5. 学生が実習を通して知り得た患者様とご家族に関する情報については、他者に漏らすことがない
よう、プライバシーの保護に十分留意します。
6. 学生が実習の成果をまとめ、校内で学修発表会を持つことをご許可ください。個人情報の保護 に努
め、施設名や個人が特定されないように匿名性を厳守します。

説 明 日： 年 月 日

説 明 者：東京女子医科大学附属足立医療センター _____ 氏名 _____ 東

女子医科大学看護専門学校 _____ 氏名 _____

【同意署名欄】

私は、東京女子医科大学看護専門学校の学生が臨地実習において、私の受け持ちとなり、看護の実
習を行うことについて上記のとおり説明を受け、納得したので同意します。

署 名 日： 年 月 日

患者様お名前：_____

代理同意人様：_____（続柄：_____）

X 情報管理と職業倫理

以下を熟読し、看護学生としての自覚をもって実習に臨むこと

- 保健師助産師看護師法 第42条の2規定
- 「看護者の倫理綱領」日本看護協会(巻末に添付)
- 個人情報保護法
- 入学時誓約書
- 学生便覧
- 実習誓約書

1. 個人情報の保護と情報管理

- 1) 患者個人・病棟(スタッフ含む)・病院・学校(教員含む)に関する話題は、口外しない。
上記の情報や自分の感想等を、インターネット上や自己の携帯電話類へ流用・公開しない。
- 2) 患者の病状や経過・治療や指示に関することは、勝手に答えない。
- 3) 患者情報の記載されている記録類の管理は厳重にする。
- 4) 学生が記載する実習記録は、患者個人が特定されないよう、以下のように表記する。
(1) 患者名前は、1例目「A」2例目「B」・・・とする。
(2) 年齢は以下のように記載する。
例 62歳 → 「60歳代 前半・後半」
- 5) 実習記録は、原則、学校より持ち出さない。実習記録を用いて学習する場合は、実習施設や学校内で行い、管理は厳重にする。
- 6) 実習記録は貸し借り・複写(書き写しやコピー)してはならない。また、実習関連情報(施設詳細や学生配置表等)も実習に関する資料の扱いとなるため、無断で持ち出し複写・写真撮影してはならない。
- 7) 電子カルテの取り扱いに関し、以下を厳守する。
(1) 電子カルテの使用は受け持ち患者のカルテの閲覧のみとする(不要なアクセスはしない)。
(2) 指定場所で閲覧し、原則として指導教員の管理のもとで行う。
(3) 学生は、患者情報を印刷・コピーしてはならない。
(4) 閲覧中にその場を離れる場合は、必ずログオフを確認する。
- 8) 実習記録紛失等、情報管理に関して問題が生じた場合は、直ちに指導教員または指導者に報告・相談し、看護学生として最善の行動をとる努力をする。

2. 実習記録の取り扱い

1) 実習前の取り扱い

- (1) 学生は以下を準備する。

実習記録 / 紙ファイル(色は問わない) / インデックス

- (2) 実習記録の用紙は、各実習前に配布する。

学生は各自でコピーし、実習記録用紙の準備を行う。コピーする際は、看護専門学校で行い、その他教員が指示する場所以外で行ってはならない。

2) 実習中の取り扱い

- (1) 全ての実習記録は常に1つの紙ファイルに綴じて保管し、毎日実習場に持参する。
- (2) ファイルは、表紙や背表紙を右記のようにして準備し、実習記録用紙の種類毎にインデックス

○ ○ 実 習 ○ グ ル ー プ 学 籍 番 号 氏 名	○ ○ 実 習
	臨地実習期間： 年 月 日 ~ 月 日
	提出日： 年 月 日 ○ : ○ ○
	○ グ ル ー プ 学籍番号： 学生氏名：

をつける。

(3)実習記録は本人の手書きのみとする。

パソコン・携帯電話等の電子機器端末での記載やメモは、情報管理の観点から行ってはならない。

(4)実習記録は学習目的以外に使用してはならない。

3)実習終了時の取り扱い

(1)実習記録は実習終了時に指定された時間に最終提出する。

(2)実習中に使用したメモ・病棟資料・書き損じの用紙等は、全て実習終了後にファイルに綴じて提出(回収)する。

(3)実習記録の提出については実習評価に関わるため、前項「ⅤⅡ 実習評価」を確認し、行動する。

4)実習記録以外にレポートの提出を求められた場合、提出方法は学生便覧を「レポート提出について」に準じてレポート作成を行う。

3. 実習に臨む態度

- 1)事前学習を行った上で、主体的・意欲的に実習に臨む。
- 2)看護学生として、必ず必要な「確認」「相談」「連絡」「報告」を行う。
- 3)場に相応しい言葉遣いを意識し、礼節を重んじる。
- 4)実習場を離れるときは、必ず指導者または指導教員の許可・時間の確認を受ける。
- 5)自己の健康管理に十分注意する(学生便覧「健康管理について」参照)
- 6)自己の言動に責任を持ち、協調性と思いやりのある態度を心がける。
- 7)患者及びその家族と個人的な関わりをしない。
- 8)日々誠実に振り返りを行い、自己課題の克服に努める。
- 9)学内・病院、施設内外を問わず禁煙を厳守する。
- 10)患者や家族から金品類は受け取らない。

XI 実習カンファレンスについて

1. 実習カンファレンスの目的

- 1) 協同学習の場とし、各自の学習・方向性を知る機会となり、自己の学習の課題が明確とする。
- 2) 個人体験を共有する場となり、対象理解をはじめ、看護に対する考え方を深める機会とする。
- 3) 論理的思考及び健全な看護観や専門的職業倫理観を育てる場とする。
- 4) 相手の意見を聴く態度を養い、自分の意見を正確に伝える力を育て、相手を理解・尊重する人間関係形成の訓練の場とする。
- 5) リーダーシップやメンバーシップを学ぶ場とする。

2. 原則、2週目に「テーマカンファレンス」を実施する。

	領 域	テーマ(例)
専 門 Ⅱ	成人看護学	I 手術室・救命ICUにおける看護の役割
		II 1. チーム医療における看護師の役割について 2. 対象に必要な社会の支援体制・制度について
		III 自己効力感が実感できる関わり方
	老年看護学	I 高齢者のコミュニケーションについて
		II 介護老人保健施設の特徴と看護の役割について
		III 介護老人福祉施設の特徴と看護の役割について
	小児看護学	カンファレンスを通し、小児の成長・発達、家族を含めた看護の実際を深める
	母性看護学	私の母性観について:実習の学びを基に自己の母性観について考えを深める(倫理観・生命の重さ・人間への理解)
	精神看護学	1. 鍵の管理(落とさない・なくさない・盗られない) 2. 事故防止(危険物の管理・他害(暴力含む)自傷) 3. 実際に見学・体験したこと、看護師からの経験談を含めディスカッションで共有する
統 合	在宅看護論	各訪問ステーション・地域包括支援センターの特性(対象理解・利用制度等)を理解する

3. 実習カンファレンスの運営について

1) 事前準備

- (1) 指導教員や指導者の助言を受けながら、全員で主体的にテーマを決定出来るようにする。
- (2) 必要時、テーマに関する資料の準備をする。
- (3) メンバーが司会と書記を交代で経験するように工夫し、開始前に事前に教員に報告する。

2) 司会の役割

- (1) メンバーの考えや能力が発揮できるように進める。
- (2) テーマとした理由を明らかにする。
- (3) 全員が発言できるように進める。
- (4) 意見の対立時は相違点を明確にする。
- (5) 時間の配慮をする。
- (6) 最後に指導者や指導教員の助言を求める。
- (7) 討議内容をまとめる。
- (8) 次回の予定を明らかにし、担当者を確認する。

3) 書記の役割

- (1) カンファレンス開催日時・出席者・場所・テーマを指定用紙又はノートに記載する。
- (2) 発言者や議事内容を明確に記載する。
- (3) 書記は討議内容をまとめ、指導教員不在の場合は終了後、記録と共に報告する。

4) メンバーの役割

- (1) テーマについて主体的に事前学習をして参加する。
- (2) テーマに対して自分の意見や考えをもって参加し、積極的に発言する。
- (3) 発表者の意見を互いによく聴き尊重し、自己の学びを深める。

カンファレンス計画書

実施日時	年 月 日 () 時 分 ~ 時 分		
場 所			
出席者	() 年生 () グループ () 名 担当教員 () 先生 () 師長、() 主任、() 指導者		
テーマ			
目 的			
事前準備	復習すべき科目、予習・復習するとい文献・講義資料、活用できる実習関係書類や記録など		
役割分担	司会 () 計時 () 書記 () 司会は、カンファレンス同日朝までに実施場所、時間を確認し、メンバーに報告する		
流 れ	区分	項 目	時間配分
	導入		分
	展開		分
	まとめ		分
	合 計		分

カンファレンス記録	
<話し合いの経過>	
本日の まとめ	

XII 実習上の注意事項

1. 実習中の身だしなみ

- 1) 学校指定のユニホームを正しく着用する。
- 2) IDカードは原則、左胸に必ずつける。
- 3) カーディガンは原則、病棟内では着用しない。
- 4) 原則、ユニホーム姿で施設外に出てはならない。
- 5) 髪色、髪型については「学内演習オリエンテーション」に則り、整える
- 6) 手足の爪は短く清潔に保つ。ネイルカラーは禁止。
- 7) 化粧は学生らしく節度あるものとする。
- 8) 香水はつけない。香料の強い柔軟剤は使用しない。
- 9) 装飾品類(ネックレス、指輪、ピアス、アンクレット、カラーコンタクトレンズ、瞳を強調するコンタクト、エクステーション、つけまつ毛、つけ爪等)の装着はしない。
- 10) 下着等がユニホームの上から目立たないように注意する。
- 11) ユニホームは清潔でシワのないものを着用する。
- 12) 実習中使用したユニホームは以下のように取り扱う。
 - (1) 汚れたユニホームは必ず別のものと区別し持ち帰る。
 - (2) 消毒の方法
熱湯消毒: ①80℃ 10 分間浸し洗濯 ②60℃ 30 分間浸し洗濯
消毒薬: 10%次亜塩素酸ナトリウムを0.005%にして30 分浸し洗濯

2. 施設利用

- 1) 病院・施設内を通行する時は、患者を優先し他者の通行を妨げないようにする。
- 2) 病院・施設内の食堂・売店を利用する時は、患者さん及び職員を優先し迷惑行為をしない。
- 3) 携帯電話類は実習場所へ持ち込まない。
- 4) 規定の実習時間以外は無許可で施設に出入りしてはならない。
- 5) 実習生として望ましい態度で利用し、その他注意事項は実習施設の規則に準ずる。

3. 更衣室・カンファレンス室の利用

- 1) 更衣室使用方法は、実習施設の規則に準ずる。
- 2) 借用する更衣室のロッカーの鍵は、紛失しないように自己管理し、指示により下校時には所定の場所に返却する。
- 3) 施設の備品の不良やロッカーの破損などは、速やかに担当教員に申し出て対処する。
- 4) ロッカーは施錠し貴重品・私物管理は自分で責任をもって行う(不必要な貴重品は持参しない)
- 5) 更衣室・カンファレンス室を最後に退出する場合、整理整頓・電気器具類の電源を切る。
忘れ物がないことを確認し、戸締りを確実にし帰宅する。(必要時チェック表に記入する)

4. 看護援助実施時の注意点

- 1) 看護援助を実施する場合は、原則、指導者もしくは指導教員の見守りのもとで実施する。
- 2) 事前に十分に技術練習を行い、患者の安全確保に努めて実施する。

5. グループリーダーの役割

- 1) 欠席・遅刻・早退などグループメンバーの出席状況を、健康状態を把握し、報告する。
- 2) 実習開始日・実習終了日に病棟への挨拶を行う。
- 3) 実習が円滑に進行するように指導者・指導教員・メンバー間の連絡・伝達・調整を行う。
- 4) 必要に応じリーダーシップを発揮してグループダイナミクスが形成できるよう努める。

XⅢ 臨地実習における安全管理

1. 医療安全教育

「医療安全」は、看護援助の根幹を貫く考え方・技術であり、本学の方針に基づき、医療安全教育を充実・徹底すべく、入学当初から段階的に、かつ反復しつつ、さらに発展的に学修する機会をあらゆる科目の中で設けている。患者の安全を守る看護の実践の場である臨地実習においては、リアリティーをもって、以下のような目標で段階的に学修をすすめていく。

<1年次>

- 1) 医療安全における基本的知識・技術を学ぶ
- 2) 看護技術を提供していくために、安全を意識して計画を考え、実施し、振り返ることができる
- 3) 報告・連絡・相談・確認の基本的態度を学ぶ

<2年次>

- 1) 看護援助の実際に潜むヒヤリハットに気づくことができる/振り返ることができる
- 2) 医療安全を意識したコミュニケーションの重要性に気づく

<3年次>

- 1) 援助場面における危険予知を行い、危険を未然に防ぐ行動を身に着けることができる
- 2) 医療安全を意識したコミュニケーションを行うことができる
- 3) 医療安全が組織・集団として環境調整され、チームとして取り組む風土を育むことの重要性を学ぶ

2. 臨地実習前の各オリエンテーションにおいて、具体的な臨地実習の場面を想起しながら、医療安全を具体的にイメージ化・意識化していく機会をもつ。

専門 Ⅰ	基礎看護学 実習	I	臨床看護場面における安全の意味と重要性を理解する	医療安全対策部師長
		Ⅱ	臨床看護実践の場面におけるヒヤリハットの気づきがもてる リスクトレーニング	医療安全対策部師長
専門 Ⅱ	成人看護学 実習	I	臨地で遭遇する「診療の補助」を受ける患者の安全について考える	担当教員
		Ⅱ	回復過程で起きやすい「転倒・転落のリスク」について考える	担当教員
		Ⅲ	指導の際の注意事項（指導内容の伝え方・対象への尊重の表現の仕方）	担当教員
	老年看護学	I	高齢者の移動・移送について	担当教員
		Ⅱ	介護老人保健施設における医療安全について（高齢者リハビリ）	担当教員
		Ⅲ	介護老人福祉施設における医療安全について（レクリエーション時の安全対策）	担当教員
	小児看護学		1. 保育園実習で起こりやすい事故について 2. 小児用ベッドからの転倒・転落について	担当教員
	母性看護学		新生児取り違い防止（母児ネームバンド・新生児室入退室管理） 児に対する安全（感染防止対策・情報管理） 育児における安全（沐浴時・授乳時・睡眠時） 母親への安全教育	担当教員
	精神看護学		1. 鍵の管理（落とさない・なくさない・盗られない）	担当教員

		2. 法的根拠 3. 事故防止(危険物の管理・他害(暴力含む)自傷)	
統	在宅護論実習	在宅における医療安全について (感染対策・他職種との連携について)	担当教員
合	看護の統合と実践	組織・チームで行う医療安全	医療安全対策部師長

3. 実習の期間中、学生が体験したヒヤリハット／インシデント・アクシデントの体験をグループまたはクラスで共有、分析・検討する。これにより、今後同様の事象を未然に防ぐとともに、臨地実習における安全管理意識を向上させていく。(必要に応じて行う)

4. 実習中におけるインシデント・アクシデントとは

～厚生労働省「医療安全推進総合対策・医療案円対策検討会議」より引用～

「アクシデント」は通常、医療事故に相当する用語として用いる。(中略)同義として「事故」を用いる。「インシデント」は、日常診療の場で、誤った医療行為などが患者に実施される前に発見されたもの、あるいは誤った医療行為などが実施されたが結果として患者に影響を及ぼすに至らなかったものをいう。(中略)同義として「ヒヤリハット」を用いる。 (「ヒヤリハット」は「インシデント」に含まれる)

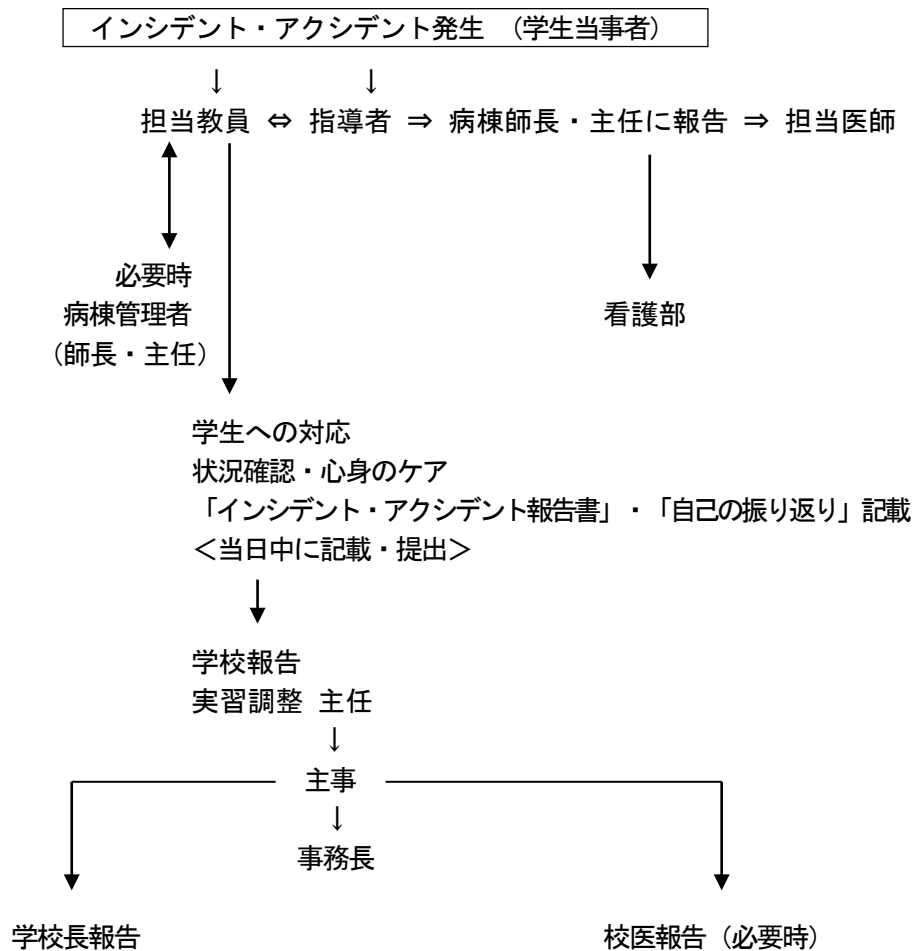
<インシデント・アクシデントの例>

- 1) 学生に針刺し事故及び血液汚染による感染の可能性が発生した場合
- 2) 学生が感染症に罹患した場合、もしくは実習施設において感染症が発生し学生に罹患の可能性がある場合
- 3) 実習記録を紛失した場合
- 4) 学生が患者や家族の所有物を破損・遺失した場合
- 5) 学生が実習施設の設備・備品の紛失や破損をした場合
- 6) 実習途上・帰路において学生が好ましくない言動や行動があった場合

5. インシデント・アクシデント発生時の対応・報告ルート

- 1) インシデント・アクシデント発生時は、直ちに指導者と担当教員(看護師長)に状況報告をする。担当教員が臨地に不在の場合は、学校に電話(学生が病棟に依頼して)で報告し、指導者(看護師長)の指示を受ける。

2) 報告ルート



3) 報告書の記載と振り返り

臨地実習において「インシデント・アクシデント」及び「ヒヤリハット」のニアミスを振り返り 対策を立てることは、将来の医療事故防止に繋がる重要な学習となるため、以下の手順で振り返りを行う。

- ①当該学生は「インシデント・アクシデント報告書」及び「自己の振り返り」の用紙を教員から受け取り、記載する。
- ②教員は報告書を確認し、同報告書の教員記載欄に記載する。
- ③学生は教員と共に、報告書をもとに振り返りを行い、振り返り内容を学校に報告する。
- ④教員の指示により、グループ内、もしくはクラス内で事象を共有し、分析・検討し、安全管理 の意識・技術向上に努める。

自己の振り返り

学年 学籍番号 氏名

1. 事実として何が起こったか

日にち: 月 日 () 時間: 場所:

2. なぜそうなったか

3. 何が問題か

4. どうすればその事象が防げたのか(または、回避できなかったらどうなっていたか)

5. 今後どのように考え、どのように生かしていくか

記載日 年 月 日担
当教員サイン:

インシデント・アクシデント報告書

提出日: 令和 年 月 日

報告者	学籍番号	氏名
実習場所	()看護学実習 ()病棟 その他()	
発生日時 発生場所	☐ 病室 ☐ 学生控室 ☐ 洗面所 ☐ 風呂場 ☐ トイレ ☐ その他()	
発見者 気づいた人	☐ 自分 ☐ 指導者(NS) ☐ 教員 ☐ 患者 ☐ 家族 ☐ その他()	
種類	☐ 環境	☐ 破損 ☐ 紛失 ☐ 接遇 ☐ 説明不足 ☐ その他()
	☐ 清潔/更衣	☐ 熱傷 ☐ 溺水 ☐ 切傷 ☐ その他()
	☐ 食事	☐ 誤嚥 ☐ 誤配膳 ☐ その他()
	☐ 移動	☐ 転倒 ☐ 転落 ☐ 車椅子での移動 ☐ ドレーン等抜去 ☐ その他()
	☐ 排泄	☐ 膀胱留置カテーテル抜去 ☐ その他()
	☐ 与薬	☐ 薬剤間違い ☐ 患者間違い ☐ 忘れ ☐ その他()
	☐ 検査/処置	☐ 患者間違い ☐ 針刺し ☐ その他()
	☐ その他	()
＜インシデント・アクシデントの概要＞ 対象患者、どのような状況で、どのように起きたのか、発生までの状況		
＜対処方法＞ 発生から結果まで、どのように対処したのか？		
＜原因分析＞ 何故そのようなことが起きたのか ☐ にチェックをして詳細も記入する		
心理面	☐ ゆとりの欠如 ☐ 焦り ☐ 思い込み ☐ 緊張 ☐ うっかり ☐ 勘違い	
	☐ 注意力散漫 ☐ 注意不足 ☐ その他()	
人間関係	☐ 気遣い ☐ 断れない ☐ 安易に引き受けた ☐ その他()	
生活面	☐ 睡眠不足 ☐ 寝坊 ☐ 疲労 ☐ 多忙 ☐ その他()	
知識面	☐ 基礎知識不足 ☐ 統合力不足 ☐ その他()	
技術面	☐ 確認不足 ☐ 練習不足 ☐ 手抜き ☐ その他()	
その他	()	
＜詳細＞		
＜今後の対策＞ 今後同じことを起こさない為にどうしたらよい？		
＜教員記入欄＞		
教員氏名:		印

XIV 感染予防対策について

1. 医療従事者の一員として院内感染予防を徹底する

- 1) 常にマスク、ゴーグルを着用する。
- 2) 手指消毒剤を携帯し、手洗いの5つのタイミング(患者に触れる前／清潔・無菌操作の前／体液に曝露された可能性がある場合／患者に触れた後／患者周辺の物品に触れた後)において確実に手指衛生を行う。
- 3) 登校前に必ず体温を測定し、セコム安否確認への報告とともに、実習出席表へ体温を記載する。体調に異常がある場合または同居家族に体調に異常がある場合は、4を参考に、登校せず学校に電話で報告をして、適切な対処行動をとる。

2. 臨地実習に臨むにあたり、実習生を感染から守り、病原菌の伝播・感染の拡大を防ぐため、

麻疹・風疹・水痘・流行性耳下腺炎の抗体価が、原則として基準値を満たしていることが要件になっている。そのため、臨地実習前に、麻疹・風疹・水痘・流行性耳下腺炎のウイルス抗体価を確認し、必要に応じてワクチン接種を済ませておく。

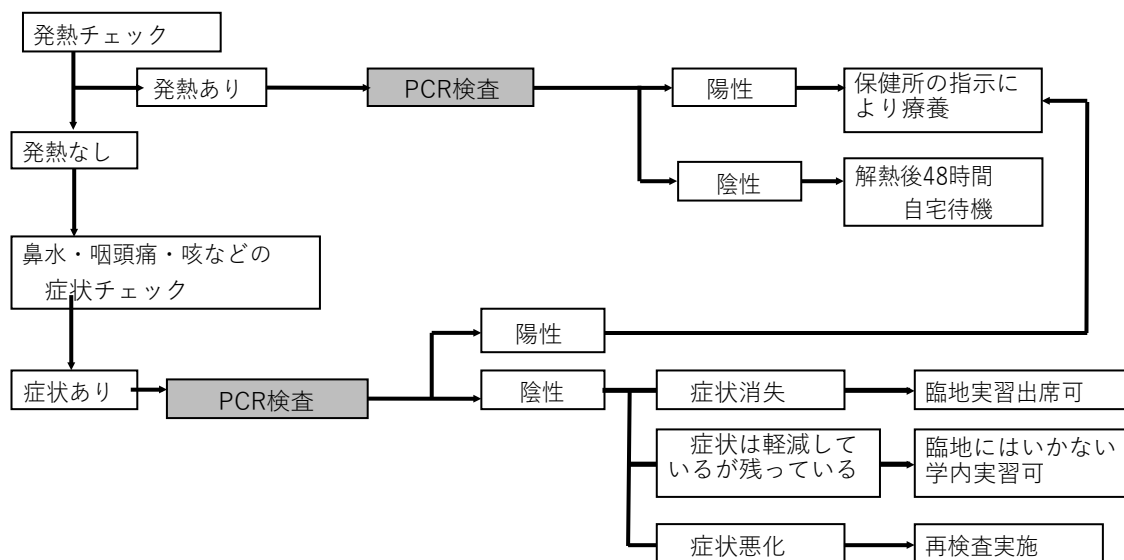
3. COVID-19等の新型ウイルス感染症に対しては、大学本部からの指示、各実習施設の取り決めに従って、感染予防策を遵守する。

実習開始2週間前からの体温・体調確認、行動確認の記録の提出を義務付ける。また、実習開始直前に、PCR検査を実施するので、全員検査を受け、陰性を確認して実習しなければならない。

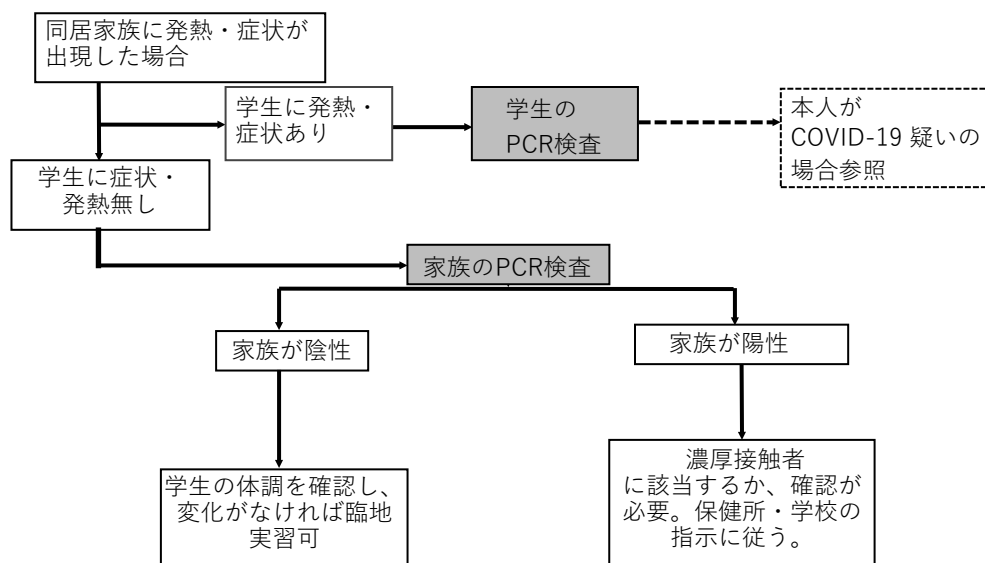
4. 症状出現時の対策

<COVID-19 関連>

【本人がCOVID-19疑いの場合】



【同居家族がCOVID-19疑いの場合】



＜感染性胃腸炎などの場合＞

- 1) 学生の嘔吐・下痢などの消化器症状が消失してから24 時間は自宅待機とする。

X V 災害時対応について

1. 院内実習の場合

- 1) 地震等の被災直後は、該当施設の指示で行動する。
担当教員、施設管理者・実習指導者の指示に従い行動する。
- 2) 教員不在の場合は実習指導者の指示に従い、自身の安全を確保する。
学生リーダーは学生の安全を確認後、当該施設の実習指導者及び学校に安否を報告する。
- 3) 災害時は学校より安否確認システムにて行動の指示と安否確認の連絡が届くので、それに則して行動する。

2. 学外実習等の場合

- 1) 被災直後は、該当施設の指示で安全な場所で待機し、施設の指示に従い行動する。
- 2) 学校へ連絡する(できる手段を使い連絡を行う)。
- 3) 災害時は学校より安否確認システムにて行動の指示と安否確認の連絡が届くので、それに則して行動する。

緊急時の連絡

看護専門学校 03-3857-0120(代表)

メールアドレス kansen.jimu.cf@twmu.ac.jp

看護者の倫理綱領

2021 年 3 月 15 日 日本看護協会

前 文

人々は、人間としての尊厳を保持し、健康で幸福であることを願っている。看護はこのような人間の普遍的なニーズに応え、人々の生涯にわたり健康な生活の実現に貢献することを使命としている。

看護は、あらゆる年代の個人、家族、集団、地域社会を対象としている。さらに、健康の保持増進、疾病の予防、健康の回復、苦痛の緩和を行い、生涯を通して最期まで、その人らしく人生を全うできるようその人のもつ力に働きかけながら支援することを目的としている。

看護職は、免許によって看護を实践する権限を与えられた者である。看護の实践にあたっては、人々の生きる権利、尊厳を保持される権利、敬意のこもった看護を受ける権利、平等な看護を受ける権利などの人権を尊重することが求められる。同時に、専門職としての誇りと自覚をもって看護を实践する。

日本看護協会の『看護職の倫理綱領』は、あらゆる場で实践を行う看護職を対象とした行動指針であり、自己の实践を振り返る際の基盤を提供するものである。また、看護の实践について専門職として引き受ける責任の範囲を、社会に対して明示するものである。

本 文

1. 看護職は、人間の生命、人間としての尊厳及び権利を尊重する。
2. 看護職は、対象となる人々に平等に看護を提供する。
3. 看護職は、対象となる人々との間に信頼関係を築き、その信頼関係に基づいて看護を提供する。
4. 看護職は、人々の権利を尊重し、人々が自らの意向や価値観にそつた選択ができるように支援する。
5. 看護職は、対象となる人々の秘密を保持し、取得した個人情報は適正に取り扱う。
6. 看護職は、対象となる人々に不利益や危害が生じているときは、人々を保護し安全を確保する。
7. 看護職は、自己の責任と能力を的確に認識し、実施した看護について個人としての責任を持つ。
8. 看護職は、常に、個人の責任として継続学習による能力の開発・維持・向上に努める。
9. 看護職は、多職種で協働し、よりよい保健・医療・福祉を実現する。
10. 看護職は、より質の高い看護を行うために、自らの職務に関する行動基準を設定し、それに基づき行動する。
11. 看護職は、研究や实践を通して、専門的知識・技術の創造と開発に努め、看護学の発展に寄与する。
12. 看護職は、より質の高い看護を行うために、看護者自身のウェルビーイングの向上に努める。
13. 看護職は、常に品位を保持し、看護職に対する社会の人々の信頼を高めるよう努める。
14. 看護職は、人々の生命と健康をまもるため、さまざまな問題について、社会正義の考え方をもって社会と責任を共有する。
15. 看護職は、専門職組織に所属し、看護の質を高めるための活動に参画し、よりよい社会づくりに貢献する。
16. 看護職は、様々な災害支援の担い手と協働し、災害によって影響を受けたすべての人々の生命、健康、生活をまもることに最善を尽くす。

基礎看護学実習

I. 目 的

各専門領域の基礎となる看護活動に必要な知識・技術・態度の基礎的能力を養う

II. 目 標

1. 対象の入院前の生活環境と、療養環境の実際を知る。
2. 対象への日常生活援助の必要性を理解し基本的な看護について学ぶ。
3. 日常生活援助を通して問題解決思考・対人関係プロセスについて学ぶ。
4. 医療チームにおける看護の役割について理解する。
5. 看護への関心を高め、看護者としての基本的態度を養う。

III. 構 成

1. 基礎看護学実習(3単位:135 時間)

1)基礎看護学実習Ⅰ(日常生活援助) 1年次 … 1単位(45 時間)

2)基礎看護学実習Ⅱ(看護過程展開) 2年次 … 2単位(90 時間)

基礎看護学実習Ⅰ

I. 目的

対象を取り巻く療養環境を知り、基本的ニーズの充足を図るための看護について学ぶ。

II. 目標

1. 入院を必要とする対象の療養環境を理解することができる。
2. 対象理解のためのコミュニケーションをとることができる。
3. 対象の基本的ニーズが理解でき、入院や健康障害が対象の日常生活にもたらす影響について知ることができる。
4. 対象の日常生活援助の必要性和安全・安楽を考え、指導者と共に援助を実施することができる。
5. 医療チームにおける看護の役割について知ることができる。
6. 看護への関心を高め、看護者としての基本的態度を学ぶことができる。

III. 行動目標

1. 入院を必要とする対象の療養環境を理解することができる。
 - 1) 病棟・病室の構造を知ることができる。
 - 2) 対象の1日の過ごし方、対象の受けている治療・処置、援助を理解することができる。
 - 3) 療養環境で工夫されている所や改善が必要な所を考えることができる。
 - 4) 対象を取り巻く家族・同室者・医療従事者等の関係を知ることができる。
2. 対象理解のためのコミュニケーションをとることができる。
 - 1) 対象に関心を持ち、思いや考えを聴くことができる。
 - 2) 場の状況に応じた言葉かけや配慮をすることができる。
 - 3) 対象の基本的ニーズを把握するための意図的会話をすることができる。
3. 対象の基本的ニーズが理解でき、入院や健康障害が対象の療養生活にもたらす影響について知ることができる。
 - 1) 対象がおかれている療養環境について入院前との違いを知ることができる。
 - 2) 入院生活や健康障害が日常生活にどのように影響しているかを知ることができる。
4. 対象の日常生活援助の必要性和安全・安楽を考え、援助を実施することができる。
 - 1) 対象の現状を踏まえた日常生活援助を考えることができる。
 - 2) 対象の反応を見ながら、安全・安楽をふまえて指導者と共に実施することができる。
 - 3) 実施または見学した内容を振り返ることができる。
5. 医療チームにおける看護の役割について知ることができる。
 - 1) 対象を取り巻く医療チームの役割を知ることができる。
 - 2) 医療チームにおける看護師の役割について知ることができる。
6. 看護への関心を高め、看護者としての基本的態度を学ぶ。
 - 1) チームやグループメンバーと協力して行動することができる。
 - 2) 看護に携わる者として、誠実で責任ある行動をとることができる。
 - 3) 主体的・積極的に学習することができる。
 - 4) 対象への関心を持ち、対象に合った看護を実践するために必要な自己課題を明確にすることができる。

IV. 行動目標・実習内容

目標	行動目標	内容	方法・留意点
1. 入院を必要とする対象の療養環境を理解することができる。	1) 病棟・病室の構造を知ることができる。 2) 対象の1日の過ごし方、対象の受けている治療・処置、援助を理解することができる。 3) 療養環境で工夫されている所や改善が必要な所を考えることができる。 4) 対象を取り巻く家族・同室者・医療従事者等の関係を知ることができる。	(1) 病棟の構造・設備・物品配置を知る。病棟の週間スケジュール・日課を知る。 (2) 生活空間(処置室・洗面所・トイレ等) 病室の広さ、ベッドの大きさ、高さ、間隔を知る。 (3) 療養環境(温度・湿度・採光・照明・音・色彩・空気・プライバシー)を観察する。 (1) 対象のタイムスケジュールを知る。 (2) 行われている検査・処置を知る。 (3) どのような援助が必要かを知らる。 (1) 安全で快適な入院生活のための環境を考える。 (2) 対象の立場になり、不便さ・不自由さ・危険はないか、改善が必要な点を考える。 (1) 対象と家族の関係(面会時間、回数、家族への思い)を知る。 (2) 同室者との会話や様子を観察し、同室者への思いを知る。 (3) 医師・看護師・看護助手・放射線技師・薬剤師・栄養士・理学療法士等との関わりを知る。	病院・病棟のオリエンテーションを受ける。 病棟内・外、対象より許可が得られた病室内を観察する。大部屋・個室の違いを観察する。 入院中の対象の1日の生活を知る(様式1)。 指導者・看護師につき対象に行われている処置・援助を見学する(シャドーイング)(様式1)。 対象に行われている処置・援助の必要性を考える(様式2)。 対象の生活空間を観察し、その思いを聴く。 指導者・看護師につき、対象に関わり・援助を通して観察する。
2. 対象理解のためのコミュニケーションをとることができる。	1) 対象に関心を持ち、思いや考えを聴くことができる。 2) 場の状況に応じた言葉かけや配慮をすることができる	(1) 表情、挨拶、敬語で話すなど基本的マナーで対象の話を聴く。 (2) 対象の話す内容を明確化、言い換え、要約しながら話を聴く。 (3) 言語的・非言語的コミュニケーションを活用して話を聴く。 (1) 看護師がコミュニケーションを通して人間関係を発展させている場面を積極的に観察する。 (2) 声の掛け方、声の大きさ、スピード、視線の高さ、対象との距離、タッチングなどを考えコミュニケーションをとる。 (3) オープンクエスチョン、クローズドクエスチョンを選択し質問する。 (4) 対象を尊重した態度、言葉を選び、正しい敬語、丁寧語を使うように	指導者・看護師のコミュニケーション方法を見学し対象の反応を観察する。 コミュニケーションの特徴を理解し実践する。

	3) 対象の基本的ニーズを把握するための意図的会話を行うことができる	する。 (1) 必要な情報を意図的に収集できる。 (2) 対象の表情・反応から対象の思いを推察する。 (3) 対象に負担なくコミュニケーションが図れたかを日々の記録で振り返る。	コミュニケーションを通して主観的情報を収集するが一方的にならないよう注意する。
3. 対象の基本的ニーズが理解でき、入院や健康障害が対象の療養生活にもたらす影響について知ることができる。	1) 対象がおかれている療養環境について入院前との違いを知ることができる。 2) 入院生活や健康障害が日常生活にどのように影響しているかを知ることができる。	(1) 電子カルテの病名、経過、検査内容、検査結果、社会背景、治療・内服薬、看護記録、フローシート等から情報を収集する。 (2) 対象から入院に至る経過、治療に関する思い等を情報収集する。 (3) 意図的なコミュニケーションで入院前後の情報(S 情報/O 情報)を得る。 (1) 対象の発達段階の特徴を知る。 (2) 基本的なニーズが満たされているか、入院によりどのようなニーズが満たされていないかを把握する。	電子カルテの説明を受け、必要な情報を収集する。 入院生活や健康障害(疾患・治療・処置・検査等)が対象の日常生活へもたらす影響も含めて記録する。 未履修の疾患や治療等は指導者・教員の助言を受け学習する(様式4)。 ヘンダーソンの 14 項目を基本に対象理解ができるように情報収集する(様式2)。
4. 対象の日常生活援助の必要性和安全・安楽を考え、援助を実施することができる。	1) 対象の現状を踏まえた日常生活援助を考えることができる。 2) 対象の反応を見ながら、安全・安楽をふまえて指導者と共に実施することができる。	(1) コミュニケーション技術、観察技術を用いてバイタルサインの測定、フィジカルアセスメントを行う。 (2) 治療上の安静度や症状の有無、やADL、習慣や好み等から対象にあった援助方法を考える。 (1) わかりやすく援助内容の必要性和方法を説明し、了承を得る。 (2) 対象の苦痛や体力の消耗を最小限に援助を実施する。 (3) 援助を受ける対象の思いを考えながら実施する。 (4) 思いやりを持ちながら、対象に合わせた声掛けをしながら実施する。 (5) 対象の思いを捉え、必要時計画の変更を行う。 (6) コミュニケーションや援助を通して実施前・中・後の対象の反応や状態を観察する。 (1) 対象の安全・安楽を確保した援	指導者・教員と共にバイタルサインの測定を行う(様式5)。 援助が必要と考えたことを「援助を必要と考えた理由」「援助方法」に記載する。 実施上の安全・安楽に配慮した具体的な援助手順を記載する。 個別性をふまえた具体的な援助手順を考え 5W1H で記載する。 臨床での実践的援助方法を学ぶ。 日常生活援助の実施

	3)実施または見学した内容を振り返ることができる。	助を振り返る (2)対象に行った援助を選択した理由、変更した理由を述べる。 (3)実施した援助の目的が達成できたか振り返る。	は必ず指導者・看護師と共に行う。 援助中・後の対象の様子を安全・安楽の視点で記載する。
5. 医療チームにおける看護の役割について知ることができる。	1)対象を取り巻く医療チームの役割を知ることができる。 2)医療チームにおける看護師の役割について知ることができる。	(1)医療チームメンバー(医師、看護師、薬剤師、栄養士、理学療法士、看護助手等と対象との関わりを見学する。 (1)対象を取り巻く医療チームの中での日常生活に密着している看護師が情報源となり他職種と協働していることを知る。 (2)カンファレンスを通して看護の役割について考えを述べる。	看護師が他職種との関係調整を行っている場面を積極的に観察する。
6. 看護への関心を高め、看護者としての基本的態度を学ぶ。	1)チームやグループメンバーと協力して行動することができる。 2)看護に携わる者として、誠実で責任ある行動をとることができる。 3)主体的・積極的に学習することができる。 4)対象への関心を持ち、対象に合った看護を実践するために必要な自己課題を明確にすることができる。	(1)リーダーは、指導者、教員と密に連絡を行う。 (2)メンバーはリーダーに協力し、グループ内の連絡・報告・相談の連携をとる。 (1)個人情報保護を遵守する。 (口外しない記録物の適切で確実な管理) (2)自己の健康管理を行う。 (1)既習の学習の復習を行う。 ①基礎看護技術(日常生活援助) ②バイタルサイン測定、得られた値の基礎知識 ③フィジカルアセスメントの方法、得られた値の基礎知識 (2)指導内容を振り返り、翌日に活かす。 (1)他者の意見を聞き、自己との違いを知り自己の学びを発展させる。 (2)対象の反応や対象を取り巻く全ての人との関わりから、看護とは何かを考える。 (3)対象に合った看護を実践するために必要な自己課題は何か明確にする。 (4)実習のまとめを通して看護への関心を高める(様式6)。	看護学生も病棟のチームの一員であることを認識し、速やかな報告・連絡・相談・確認を行う。 患者紹介後、テキストや文献を活用し、解剖生理を含む疾患について学ぶ(様式4)。 疑問点は調べ、必要時は質問する。 指導を受ける時はメモをとる。 援助実施後、カンファレンスや日々の記録で感じたことを言葉、文章で表現する(様式3)。 カンファレンスを活用して他学生の対象との関りについて意見交換を行い、問題意識を持てるようにする。

V. 実習方法

1. 実習施設

- 東京女子医科大学病院
- 東京女子医科大学附属足立医療センター
- 東京女子医科大学附属八千代医療センター

2. オリエンテーション

実習内容	時間配分	内 訳	実習時間	備 考
オリエンテーション	6 時間	実習調整1 時間 看護部オリエンテーション1 時間 基礎担当3 時間 医療安全教育1 時間	(時間割を参照)	
臨地実習	35 時間	7 時間×5 日間	8:00～16:00	
実習のまとめ	3 時間		(時間割を参照)	
看護を語る	1 時間	まとめ終了後に実施	(時間割を参照)	
合 計	45 時間			

3. 事前学習

学習内容を参照

4. 実習の進め方

	月 日 ()	月 日 ()	月 日 ()	月 日 ()	月 日 ()	月 日 ()
午前	(臨地) ・病院、病棟 オリエンテーション ・シャドーイング	(臨地) ・情報収集 ・指導者と共に看護援助の実施、見学 ・病床環境の整備 ・ニーズの アセスメント	(臨地) ・情報収集 ・指導者と共に看護援助の見学、実施 ・バイタルサインの測定 ・病床環境の整備 ・カンファレンス 援助計画の立案	(臨地) ・情報収集 ・指導者と共に看護援助の見学、実施 ・バイタルサインの測定 ・病床環境の整備 ・援助計画の実施	(臨地) ・情報収集 ・指導者と共に看護援助の見学、実施 ・バイタルサインの測定 ・病床環境の整備 ・援助計画の実施	(学内) ・実習のまとめ ・記録提出
午後	・患者紹介と病状説明 ・情報収集 ・カンファレンス	・カンファレンス		・カンファレンス	・最終カンファレンス	

5.患者選定基準

- 1)コミュニケーションが可能な患者
- 2)5日間継続して受け持てる患者
- 3)1つでも日常生活援助を要する患者
(環境、姿勢・活動、清潔、衣生活、排泄、飲食、睡眠、休息)

VI. 実習記録

別紙参照

VII. 評価

別紙参照

VIII. 実習記録の提出

令和 年 月 日() 時 分 締切 (時間厳守)

様式 4

基礎看護学実習 I

学籍番号

学生氏名

受け持ち患者の理解

1. 対象: 氏 歳代 性別: 男 女 入院月日:
2. 診断名:
3. 主要症状:
4. 主要症状について原因・誘発・メカニズム・随伴症状・成り行き、
その主要症状が対象の日常生活に与える影響(基本的ニーズ)を関連図で表す

令和 年度 基礎看護学実習Ⅱ評価表

学籍番号: 氏 名 :		実習期間: 令和 年 月 日 () ~ 月 日 () 実習施設: 実習病棟:				
評価項目	評価内容	学生 自己評価	教員評価			
			A	B	C	D
1. 入院を必要とする対象の療養環境を理解することができる。	1) 病棟・病室の構造を知り、対象の生活環境が理解できる		5	4	3	2
	2) 対象の1日の過ごし方、対象の受けている処置・援助が理解できる		5	4	3	2
	3) 生活環境で工夫されている所や改善が必要な所を考えられる		5	4	3	2
	4) 対象を取り巻く家族・同室者・医療従事者等の関係を知る		5	4	3	2
2. 対象理解のためのコミュニケーションをとることができる。	1) 対象に関心を持ち、思いや考えをよく聴くことができる		5	4	3	2
	2) 場の状況に応じた言葉かけや配慮ができる		5	4	3	2
	3) 対象の基本的ニーズを把握するための意図的会話ができる		5	4	3	2
3. 対象の基本的ニーズが理解でき、入院や健康障害が対象の療養生活にもたらす影響について知ることができる。	1) 対象がおかれている生活環境について入院前との違いを述べるができる		5	4	3	2
	2) 入院生活や健康障害が日常生活にどのように影響しているか知る		5	4	3	2
4. 対象の日常生活援助の必要性和安全・安楽を考え、援助を実施することができる。	1) 対象に必要な日常生活援、対象にとっての安全・安楽を考えることができる					
	① 対象に必要な日常生活援助、対象にとっての安全・安楽を考えることができる		5	4	3	2
	② 正確な手技に基づき、対象のバイタルサインの測定ができる		5	4	3	2
	2) 基本技術を用い、対象の反応をみながら安全・安楽をふまえて指導者と共に実施する					
	① 基本技術を用い、安全・安楽をふまえて指導者と共に実施する		5	4	3	2
	② 援助中の対象の反応や状態を観察し、声掛けができる		5	4	3	2
	3) 実施または見学した援助内容を振り返ることができる		5	4	3	2
5. 医療チームにおける看護の役割について知ることができる。	1) 対象をとりまく医療チームの役割を知る		5	4	3	2
	2) 医療チームにおける看護師の役割について知る		5	4	3	2
6. 看護への関心を高め、看護者としての基本的態度を学ぶ。	1) チームやグループメンバーと協力して行動できる		5	4	3	2
	2) 看護に携わる者として、誠実で責任ある行動がとれる		5	4	3	2
	3) 主体的・積極的に学習することができる		5	4	3	2
	4) 看護への関心を深め、課題意識をもって行動できる		5	4	3	2
学生コメント 自己評価を()とした理由		最終評価: A B C D ()点 欠席: ()時間				
教員コメント		(担当 印 教員 学生サイン				

A:よくできた B:だいたいできた C:努力を要する D:かなりの努力を要する

事前学習

学生氏名

	必要な情報		必要な情報
呼吸		睡眠	
体温・ 循環		衣服	
飲食		清潔	
排泄		環境	
姿勢 移動		コミュ ニケー ション	

様式 1 : 基本情報 (データベース)

学生氏名

	年齢	保険の種類：	診断名：		
家族構成 キーパーソン：			主訴：		
			既往歴：		
			入院までの経過（データベース・医師の診療記録参照）		
気質・情動状態：性格（情報源）					
身体的ならびに知的能力	身体的能力				
	身長： cm 体重： kg BMI：				
	月経状態： 日型 順・不順；閉経		入院から受け持つまでの経過（医師の診療録、看護記録参照）		
	アレルギー：無・有；				
	身体機能状態	装填器具・自助具			
	聴覚障害：有・無	補聴器			
	視覚障害：有・無	義眼 眼鏡 老眼鏡 コンタクトレンズ	医師の治療方針および治療内容（日常生活制限含む）（医師の診療記録参照）		
	平衡感覚障害：有・無				
	触覚障害：有・無				
	その他の 感覚障害：有・無	義歯 色盲			
運動能力の 低下・喪失：有・無	義肢 歩行器 杖 車椅子	疾患や治療に対する理解 【患者】			
その他 人工臓器の使用 有・無	ペースメーカー 人工肛門 ブラッドアクセス他	【家族】			
理解力：					
日常生活習慣	食事（飲食）		排泄		活動（姿勢・運動）
	入院前		入院前		入院前
	嗜好：				
	睡眠・休息		清潔・衣服		環境
	入院前		入院前		入院前
職業： _____ 趣味： _____					
入院前の平均的な１日の過ごし方					
0 2 4 6 8 10 12 14 16 18 20 22 24時					

様式2：基本的ニーズ

学生氏名

	主観的情報	客観的情報	アセスメント		主観的情報	客観的情報	アセスメント
呼吸				睡眠			
体温・ 循環				衣服			
飲食				清潔			
排泄				環境			
姿勢 移動				コミュ ニケー ション			

様式3 : 援助計画

月 日 ()

学生氏名

No.

援助項目 _____ 援助の目的	
援助方法（準備・実施・観察内容・片付けまで）	根拠・留意点
振り返り（自身の手順や患者の反応より、対象の安全・安楽・自立の視点より対象にとってこの看護援助は妥当であったかなど）	

援助方法（準備・実施・観察内容・片付けまで）	根拠・留意点
------------------------	--------

様式 4 (日々の記録)

月 日 ()

学生氏名

本日の目標		
計画	修正計画	実施内容
振り返り および 学び (指導者からの助言等)		

様式 5 : 実習のまとめ

学籍番号 _____ 学生氏名 _____

実習で学んだこと

自己の課題について(実習目標を踏まえての課題・自分自身の課題)

フローシート

学籍番号 _____

学生氏名 _____

R (回/分)	P (回/分)	BT (°C)	BP (mmHg)	／ ()	／ ()	／ ()	／ ()	／ ()	／ ()	／ ()
60	140	40	160							
50	120	39	140							
40	100	38	120							
30	80	37	100							
20	60	36	80							
10	40	35	60							
尿	回数									
	尿量 (mL) * 測定者									
便回数										
食事量 食事内容形態: * 主食副食を分数で記載			朝							
			昼							
			夕							

- ① ↑この欄に受け持ち患者に必要な項目を記入して良い。
 ② 体温37°Cの線上を赤い線にしない。
 ③ 呼吸: Rは黒、脈拍: Pは赤、体温: BTは青 血圧: 緑で示す

基礎看護学実習Ⅱ

I. 目的

対象の基本的ニーズを捉え、看護過程の展開を通して、個別性のある基礎的看護実践能力を養う

II. 目標

1. 対象の全体像より看護問題を抽出することができる。
2. 看護計画を立案し、実施・評価することができる。
3. 対象との良好な人間関係を築くことができる。
4. 医療チームにおける看護の役割を知ることができる。
5. 看護者としての基本的な態度を学ぶ。

III. 行動目標

1. 対象の全体像より看護問題を抽出することができる。
 - 1) 対象の基本的ニーズに基づき情報を収集することができる。
 - 2) 対象の情報から基本的ニーズの充足・未充足を考えることができる。
 - 3) 対象の基本的ニーズが、病状・病態生理からどのような影響を受けているか考えることができる。
 - 4) 関連図を用いて、対象を多角的に理解することができる。
 - 5) 全体像から看護問題を抽出することができる。
 - 6) 抽出した看護問題の優先度を考えることができる。
2. 看護計画を立案し、実施・評価することができる。
 - 1) アセスメントをふまえ、対象を尊重した看護目標を設定することができる。
 - 2) 日常生活上のニーズを充足するための看護計画を具体的に立案することができる。
 - 3) 対象の安全・安楽・自立を考え、実施または見学をすることができる。
 - 4) 立案した看護計画を、対象の反応をふまえ評価し、追加・修正をすることができる。
3. 対象との良好な人間関係を築くことができる。
 - 1) 対象の思いや意見を傾聴することができる。
 - 2) 自分の思いを、適切な表現で伝えることができる。
 - 3) 対象に必要な説明ができ、同意を得ることができる。
 - 4) 対象との関係を振り返り、良好な人間関係を築くことができる。
4. 医療チームにおける看護の役割を知ることができる。
 - 1) 対象が必要としている医療チームの職種と看護師の役割を理解することができる。
5. 看護者としてよりよい看護を考えるための基本的な態度を学ぶ。
 - 1) グループメンバーと協力して行動することができる。
 - 2) 看護に携わる者として、誠実で責任ある行動をとることができる。
 - 3) 主体的・積極的に学習することができる。
 - 4) 対象への関心を持ち、対象に合った看護を実践するために必要な自己課題を明確にすることができる。

IV. 実習目標・学習内容

目 標	行動目標	学習内容	方法・留意点
1. 対象の全体像より看護問題を抽出することができる。	1) 対象の基本的ニーズに基づき情報を収集することができる。 ・データベース ・S情報 ・O情報 2) 対象の情報から基本的ニーズの充足・未充足を考えることができる。 3) 対象の病状を、病態生理に基づいて、日常生活に及ぼしている影響を考える事ができる。 4) 関連図を用いて、対象を多角的に理解することができる。 5) 全体像から看護問題点を抽出することができる。 6) 抽出した看護問題の優先度を考えることができる。	(1) 患者とのコミュニケーションを通し、S情報(主観的情報)を収集する。 (2) 観察技術を用い、患者から直接O情報(客観的)を収集する。 (3) 看護記録、カルテ、経過表、クリティカルパスなどから、O情報(客観的情報)を収集する。 (4) 得られた情報を、様式1(データベース)、様式2(S情報、O情報)に、専門用語を用い記載する。 (1)(発達課題の知識を含めた)基本的知識に基づき、得られた情報から基本的ニーズが不足されているのか正常から逸脱しているか、看護の必要があるかの分析・判断する。 (1)(2)で分析した基本的ニーズと病態との関連性を明らかにする。 (1)様式3で、様式1と様式2を、疾患の成り立ちや現在起きている現象(顕在する情報)や今後、起こりうる現象(潜在する情報)を、系統立てながら関連図に示す。 (2)様式3の関連図上で、(顕在または潜在する)看護上の問題となる事柄を抽出し、コードナンバーを付ける。 (1)様式4の看護問題用紙に、『コードナンバー』『関連因子』『看護問題(顕在問題、潜在問題)』を記載する。 (1)記載した看護問題に、重要で急を要する順に優先度をつける。優先度の決定については、マズローの階層を参考にする。 (2)自分の価値観・信念と他者の価値観・信念は異なることを念頭におき、導き出した看護が、対象の思いや希望と合致しているか考える。	指導者から対象の病状の説明を受け、紹介を受ける。 得られた情報を、様式1(データベース)、様式2(S情報、O情報)に、専門用語を用い記載する。 分析した基本的ニーズの未充足と病態との関連性を明らかにする。 関連図上で、(顕在または潜在)看護上の問題を抽出する。 看護問題を『コードナンバー』『関連因子』『看護問題(顕在問題、潜在問題)』を明確に記載する。優先順位の決定はマズローの階層を用いる。
2. 看護計画を立案し、実施・評価することができる。	1) アセスメントをふまえて、対象を尊重した看護目標が設定することができる。	(1) 様式1・2・3をふまえて様式4の看護問題に対して、その問題が解決、緩和したときに、患者がどうあるべきかという目標を考え様式5-aに文章で表現する。	対象にとって達成可能な内容、測定できる・観察できる内容、達成可能な期日を設ける。

	2)日常生活上のニーズを充足するための看護計画が具体的に立案することができる。 3)対象の安全・安楽・自立を考え、実施または見学をすることがきる。 4)立案した看護計画を、対象の反応をふまえて評価し、追加・修正をすることができる。	・患者にとって達成可能な内容 ・測定できる・観察できる内容 ・具体的な内容 ・達成可能な期日を設ける ・1つの文章に1つの成果を記す (1)看護目標が達成できるように、問題の解決に向けて具体的な看護援助(介入)の方法を考え、様式5-aに文章で具体的に表現する。 (1)様式5-aに文章で表現した方法を指導者と共に実際に患者の安全、安楽、自立を視点に一部実施または見学する。 (2)実施、見学時に患者の状態、変化、反応を観察する。 (1)実施、見学した看護援助(介入)の実施結果とその評価を様式5-aにSOAPで記載する。 (2)看護援助(介入)を終了するごとに、必ず評価を行う。 (3)患者の状態、変化、反応などから看護目標の成果に近づいているか、実施、見学した看護援助(介入)は適切だったかを検討する。 (4)看護目標の成果に近づいていない、適切でないと評価した場合は、その理由について考察し、必要に応じて看護計画を再検討する。 (5)看護者の倫理綱領の1～7条を考え、看護実践の場面で丁寧に誠実な看護を実践する。	5W1Hを用い、具体的に表現する。 対象の安全、安楽、自立を考え実施する。 SOAPで記載する。患者の状態、変化、反応などから看護目標の成果に近づいているか、実施、見学した看護援助は適切だったかを検討する。
3. 対象との良好な人間関係を築くことができる。	1)対象の思いや意見を傾聴することができる。 2)自分の思いを、適切な表現で伝えることができる。 3)対象に必要な説明ができ、同意を得ることができる。 4)対象との関係を振り返り、良好な人間関係を築くことができる。	(1)対象とのコミュニケーション・看護援助(介入)の場面で傾聴を心掛け、対象の思いを知る。 (1)カンファレンスで対象に対する自分の考え・思いを意見交換し、対象理解に努める。 (1)看護援助の際、事前に患者に実施、見学内容を説明し同意を確認する。 (1)礼儀正しい対応をする。	日々、振り返りを行い、自己の行動を客観的に評価する。 実施した援助を振り返り学びを共有していく。 態度、言葉遣い、身だしなみを整える。
4. 医療チームにおける看護の	1)対象が必要としている医療チームの職	(1)情報収集の場面で医療チームメンバー(医師、看護師、薬剤師、栄養	看護計画を立案するとき、他の医療チームメ

役割を知ることができる。	種と看護師の役割を りかいすることができる。	士、理学療法士、看護助手等)と対象 との関わりを見学する。 (2)看護計画を立案するとき、他の 医療チームメンバーと連携する内容を 記載する。	ンバーと連携する内容を を記載する。
5. 看護師としての基本的な態度を学ぶ。	1)グループメンバー と協力して行動する ことができる。 2)看護に携わる者として、誠実で責任ある 行動をとることができる。 3)主体的・積極的に 学習することができる。 4)看護への関心を持ち、対象に合った看護 を実践するために必要対象に合った看護実践をする ために必要な自己課題を明確にすることが できる。	(1)リーダーは指導者、教員と密に 連携を行う。 (2)メンバーはリーダーに協力し、 グループ内の連携・報告・相談の連携 をとる。 (1)個人情報保護を遵守する。(患者 情報を口外しない/記録物の確実な管理) (2)自己の健康管理を行う。 (3)身だしなみ、挨拶、言葉使いに 注意し、相手(患者・家族・医療従事者、 教員、実習メンバー)を尊重した態度で 接する。 (1)既習の学習の復讐を自ら行う。 (2)対象の理解、看護に必要な学習を 考え行う。 (3)指導された内容を振り返り、翌日 に活かす努力をする。 (4)自主的に指導を受け、メモをとる。 (1)他者の意見を聞き、自己との違い を知り、自己の学びを発展させる。 (2)対象の反応や対象を取り巻く全 ての人との関わりから、看護とは何か を考える。 (3)対象に合った看護を実践するた めに必要な自己課題は何か明確にする。 (4)実習のまとめを通して、看護への 関心を高める。	指導者、教員から提出物の指示があつたとき、速やかに提出する。 主体的な問題解決に向け積極的に努力する。 対象や対象を取り巻くすべての人との関わり、 実習全体を通して看護とは何かを考え、より 対象に合った看護を実践するために必要な自己 課題を明確にする。

V. 実習方法

1. 実習施設

- 東京女子医科大学病院
- 東京女子医科大学附属足立医療センター
- 東京女子医科大学附属八千代医療センター

2. オリエンテーション

実習内容	時間配分	内 訳	実習時間	備 考
オリエンテーション	5 時間	実習調整1 時間 基礎担当3 時間 医療安全教育1 時間	(時間割を参照)	
臨地実習	80 時間	8 時間×10 日間	8:00～17:00	
実習のまとめ	3 時間		(時間割を参照)	
看護を語る	2 時間	まとめ終了後に実施	(時間割を参照)	
合 計	90 時間			

3. 事前学習

「IV. 実習目標・学習内容」の方法・留意点を参照する。

4. 実習の進め方

実習日	月 日()	月 日()	月 日 ()	月 日()	月 日()
進 度	①患者紹介 ②情報収集 データベースの作成 ③病態生理・治療の学習 ④カンファレンス	①情報収集 ②アセスメント・関連図 ③ケアの見学・実施 ④カンファレンス	(学内日)	①情報収集 ②アセスメント・関連図・統合アセスメント ③ケアの見学・実施 ④カンファレンス	①情報収集 ②ケアの見学・実施 ③中間カンファレンス
実習日	月 日()	月 日()	月 日 ()	月 日()	月 日()
進 度	①計画の立案 ②カンファレンス	①計画の実施 ②計画の評価修正 ③カンファレンス	(学内日)	①計画の実施 ②計画の評価修正 ③カンファレンス	①計画の実施 ②最終カンファレンス ③記録のまとめ
実習日	月 日()				
進 度	(学内日) ・グループで振り返り、発表する				

5. 患者選定基準

- 1) 看護過程の一連のプロセスを学ぶため、継続して受け持てる患者
(少なくとも1 週間は連続して受け持てる)
- 2) コミュニケーションがとれる患者
- 3) 日常生活援助を受けている患者

VI. 実習記録

別紙参照

VII. 評 価

別紙参照

VIII. 実習記録の提出

令和 年 月 日 () 時 分 締め切り (時間厳守)

令和 年度 基礎看護学実習Ⅲ 評価表

学籍番号:		実習期間: 令和 年 月 日() ~ 月 日()				
氏 名 :		実習施設:		実習病棟:		
評 価 項 目	評 価 内 容	学生 自己評価	教員評価			
			A	B	C	D
1. 対象の全体像より看護問題を抽出することができる。	1) 対象の身体的・知的な能力、既往歴、入院に至った経過、治療内容、受け持ち時の状態が捉えられる		4	3	2	1
	2) 対象の基本的ニーズに基づき情報収集することができる		4	3	2	1
	3) 対象の情報から基本的ニーズの充足・未充足を考えることができる		4	3	2	1
	4) 対象の基本的ニーズが病状・病態生理からどのように影響を受けているか考えることができる		4	3	2	1
	5) 1) ~ 5) を関連づけて表記し、対象を多角的に理解することができる		4	3	2	1
	6) 対象の健康段階(急性・慢性・回復・終末期)が述べられる		4	3	2	1
	7) 全体像から看護問題を抽出することができる		4	3	2	1
	8) 抽出した看護問題の優先度を考えることができる		4	3	2	1
2. 看護計画を立案し、実施・評価することができる。	1) アセスメントをふまえ、対象を尊重した看護目標が設定できる		4	3	2	1
	2) 基本的ニーズを充足するための看護計画を具体的に立案できる		4	3	2	1
	3) 看護計画を組み込んだ日々の行動計画が考えられる		4	3	2	1
	4) バイタルサインの測定・観察にて日々の変化が捉えられる		4	3	2	1
	5) 対象の安全・安楽・自立を考え、指導者とともに実施できる		4	3	2	1
	6) 看護計画の実施について振り返り、自身の次への課題が明確にできる		4	3	2	1
	7) 対象の反応や観察を踏まえて、看護目標の到達度を評価できる		4	3	2	1
	8) 看護計画の追加・修正ができる		4	3	2	1
3. 対象との良好な人間関係を築くことができる。	1) 対象の思いや意見を傾聴することができる		4	3	2	1
	2) 自分の思いを適切な表現で伝えることができる		4	3	2	1
	3) 対象に必要な説明ができ、同意を得ることができる		4	3	2	1
	4) 対象との関係を振り返り、より良い関係性を築くことができる		4	3	2	1
4. 医療チームにおける看護の役割を知ることができる。	1) 対象が必要としている医療チームの職種と看護の役割がわかる		4	3	2	1
5. 看護者としてよりよい看護を考えるための基本的な態度を学ぶ。	1) チームやグループメンバーと協力して行動できる		4	3	2	1
	2) 看護に携わる者として、誠実で責任ある行動がとれる		4	3	2	1
	3) 主体的・積極的に学習することができる		4	3	2	1
	4) 実習全体をとおして看護への関心を高め、対象にあった看護実践のために必要な自己課題を様式7に具体的に表現することができる		4	3	2	1
学生コメント	自己評価を(点 A・B・C・D)とした理由	最終評価: A・B・C・D ()点 欠席:()時間 担当教員: (印) 学生サイン:				
教員コメント						

A:よくできた B:だいたいできた C:努力を要する D:かなりの努力を要する

様式1: データベース

学生氏名

氏	年齢	保険の種類	診断名：		
家族構成 キーパーソン			主訴：		
			既往歴		
			症 状 ・ 検 査 デ ー タ	受け持つまでの状態	受け持ち時の状態
気質・情動状態：性格（情報源）					
身 体 的 な ら び に 知 的 能 力	身体的能力			疾 病 の 説 明 ・ 治 療 方 針 ・ 治 療 内 容	
	身長： cm 体重： Kg BMI：				
	月経状態： 日型 順・不順；閉経 歳 （必要に応じ記入）				
	アレルギー：無・有；				
	身体機能状態	装填器具・自具具			
	聴覚障害：有・無	補聴器			
	視覚障害：有・無	義眼 眼鏡 老眼鏡 コンタクトレンズ			
	平衡感覚障害：有・無				
	触覚障害：有・無				
	その他の 感覚障害：有・無	義歯 色盲			
運動能力の 低下・喪失：有・無	義肢 歩行 器 杖 車椅子 担架				
その他 人工臓器の使用 有・無	ペースメーカー 人工肛門 ブラッドアクセス 他				
理解力					
生 活 習 慣	食事	飲酒	睡眠	排便	清潔
	食欲 偏食	喫煙	睡眠薬	排尿	最終入浴日
	入院前の平均的な1日の過ごし方 0 2 4 6 8 10 12 14 16 18 20 22 24時 ----- ----- ----- ----- ----- ----- ----- ----- ----- ----- ----- -----				

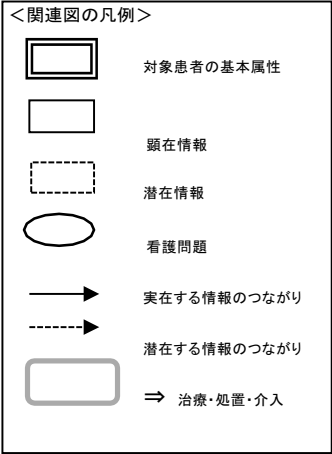
様式 2

学生氏名

No.

項目：

主観的情報		客観的情報		解釈・分析・判断
月/日		月/日		



様式 4

学生氏名

立案日 月/日	番号 (#)	看護問題	優先度				解決・ 終了日 月/日
			立案日	月/日	月/日	月/日	

注意：#番号は問題番号である。優先順位が変更しても#番号は変わらない。

優先順位が変更になった場合は、優先度の欄に日付（月/日）と新たな番号を記載し変更を示す。

様式 5-a

学生氏名

No.

看護問題（#）				
立案日 月/日	看護目標	達成 予定日	看護計画	終了日

様式 5-b

学生氏名

No.

看護問題（#）			
看護目標			
月/日	時間	実施した 看護介入	実施結果とその評価

様式6（日々の記録）

月 日（ ）

学生氏名

本日の目標		
計画	修正計画	実施内容
振り返り および 学び（指導者からの助言等）		

様式7:実習のまとめ

学籍番号

学生氏名

実習で学んだこと

自己の課題について(実習目標を踏まえての課題・自分自身の課題)

フローシート

学籍番号 _____

学生氏名 _____

R (回/分)	P (回/分)	BT (℃)	BP (mmHg)	／ ()	／ ()	／ ()	／ ()	／ ()	／ ()
60	140	40	160						
50	120	39	140						
40	100	38	120						
30	80	37	100						
20	60	36	80						
10	40	35	60						
尿	回数								
	尿量 (mL) * 測定者								
便回数									
食事量 食事内容形態: * 主食副食を分数で記載			朝						
			昼						
			夕						

- ① ↑この欄に受け持ち患者に必要な項目を記入して良い。
 ② 体温37℃の線上を赤い線にしない。
 ③ 呼吸：Rは黒、脈拍：Pは赤、体温：BTは青 血圧：緑で示す

成人看護学実習

I. 目的

成人期の特徴を理解し、さまざまな健康段階に応じた看護を学ぶ。

II. 目標

1. 発達段階・発達課題をふまえて、対象をとらえることができる。
2. 対象の健康段階に応じた看護を実践できる。
3. 対象の看護を通し、チーム医療を理解できる。
4. 対象に必要な社会資源を理解できる。
5. 看護実践を通して、看護に対する関心を深め看護観を養う。

III. 構成

成人看護学実習(6単位:270時間)

成人看護学実習Ⅰ(2単位:90時間)・・・健康の急激な破綻状態にある対象の看護 成

人看護学実習Ⅱ(2単位:90時間)・・・疾病・外傷の回復過程にある対象の看護成

人看護学実習Ⅲ(2単位:90時間)・・・慢性疾患を持つ対象の看護

IV. 実習目標・学習内容

別紙参照

V. 実習方法

1. オリエンテーション

学習内容のオリエンテーション

2. 事前学習

各構成を参照

3. 標準的な学習進度

実習日	1日目	2日目	3日目	4日目	5日目
進度	①患者紹介 ②情報収集 ③情報の整理・分析	①情報の整理・分析 ②看護上の問題抽出 ③ケアの一部実施	(学内日)	①計画立案 ②ケアの実施 ③計画の評価・修正	①ケアの実施 ②計画の評価・修正 ③中間カンファレンス
実習日	6日目	7日目	8日目	9日目	10日目
進度	①ケアの実施 ②計画の評価・修正	①ケアの実施 ②計画の評価・修正	(学内日)	①ケアの実施 ②計画の評価・修正	②ケアの実施 ②計画の評価・修正 ③最終カンファレンス

成人期の対象1名を受け持ち、看護過程を展開する。

対象の状態により、受け持ち患者を変更する場合がある。

4. 学内学習の内容

- ・成人学習者に提供する看護のエビデンスを確認するための文献検索および学習
- ・患者に合わせた技術を提供するための演習
- ・臨地実習に関連したカンファレンス
- ・臨地実習での体験と知識の統合

5. 実習時間

実習内容	時間配分	内訳	実習時間	備考
オリエンテーション	6時間		時間割を参照	
臨地実習	80時間	8時間×10日間	8：00～17：00	
実習のまとめ	4時間		時間割を参照	
計	90時間			

VI. 実習記録

別紙参照

VII. 実習記録の提出

実習最終日、16:00 に提出する。

VIII. 評価

別紙参照

成人看護学実習 I (健康の急激な破綻状態にある対象の看護)

I 目的

健康の急激な破綻状態にある対象の特徴を理解し、健康の修復過程を促進する看護を学ぶ

II 目標・行動目標

1. 発達段階・発達課題をふまえて、対象をとらえることができる
 - 1) 身体的側面をとらえることができる
 - 2) 心理・社会的側面をとらえることができる
 - 3) 健康観・価値観をとらえることができる
2. 対象の健康段階に応じた看護を実践できる
 - 1) 健康の急激な破綻状態にある対象を理解できる
 - (1) 健康が急激に破綻している原因を理解できる
 - (2) 受けている治療内容や検査がわかり、現在の身体状態を観察できる
 - (3) 疾病や治療によって生じる、生体の反応を考えることができる
 - (4) 疾病や治療によって生じる、合併症や二次障害を考えることができる
 - (5) 健康の修復過程の促進を阻害する、要因や因子を考えることができる
 - (6) 対象に生じる心理(精神)的苦痛・社会的問題がわかる
 - 2) 健康の急激な破綻状態や治療に伴い生じる生体侵襲から、健康の修復過程を促進させるための援助ができる
 - (1) 疾病や治療に伴う身体の苦痛を最小限にとどめる援助ができる
 - (2) 健康の修復過程を促進し、合併症や二次障害を予防する援助ができる
 - (3) 対象に行われている診療の補助を一部実施できる
 - (4) 対象に必要な日常生活援助ができる
 - (5) 対象の状況に応じた精神的な支援を考えることができる
 - 3) 手術を受ける患者および集中治療を受ける対象の身体的・心理的影響を考え、その看護について考えを述べるができる
3. 対象の看護を通して、チーム医療を理解できる
 - 1) チーム医療の必要性を考えることができる
 - 2) チーム医療における看護師の役割を考えることができる
4. 対象に必要な社会資源を理解できる
 - 1) 対象に必要な社会の支援体制・制度を考えることができる
5. 看護実践を通して、看護に対する関心を深め看護観を養う
 - 1) 対象の心身の安全を守ることの重要性を考えることができる
 - 2) 健康の修復過程を促進する看護について、自己の考えを述べるができる

Ⅲ.実習目標・学習内容

目標	行動目標	学習内容	方法・留意点
1. 発達段階・発達課題をふまえて、対象をとらえることができる	1) 身体的側面をとらえることができる 2) 心理・社会的側面をとらえることができる 3) 健康観・価値観をとらえることができる	①発達段階・課題 ②身体的側面 ③心理・社会的側面 ④健康観や価値観	・成人の身体・心理・社会的特徴、発達課題について事前学習し、意図的に情報収集する ・診療録・看護記録、コミュニケーションから情報収集する ・エリクソン、ハヴィガーストなどの理論を参考に対象の発達段階・課題を考える ・対象の歩んできた人生などから、発達段階・課題を考え看護に反映する
2. 対象の健康段階に応じた看護を実践できる	1) 健康の急激な破綻状態にある対象を理解できる （１）健康が急激に破綻している原因を理解できる （２）受けている治療内容や検査がわかり、現在の身体状態を観察できる （３）疾病や治療によって生じる、生体の反応を考えることができる （４）疾病や治療によって生じる、合併症や二次障害を考えることができる （５）健康の修復過程の促進を阻害する、要因や因子を考えることができる （６）対象に生じる心理(精神)的苦痛・社会的問題がわかる	①疾病の病態生理治療内容(治療方針) ②身体状態(主観情報・客観情報) ③バイタルサイン測定 ④症状・徴候の観察 ⑤治療内容・検査(術式、投薬、食事など) ⑥侵襲が生体に及ぼす影響と生体反応回復過程(ムーアの分類) ⑦疾病や治療によって起こりうる合併症や二次障害 ⑧健康の阻害因子 既往歴、障害 心理・社会面 ⑨心理的・社会的苦痛危機理論 ストレス/コーピング	・診療録・看護記録から疾病、治療内容(治療方針)、病期を情報収集する ・病態生理の学習を行う ・疾病の状態や治療・健康段階から予測される状態を考え、フィジカルアセスメントを行う ・治療・検査について学習し、得られた情報から対象の状況を考える ・対象に行われている治療・検査場面は積極的に見学をする ・機会があれば医師からのインフォームドコンセントに同席し、治療内容を理解し看護に活かす ・侵襲が生体に及ぼす影響と生体反応を学習し、対象の情報から現在どの状況かを考える ・疾病や治療によって生じる合併症や二次障害について学習し、対象に発生していないか観察する ・既往歴や身体的要因以外(心理・社会面)の情報から、健康の修復過程促進を阻害していないか考え観察する ・対象とのコミュニケーションを通して、情報収集する その際、対象との関係を考慮した情報収集内容とする ・言動、表情やあらかじめ収集した情報から対象の心理的苦痛、社

	2)健康の急激な破綻状態や治療に伴い生じる生体侵襲から、健康の修復過程を促進させるための援助ができる (1)疾病や治療に伴う身体の苦痛を最小限にとどめる援助ができる (2)健康の修復過程を促進し、合併症や二次障害を予防する援助ができる (3)対象に行われている診療の補助を一部実施できる (4)対象に必要な日常生活援助ができる (5)対象の状況に応じた精神的な支援を考えることができる	①看護問題の明確化 ②看護目標の立案 ③優先順位の明確化 ④看護計画の立案例) ・疼痛管理 ・合併症、二次障害予防 ・離床援助 ・点滴・内服管理と効果の観察 ・日常生活援助 ・退院後の生活支援 ⑤看護計画の実施 ⑥援助の評価と計画修正	会的問題を予測する ・観察した反応や言動から、理論を参考にし、対象の心理状態の段階をアセスメントする ・機会があれば医師からのインフォームドコンセントに同席し、対象の反応・表情を観察する ・収集した情報をアセスメントし、看護問題・看護目標・優先度および看護問題とならなくとも対象に必要な援助を抽出する ・看護問題、目標、看護計画は対象と共有し、対象が積極的に健康回復に参加でき、自立を促すものとする ・看護計画は安全・安楽・自立(退院後を視野に入れた)・個別性をふまえて立案する ・立案した計画をもとに、原則として指導者(教員)と共に援助する ・対象に行われている治療・検査の指示内容を把握し、指導者と共に援助する ・看護目標・計画・援助内容は対象の健康観や価値観を尊重した内容とし、対象の思いや反応を観察する ・対象の心理状態を考慮し、質問攻めならないよう心掛ける ・実施中、後に対象の反応を観察し計画の評価・修正を行う ・「卒業時の看護技術到達度表」に基づいて、積極的に看護技術を経験する ・手術室で施される患者への一連の医療行為と看護を見学する ・救命ICU 見学実習 ・初療治療の見学(あった場合) * 蘇生治療は原則、見学とする ・様式6に学びを記述する カンファレンスなどで、学びを共有し個々の考えを深める
	3)手術を受ける患者および集中治療を受ける対象の身体的・心理的影響を考え、その看護について考えを述べるができる	①手術前・中・後の看護 ・患者の安全と安楽 ・アドボゲーターとしての看護 ②手術を受ける対象の身体的・心理的状況 ③集中治療を受けている患者(家族)の状況と特徴 ④集中治療室の看護 ⑤集中治療室での患者の生活環境	

3. 対象の看護を通して、チーム医療を理解できる	1) チーム医療の必要性を考えることができる 2) チーム医療における看護師の役割を考えることができる	① チーム医療の構成員と役割 ② チーム医療の実際	・対象に関わっている他職種を知る ・チーム医療カンファレンスに参加する ・対象の援助に他職種が関わっている場面へ積極的に参加し、見学する ・他職種と情報交換や方向性の共有を指導者と共に行う
4. 対象に必要な社会資源を理解できる	1) 対象に必要な社会の支援体制・制度を考えることができる	① 社会資源の種類 ② 社会資源の活用方法	・対象が活用できる社会資源の種類と内容を学習する ・退院支援がどのように行われているかを知る ・退院支援カンファレンスに参加する ・社会資源の活用についてカンファレンスで共有する
5. 看護実践を通して、看護に対する関心を深め看護観を養う	1) 対象の心身の安全を守ることの重要性を考えることができる 2) 健康の修復過程を促進する看護について、自己の考えを述べることができる	① 健康の急激な破綻状態によりおこる生体反応 ② 対象の心身の安全を守る看護 ③ 健康の修復過程を促進し社会復帰につなげる看護	・日々の実践や指導から、健康の急激な破綻状態にある対象の看護について振り返り、学びを整理する ・実習での体験をカンファレンスで共有し、考えを深める

IV. 実習方法

1. 実習の組み立て

実習内容	時間配分	内 訳	実習時間	備 考
オリエンテーション	6時間	領域担当5時間 医療安全教育1時間	(時間割を参照)	
臨地実習	80時間	8時間×10日間	8:00～17:00	
実習のまとめ	4時間		(時間割を参照)	
合 計	90時間			

1) 成人看護学オリエンテーション 実習要項に基づく

2) 医療安全教育

3) 記録用紙の説明

2. 事前学習

- 1) 成人期の身体的・心理的・社会的特徴と発達課題について
- 2) 成人期の対象に活用できる社会資源の種類と内容

- 3)各健康段階にある対象の特徴・各健康段階の看護の特徴
- 4)疾病の受け入れ過程(危機・障害受容・適応・死への受容)
- 5)看護技術と基本的知識
 - (1)機能障害の対象の車いす移乗
 - (2)静脈内点滴留置中や可動域制限のある対象の更衣
 - (3)輸液管理(点滴刺入部・点滴滴下・点滴ポンプ)
 - (4)酸素療法の管理
 - (5)ドレーン管理(膀胱留置カテーテル・各種ドレーン)
 - (6)インシュリンの種類と薬効
- 6)侵襲に対する生体反応、サイトカインによる生体反応
- 7)創傷の治癒過程と各段階における看護
- 8)主な術後合併症の発生機序と看護(観察)
 - (1)循環器 (2)呼吸器 (3)消化器 (4)腎・泌尿器

V. 実習記録

基礎看護学実習Ⅱ記録用紙に準ずる。

VI. 評価表 別紙参照

XII. 実習記録の提出

指定された日時に提出する(各自、月日・曜日・時間確認し記入する)

令和 年 月 日() 時 分 締切
(時間厳守)

成人看護学実習Ⅱ（疾病・外傷の回復過程にある対象の看護）

I. 目的

疾病・外傷の回復過程にある対象の特徴を理解し、障害された日常生活の再構築に向けた看護を学ぶ

II. 目標・行動目標

1. 発達段階・発達課題をふまえて、対象をとらえることができる
 - 1) 身体的側面をとらえることができる
 - 2) 心理・社会的側面をとらえることができる
 - 3) 健康観・価値観をとらえることができる
2. 対象の健康段階に応じた看護を実践できる
 - 1) 疾病・外傷の回復過程にある対象を理解できる
 - (1) 病態生理、治療、検査を理解できる
 - (2) 現在の身体状態、起こりうる合併症や二次障害を観察できる
 - (3) 現在の日常生活動作の状況・セルフケア能力がわかる
 - (4) 入院前の日常生活動作の状況・セルフケア能力がわかる
 - (5) 入院前の社会生活および社会的役割がわかる
 - 2) 対象がどのように障害受容の過程をたどっているのかを理解できる
 - (1) 対象の思いを受け止めることができる
 - (2) 理論を用いて障害受容の段階をとらえることができる
 - 3) 疾病・外傷の回復過程において、障害された日常生活の再構築に向けた援助ができる
 - (1) 疾病や治療に伴う身体的苦痛を最小限にとどめる援助ができる
 - (2) 回復過程で起りうる合併症や二次障害を予防する援助ができる
 - (3) 残存機能を活用し、日常生活を維持できるよう援助ができる
 - (4) 日常生活の再構築に向けての援助ができる
 - (5) 対象の状況に応じた精神的な支援を考えることができる
3. 対象の看護を通して、チーム医療を理解できる
 - 1) チーム医療の必要性を考えることができる
 - 2) チーム医療における看護師の役割を考えることができる
4. 対象に必要な社会資源を理解できる
 - 1) 対象に必要な社会の支援体制・制度を考えることができる
5. 看護実践を通して、看護に対する関心を深め看護観を養う
 - 1) 障害の受容過程をとらえて看護する重要性を考えることができる
 - 2) 日常・社会生活の再構築に向けた看護について、自己の考えを述べることができる

Ⅲ. 実習目標・学習内容

目標	行動目標	学習内容	方法・留意点
1. 発達段階・発達課題をふまえて、対象をとらえることができる	1) 身体的側面をとらえることができる 2) 心理・社会的側面をとらえることができる 3) 健康観・価値観をとらえることができる	①発達段階・課題 ②身体的側面 ③心理・社会的側面 ④健康観や価値観	・成人の身体・心理・社会的特徴、発達課題について事前学習し、意図的に情報収集する ・診療録・看護記録、コミュニケーションから情報収集する ・エリクソン、ハヴィガーストなどの理論を参考に対象の発達段階・課題を考える ・対象の歩んできた人生などから、発達段階・課題を考え看護に反映する
2. 対象の健康段階に応じた看護を実践できる	1) 疾病・外傷の回復過程にある対象を理解できる (1) 病態生理、治療、検査を理解できる (2) 現在の身体状態、起こりうる合併症や二次障害を観察できる (3) 現在の日常生活動作の状況・セルフケア能力がわかる (4) 入院前の日常生活動作の状況・セルフケア能力が分かる (5) 入院前の社会生活および社会的役割がわかる 2) 対象がどのように障害受容の過程をたどっているのかを理解できる (1) 対象の思いを受け止めることができる	①疾病の病態生理、治療内容(治療方針)、検査、健康段階 ②バイタルサイン測定 ③症状・兆候の観察 ④起こりうる合併症、二次障害 ⑤日常生活動作の状況 ⑥セルフケア能力の程度 ⑦セルフケアに支障をきたす原因 ⑧入院前の日常生活動作の状況 ⑨入院前のセルフケア能力の程度 ⑩入院前の生活リズム・生活習慣 ⑪入院前の社会生活(家庭生活、地域生活、職業生活、余暇生活) ⑫社会的役割 ①障害受容の過程 フィンク コーン 上田などの理論 ②疾病や障害に対する思い ③疾病や障害に対す	・診療録・看護記録から疾病、治療内容(治療方針)、健康段階について情報収集する ・病態生理、治療内容、検査、について学習する ・疾病の状態や治療・健康段階から予測される状態を考え、フィジカルアセスメントを行う ・対象の日常生活動作やセルフケア能力を援助の実施や見学を通し、情報収集・アセスメントする ・対象とのコミュニケーションを通して情報収集する その際、身体・心理状況に配慮する ・環境や関係性を考慮し、対象の思いを傾聴する ・日常生活(特にリハビリテーションなど)の表情や言動を観察する ・収集した情報から対象の心理的側面を、理論を参考にアセスメントする

	(2) 理論を用いて障害受容の段階をとらえることができる 3) 疾病・外傷の回復過程において、障害された日常生活の再構築に向けた援助ができる (1) 疾病や治療に伴う身体的苦痛を最小限にとどめる援助ができる (2) 回復過程で起りうる合併症や二次障害を予防する援助ができる (3) 残存機能を活用し、日常生活を維持できるよう援助ができる (4) 日常生活の再構築に向けての援助ができる (5) 対象の状況に応じた精神的な支援を考えることができる	る理解度 ④ 今後の生活の再構築に対する思い ① 看護問題の明確化 ② 看護目標の立案 ③ 優先順位の明確化 ④ 看護計画の立案例) ・ADL 評価表 (Barthel index) ・機能的自立度評価法(FIM) ・徒手筋力テスト(MMT) ・関節可動域(ROM) ・心臓リハビリテーションなど ⑤ 看護計画の実施 ⑥ 援助の評価と計画修正	・収集した情報をアセスメントし看護問題・看護目標・優先度、および看護問題とならなくとも対象に必要な援助を抽出する ・日常生活の再構築に向け看護問題、目標、看護計画を対象と共有し、自立を促すものとする ・看護計画は安全・安楽・自立(退院後を視野に入れた)・個別性をふまえて立案する ・対象の価値観や健康観や健康行動、今後の生活への考え・思いを踏まえた計画とする ・立案した計画をもとに、原則として指導者(教員)と共に援助する ・障害受容の過程を考慮し、保護や支持的態度・積極的傾聴を行い、患者の意思を尊重した支援を行う ・実施中、後に対象の反応を観察し計画の評価・修正を行う ・客観的指標を用いて評価する 「卒業時の看護技術到達度表」に基づいて、積極的に看護技術を経験する
3. 対象の看護を通して、チーム医療を理解できる	1) チーム医療の必要性を考えることができる 2) チーム医療における看護師の役割を考えることができる	① チーム医療の構成員と役割 ② チーム医療の実際	・対象に関わっている他職種を知る ・チーム医療カンファレンスに参加する ・対象の援助に他職種が関わっている場面へ積極的に参加し、見学する ・他職種と情報交換や方向性の共有を指導者と共に行う
4. 対象に必要な社会資源を理解できる	1) 対象に必要な社会の支援体制・制度を考えることができる	① 社会資源の種類 ② 社会資源の活用方法	・対象が活用できる社会資源の種類と内容を学習する ・退院支援がどのように行われているかを知る ・退院支援カンファレンスに参加する ・社会資源の活用についてカンファレンスで共有する
5. 看護実践を通して、看護に対する関心を深め看護観を養う	1) 障害の受容過程をとらえて看護する重要性を考えることができる 2) 日常・社会生	① 障害の受容過程にある対象の理解 ② 日常・社会生活の再構築に向けた看護	・日々の実践や指導から、疾病・外傷の回復過程にある対象の看護について振り返り、学びを整理する ・実習での経験をカンファレンスで共有し、考えを深める

	活の再構築に向けた 看護について、自己 の考えを述べるこ とができる		
--	---	--	--

IV. 実習方法

1. 実習の組み立て

実習内容	時間配分	内 訳	実習時間	備 考
オリエンテーション	6時間	領域担当5時間 医療安全教育1時間	(時間割を参照)	
臨地実習	80時間	8時間×10日間	8:00～17:00	
実習のまとめ	4時間		(時間割を参照)	
合 計	90時間			

1) 成人看護学オリエンテーション

実習要項に基づく

2) 医療安全教育

3) 記録用紙の説明

2. 事前学習

1) 成人の身体・心理・社会的特徴と発達課題について

2) 成人期の対象に活用できる社会資源の種類と内容

3) 各健康段階にある対象の特徴・各健康段階の看護の特徴

4) 疾病の受け入れ過程(危機・障害受容・適応・死への受容)

5) 看護技術と基礎的知識

(1) 機能障害の対象の車いす・ストレッチャー移乗・移送

(2) 点滴、可動域制限の更衣

(3) 輸液管理(点滴刺入部・点滴・点滴ポンプ)

(4) 酸素療法の管理

(5) ドレーン管理(膀胱留置カテーテル・各種ドレーン等)

(6) インシュリンの種類と薬効

(7) 清拭、洗髪、食事介助

6) 機能障害の評価方法

(1) ROM 評価・MMT 評価・ADL 評価 の目的と測定方法

7) 意識障害の評価方法

(1) JCS (2) GCS (3) 瞳孔

8) チーム医療について

9) その他

(1) 各担当から指示された内容

V. 実習記録

基礎看護学実習Ⅱ記録用紙に準じる

VI. 評価表 別紙参照

VII. 実習記録の提出

指定された日時に提出する(各自、月日・曜日・時間確認し記入する)

令和 年 月 日() 時 分 締切
(時間厳守)

成人看護学実習Ⅲ(慢性的な経過をたどる健康障害をもつ対象の看護)

I. 目的

慢性疾患をもつ対象の特徴を理解し、セルフマネジメントを支援するための看護を学ぶ

II. 目標・行動目標

1. 発達段階・発達課題をふまえて、対象をとらえることができる
 - 1) 身体的側面をとらえることができる
 - 2) 心理・社会的側面をとらえることができる
 - 3) 健康観・価値観をとらえることができる
2. 対象の健康段階に応じた看護を実践できる
 - 1) 慢性疾患をもつ対象を理解できる
 - (1) 病態生理、治療、検査を理解できる
 - (2) 現在の入院に至る経過とその要因を理解できる
 - (3) 現在の身体状態、起こりうる合併症や二次障害を観察できる
 - (4) 疾病および治療により影響を受ける日常生活動作やセルフケア能力がわかる
 - (5) 現在の患者の抱える葛藤や不安、困難がわかる
 - (6) 入院前の社会生活および社会的役割がわかる
 - 2) セルフマネジメント支援に向けての援助ができる
 - (1) 身体的苦痛を最小限にし、今後の合併症や二次障害を予防する援助ができる
 - (2) 今後のセルフマネジメントにむけて、意思や困りが傾聴できる
 - (3) セルフマネジメントにおける課題を対象と一緒に考えることができる
 - (4) セルフマネジメントにおける課題に対し、必要な援助ができる
 - (5) 自己効力感を高める援助ができる
 - (6) 対象の状況に応じた精神的な支援を考えることができる
3. 対象の看護を通して、チーム医療を理解できる
 - 1) チーム医療の必要性を考えることができる
 - 2) チーム医療における看護師の役割を考えることができる
4. 対象に必要な社会資源を理解できる
 - 1) 対象に必要な社会の支援体制・制度を考えることができる
5. 看護実践を通して、看護に対する関心を深め看護観を養う
 - 1) 病と共に生きる対象のQOL を考えることができる
 - 2) セルフマネジメントに向けた看護について、自己の考えを述べることができる

IV. 実習目標・学習内容

目標	行動目標	学習内容	方法・留意点
1. 発達段階・発達課題をふまえて、対象をとらえることができる	1) 身体的側面をとらえることができる 2) 心理・社会的側面をとらえることができる 3) 健康観・価値観をとらえることができる	① 発達段階・課題 ② 身体的側面 ③ 心理・社会的側面 ④ 健康観や価値観	・ 成人の身体・心理・社会的特徴、発達課題について事前学習し、意図的に情報収集する ・ 診療録・看護記録、コミュニケーションから情報収集する ・ エリクソン、ハヴィガーストなどの理論を参考に対象の発達段階・課題を考える ・ 対象の歩んできた人生などから発達段階・課題を考え、看護に反映する
2. 対象の健康段階に応じた看護を実践できる	1) 慢性疾患をもつ対象を理解できる (1) 病態生理、治療、検査を理解できる (2) 現在の入院に至る経過とその要因を理解できる (3) 現在の身体状態、起こりうる合併症や二次障害を観察できる (4) 疾病および治療により影響を受ける日常生活動作やセルフケア能力がわかる (5) 現在の患者の抱える葛藤や不安、困難がわかる (6) 入院前の社会生活および社会的役割がわかる	① 疾病の病態生理、治療内容(治療方針)、検査、健康段階 ② 現病歴、既往歴 ③ 生活習慣 ④ 疾病・治療に対する理解度 ⑤ コンプライアンスの程度 ⑥ バイタルサイン測定 ⑦ 症状・兆候の観察 ⑧ 起こりうる合併症、二次障害 ⑨ 日常生活動作の状況 ⑩ セルフケア能力の程度 ⑪ セルフケアに支障をきたす原因 ⑫ 無力感 ⑬ 病の軌跡 ⑭ 軌跡の局面 ⑮ 入院前の社会生活(家庭生活、地域生活、職業生活、余暇生活) ⑯ 社会的役割	・ 診療録・看護記録から疾病、治療内容(治療方針)、健康段階について情報収集する ・ 病態生理、治療内容、検査、について学習する ・ 疾病の状態や治療・健康段階から予測される状態を考え、フィジカルアセスメントを行う ・ 診療録や対象とのコミュニケーションから情報収集する ・ 健康状態の揺らぎを持つ対象の理解に努め、コミュニケーションを図る ・ 疾病の状態や治療・健康段階から予測される状態を考え、フィジカルアセスメントを行う ・ 対象の日常生活動作やセルフケア能力を援助の実施や見学を通し、情報収集・アセスメントする ・ 病と共に生きる対象の思いを表情や言動から観察する ・ プライバシーに配慮し、質問攻めにならないようなコミュニケーションを図る

目標	行動目標	学習内容	方法・留意点
	2)セルフマネジメント支援に向けての援助ができる (1)身体的苦痛を最小限にし、今後の合併症や二次障害を予防する援助ができる (2)今後のセルフマネジメントにむけて、意思や困りが傾聴できる (3)セルフマネジメントにおける課題を対象と一緒に考えることができる (4)セルフマネジメントにおける課題に対し、必要な援助ができる (5)自己効力感を高める援助ができる (6)対象の状況に応じた精神的な支援を考えることができる	①看護問題の明確化 ②看護目標の立案 ③優先順位の明確化 ④看護計画の立案例) ・症状マネジメント ・サインマネジメント ・ストレスマネジメント ・自己効力を高める援助 ・遂行行動の成功体験 言語的説得 代理的体験 プラス思考 ⑤看護計画の実施 ⑥援助の評価と計画修正	・収集した情報をアセスメントし看護問題・看護目標・優先度、および看護問題とならなくとも対象に必要な援助を抽出する ・看護問題、目標、看護計画を対象と共有し、セルフマネジメントを促すものとする ・看護計画は安全・安楽・自立(退院後を視野に入れた)・個別性をふまえて立案する ・立案した計画をもとに、原則として指導者(教員)と共に援助する ・対象のセルフマネジメントに対する思いは、否定せず傾聴に努め、自らが課題に気づけるよう支援する ・成人学習者であることを踏まえて、内的動機づけを高めるよう支援する ・自己効力が高まるよう左記の情報源を活用する ・対象に行われている治療・検査の指示内容を把握し、指導者と共に援助する ・実施中、後に対象の反応を観察し、計画の評価・修正を行う 「卒業時の看護技術到達度表」に基づいて、積極的に看護技術を経験する
3. 対象の看護を通して、チーム医療を理解できる	1)チーム医療の必要性を考えることができる 2)チーム医療における看護師の役割を考えることができる	①チーム医療の構成員と役割 ②チーム医療の実際	・対象に関わっている他職種を知る ・チーム医療カンファレンスに参加する ・対象の援助に他職種が関わっている場面へ積極的に参加し、見学する ・他職種と情報交換や方向性の共有を指導者と共に行う
4. 対象に必要な社会資源を理解できる	1)対象に必要な社会の支援体制・制度を考えることができる	①社会資源の種類 ②社会資源の活用方法	・対象が活用できる社会資源の種類と内容を学習する ・退院支援がどのように行われているかを知る

目標	行動目標	学習内容	方法・留意点
			・退院支援カンファレンスに参加する ・社会資源の活用についてカンファレンスで共有する
5. 看護実践を通して、看護に対する関心を深め看護観を養う	1) 病と共に生きる対象のQOLを考えることができる 2) セルフマネジメントに向けた看護について、自己の考えを述べることができる	①セルフマネジメントの困難さ ②対象が求める QOL を支援する看護 ③慢性疾患と共存する対象を支える看護	・日々の実践や指導から、慢性疾患をもつ対象の看護について振り返り、学びを整理する ・実習での経験をカンファレンスで共有し、考えを深める

V. 実習方法

1. 実習の組み立て

実習内容	時間配分	内 訳	実習時間	備 考
オリエンテーション	6時間	領域担当5時間 医療安全教育1時間	(時間割を参照)	
臨地実習	80時間	8時間×10日間	8:00～17:00	
実習のまとめ	4時間		(時間割を参照)	
合 計	90時間			

1) 成人看護学オリエンテーション

実習要項に基づく

- 2) 医療安全教育
- 3) 記録用紙の説明

2. 事前学習

- 1) 成人期の身体的・心理的・社会的特徴と発達課題について
- 2) 成人期の対象に活用できる社会資源の種類と内容
- 3) 各健康段階にある対象の特徴・各健康段階の看護の特徴
- 4) 疾病の受け入れ過程(危機・障害受容・適応・死への受容)
- 5) 看護技術と基本的知識
 - (1) 機能障害の対象の車いす移乗
 - (2) 静脈内点滴留置中や可動域制限のある対象の更衣
 - (3) 輸液管理(点滴刺入部・点滴滴下・点滴ポンプ)
 - (4) 酸素療法の管理
 - (5) ドレーン管理(膀胱留置カテーテル・各種ドレーン)
 - (6) インシュリンの種類と薬効
- 6) 病みの軌跡
- 7) セルフマネジメント支援の構成要素
- 8) 3つのマネジメントについて
- 9) 自己効力について(効力予期と結果予期とそのパターン、自己効力を高める情報源)
- 10) 病態生理、治療、検査について、担当教員の指示に従う

VI. 実習記録

基礎看護学実習Ⅱ記録用紙に準ずる。

VII. 評価表

別紙参照

VIII. 実習記録の提出

指定された日時に提出する(各自、月日・曜日・時間確認し記入する)

令和 年 月 日 () 時 分 締切
(時間厳守)

令和 年度 成人看護学実習Ⅰ評価表						
学籍番号：		実習期間：令和 年 月 日 ～ 月 日				
氏名：		実習施設：				
評価項目	評価内容	学生 自己評価	教員評価			
			A	B	C	D
1. 発達段階・発達課題をふまえて、対象をとらえることができる	1) 身体的側面をとらえることができる		4	3	2	1
	2) 心理・社会的側面をとらえることができる		4	3	2	1
	3) 健康観・価値観をとらえることができる		4	3	2	1
2. 対象の健康段階に応じた看護を実践できる	1) 健康の急激な破綻状態にある対象を理解できる	*	*	*	*	*
	(1) 健康が急激に破綻している原因を理解できる		4	3	2	1
	(2) 受けている治療内容や検査がわかり、現在の身体状態を観察できる		4	3	2	1
	(3) 疾病や治療によって生じる、生体の反応を考慮することができる		4	3	2	1
	(4) 疾病や治療によって生じる、合併症や二次障害を考慮することができる		4	3	2	1
	(5) 健康の修復過程の促進を阻害する、要因や因子を考慮することができる		4	3	2	1
	(6) 対象に生じる心理(精神)的苦痛・社会的問題がわかる		4	3	2	1
	2) 健康の急激な破綻状態や治療に伴い生じる生体侵襲から、健康の修復過程を促進させるための援助ができる	*	*	*	*	*
	(1) 疾病や治療に伴う身体的苦痛を最小限にとどめる援助ができる		4	3	2	1
	(2) 健康の修復過程を促進し、合併症や二次障害を予防する援助ができる		4	3	2	1
	(3) 対象に行われている診療の補助を一部実施できる		4	3	2	1
	(4) 対象に必要な日常生活援助ができる		4	3	2	1
	(5) 対象の状況に応じた、精神的な支援を考慮することができる		4	3	2	1
	3) 手術を受ける患者および集中治療を受ける対象の身体的・心理的影響を考え、その看護について考えを述べるることができる		4	3	2	1
	3. 対象の看護を通して、チーム医療を理解できる	1) チーム医療の必要性を考慮することができる		4	3	2
2) チーム医療における看護師の役割を考慮することができる			4	3	2	1
4. 対象に必要な社会資源を理解できる	1) 対象に必要な社会の支援体制・制度を考慮することができる		4	3	2	1
5. 看護実践を通して看護に対する関心を深め看護観を養う	1) 対象の心身の安全を守ることの重要性を考慮することができる		4	3	2	1
	2) 健康の修復過程を促進する看護について、自己の考えを述べることができる		4	3	2	1
6. 看護者として基本的な態度を養う	1) 積極的に行動できる		4	3	2	1
	2) チームの一員として役割を認識し、責任ある行動がとれる		4	3	2	1
	3) 自己の課題を明確にすることができる		4	3	2	1
	4) 自己の健康管理ができる		4	3	2	1
	5) 記録物の管理ができて記録物の提出期限が守れる		4	3	2	1
学生コメント	自己評価を（ ）とした理由		教員評価：A B C D （ ）点 欠席：（ ）時間 遅刻：（ ）時間 早退：（ ）時間 担当教員 印			
教員コメント						

A:よくできた B:だいたいできた C:努力を要する D:かなりの努力を要する

学生サイン：

日付：

令和 年度 成人看護学実習Ⅱ評価表

学籍番号：		実習期間：令和 年 月 日 ～ 月 日				
氏名：		実習施設：				
評価項目	評価内容	学生 自己評価	教員評価			
			A	B	C	D
1. 発達段階・発達課題をふまえて、対象をとらえることができる	1) 身体的側面をとらえることができる		4	3	2	1
	2) 心理・社会的側面をとらえることができる		4	3	2	1
	3) 健康観・価値観をとらえることができる		4	3	2	1
2. 対象の健康段階に応じた看護を実践できる	1) 疾病・外傷の回復過程にある対象を理解できる	*	*	*	*	*
	(1) 病態生理、治療、検査を理解できる		4	3	2	1
	(2) 現在の身体状態、起こりうる合併症や二次障害を観察できる		4	3	2	1
	(3) 現在の日常生活動作の状況・セルフケア能力がわかる		4	3	2	1
	(4) 入院前の日常生活動作の状況・セルフケア能力がわかる		4	3	2	1
	(5) 入院前の社会生活および社会的役割がわかる		4	3	2	1
	2) 対象がどのように障害受容の過程をたどっているのかを理解できる	*	*	*	*	*
	(1) 対象の思いを受け止めることができる		4	3	2	1
	(2) 理論を用いて障害受容の段階をとらえることができる		4	3	2	1
	3) 疾病・外傷の回復過程において、障害された日常生活の再構築に向けた援助ができる	*	*	*	*	*
	(1) 疾患や治療に伴う身体的苦痛を最小限にとどめる援助ができる		4	3	2	1
	(2) 回復過程でおこりうる合併症や二次障害を予防する援助ができる		4	3	2	1
	(3) 残存機能を活用し、日常生活を維持できるよう援助ができる		4	3	2	1
	(4) 日常生活の再構築に向けての援助ができる		4	3	2	1
	(5) 対象の状況に応じた精神的な支援を考えることができる		4	3	2	1
3. 対象の看護を通して、チーム医療を理解できる	1) チーム医療の必要性を考えることができる		4	3	2	1
	2) チーム医療における看護師の役割を考えることができる		4	3	2	1
4. 対象に必要な社会資源を理解できる	1) 対象に必要な社会の支援体制・制度を考えることができる		4	3	2	1
5. 看護実践を通して看護に対する関心を深め看護観を養う	1) 障害の受容過程をとらえて看護する重要性を考えることができる		4	3	2	1
	2) 日常・社会生活再構築に向けた看護について、自己の考えを述べるができる		4	3	2	1
6. 看護者として基本的な態度を養う	1) 積極的に行動できる		4	3	2	1
	2) チームの一員として役割を認識し、責任ある行動がとれる		4	3	2	1
	3) 自己の課題を明確にすることができる		4	3	2	1
	4) 自己の健康管理ができる		4	3	2	1
	5) 記録物の管理ができて記録物の提出期限が守れる		4	3	2	1
学生コメント	自己評価を（ ）とした理由	教員評価：A B C D （ ）点 欠席：（ ）時間 遅刻：（ ）時間 早退：（ ）時間				
教員コメント		担当教員 印				

A:よくできた B:だいたいできた C:努力を要する D:かなりの努力を要する

学生サイン：

日付：

令和 年度 成人看護学実習Ⅲ評価表

学籍番号：		実習期間：令和 年 月 日 ～ 月 日				
氏名：		実習施設：				
評価項目	評価内容	学生自己評価	教員評価			
			A	B	C	D
1. 発達段階・発達課題をふまえて、対象をとらえることができる	1) 身体的側面をとらえることができる		4	3	2	1
	2) 心理・社会的側面をとらえることができる		4	3	2	1
	3) 健康観・価値観をとらえることができる		4	3	2	1
2. 対象の健康段階に応じた看護を実践できる	1) 慢性疾患をもつ対象を理解できる	*	*	*	*	*
	(1) 病態生理、治療、検査を理解できる		4	3	2	1
	(2) 現在の入院に至る経過とその要因を理解できる		4	3	2	1
	(3) 現在の身体状態、起こりうる合併症や二次障害を観察できる		4	3	2	1
	(4) 疾病および治療により影響を受ける日常生活動作やセルフケア能力がわかる		4	3	2	1
	(5) 現在の患者の抱える葛藤や不安、困難がわかる		4	3	2	1
	(6) 入院前の社会生活および社会的役割がわかる		4	3	2	1
	2) セルフマネジメント支援に向けての援助ができる	*	*	*	*	*
	(1) 身体的苦痛を最小限にし、今後の合併症や二次障害を予防する援助ができる		4	3	2	1
	(2) 今後のセルフマネジメントにむけて、意思や困りが傾聴できる		4	3	2	1
	(3) セルフマネジメントにおける課題を対象と一緒に考えることができる		4	3	2	1
	(4) セルフマネジメントにおける課題に対し、必要な援助ができる		4	3	2	1
	(5) 自己効力感を高める援助ができる		4	3	2	1
	(6) 対象の状況に応じた精神的な支援を考えることができる		4	3	2	1
3. 対象の看護を通して、チーム医療を理解できる	1) チーム医療の必要性を考えることができる		4	3	2	1
	2) チーム医療における看護師の役割を考えることができる		4	3	2	1
4. 対象に必要な社会資源を理解できる	1) 対象に必要な社会の支援体制・制度を考えることができる		4	3	2	1
5. 看護実践を通して看護に対する関心を深め看護観を養う	1) 病と共に生きる対象のQOLを考えることができる		4	3	2	1
	2) セルフマネジメントに向けた看護について、自己の考えを述べるができる		4	3	2	1
6. 看護者として基本的な態度を養う	1) 積極的に行動できる		4	3	2	1
	2) チームの一員として役割を認識し、責任ある行動がとれる		4	3	2	1
	3) 自己の課題を明確にすることができる		4	3	2	1
	4) 自己の健康管理ができる		4	3	2	1
	5) 記録物の管理ができて記録物の提出期限が守れる		4	3	2	1
学生コメント 自己評価を（ ）とした理由		教員評価：A B C D （ ）点 欠席：（ ）時間 遅刻：（ ）時間 早退：（ ）時間 担当教員 印				
教員コメント						

A:よくできた B:だいたいできた C:努力を要する D:かなりの努力を要する

学生サイン：

日付：

老年看護学実習

I. 目的

老年期にある対象の特徴を理解し、加齢による心身の変化と健康問題を総合的に捉え、看護を実践する基礎能力を養う。また高齢者の保健・医療・福祉のニーズに対応する援助システムにおいて理解を深め、高齢者看護の基本を学ぶ

II. 目標

1. 高齢者の特徴を身体的・精神的・社会的側面から統合的に捉え、加齢に伴う変化に個人差があることを理解できる
2. 高齢者の生活を知り、健康の保持・増進・疾病予防のための援助の重要性について理解できる
3. 高齢者の自立やQOL を高めるための援助の重要性を理解できる
4. 健康障害をもつ高齢者とその家族を総合的に理解し、対象に応じた看護を一部実施できる
5. 多職種との協働・連携の必要性がわかり、保健・医療・福祉チームの一員としての看護の役割を理解できる
6. 「高齢者の医療の確保に関する法律」「老人福祉法」「介護保険法」に基づく種々の健康対策および福祉対策を理解し、看護の役割を学ぶ
7. 高齢者との関わりを通して、自己の老年観を養う

III. 構成

1. 老年看護学実習（4単位：180 時間）

- | | |
|------------------------|---------------------------------|
| 1) 老年看護学実習Ⅰ（2単位：90 時間） | ・入院治療を必要とする高齢者の看護
（2年次に履修する） |
| 2) 老年看護学実習Ⅱ（1単位：45 時間） | — 保健福祉施設及び地域で生活する
高齢者の支援 |
| 3) 老年看護学実習Ⅲ（1単位：45 時間） | |

老年看護学実習Ⅰ

I. 目的

加齢に伴う変化と老年期に多くみられる疾病や障害を理解し、入院・治療を必要とする高齢者の看護を学ぶ

II. 目標

1. 高齢者の加齢に伴う変化を身体的・精神的・社会的側面から捉え個人差があることを知る
2. 高齢者の基本的ニーズが入院生活や健康障害によって受ける影響を知る
3. 高齢者の状態に応じた日常生活に必要な援助が実施できる
4. 高齢者の継続看護の必要性がわかり、社会資源について考えることができる

III. 行動目標

1. 高齢者の加齢に伴う変化を身体的・精神的・社会的側面から捉え個人差があることを知る
 - 1) 対象の発達段階の特徴や発達課題が述べられる
 - 2) 対象の加齢に伴う身体的変化を理解できる
 - 3) 対象の加齢に伴う認知機能の変化を理解できる
 - 4) 対象にとって老化の自覚や経験による個人差がわかる
 - 5) 入院や治療による社会・家庭での役割の変化を知ることができる
2. 高齢者の基本的ニーズが入院生活や健康障害によって受ける影響を知る
 - 1) 対象の健康段階(急性・慢性・回復・終末)とその経過が述べられる
 - 2) 対象の健康障害の病態生理および症状、治療、検査、処置について述べられる
 - 3) 援助前の対象の反応や変化を捉え観察することができる
 - 4) 対象の疾病や入院が、日常生活機能に及ぼす影響を情報収集しアセスメントできる
 - 5) 対象の看護問題を明確にし、全体像から優先度がわかる
3. 高齢者の状態に応じた日常生活に必要な援助が実施できる
 - 1) 対象の看護目標が個別性を踏まえ、設定できる
 - 2) 対象の生活習慣や生活リズムを踏まえた援助の方法が具体的に考えられる
 - 3) 対象の安全・安楽・自立を考慮し日常生活援助が実施できる
 - 4) 援助内容について対象の変化から評価・一部修正することができる
 - 5) 老年期の特徴を踏まえたコミュニケーションを図ることができる
 - 6) 対象の人生観・価値観をふまえ、尊重した対応ができる
 - 7) 対象の健康や疾病・治療に対する思いや考えを理解し実施できる
 - 8) 対象にとって家族がどのように影響しているのか知り家族に必要な援助を考えることができる
4. 高齢者の継続看護の必要性がわかり、社会資源について考えることができる
 - 1) 対象や家族が活用できる社会資源がわかる
 - 2) 退院後の生活に向けた継続看護の必要性がわかる

IV. 実習目標・学習内容

目 標	行動目標	学習内容	方法・留意点
1. 高齢者の加齢に伴う変化を身体的・精神的・社会的側面から捉え、個人差があることを知る	1) 対象の発達段階の特徴や発達課題が述べられる	(1) ライフサイクルからみた老年期 ①前期高齢者の特徴 ②後期高齢者の特徴 (2) 高齢者に対する発達課	・対象の発達について理論家の発達課題を用いて様式 2 にアセスメントする

2. 高齢者の基本的ニーズが入院生活や健康障害によって受ける影響を知る	2) 対象の加齢に伴う身体的変化を理解できる	題 ◎エリクソン ◎ハヴィガースト ◎ペック (1) 加齢に伴う身体的機能の変化 ◎循環器系の変化 ◎呼吸器系の変化 ◎消化器系の変化 ④腎・泌尿器系の変化 ⑤骨・筋・運動器系の変化 ⑥感覚器系の変化 ⑦皮膚の変化	・実習初日までに事前学習として、「老年期の特徴および加齢変化」を行う ・既習の「加齢に伴う変化」と対象を比較し身体的・精神的・社会的側面から個性を捉え、アセスメントする
	3) 対象の加齢に伴う認知機能の変化を理解できる	(1) 認知機能の変化と生活への影響 ◎認知能力の変化と影響 ◎記憶力の変化と影響 ◎高齢者に多い状態(うつ・せん妄・認知症)	・実習初日までに事前学習として、「認知機能の加齢変化」を行う ・対象の言動や行動から認知機能の変化について観察し、日常生活への影響について様式2でアセスメントする
	4) 対象にとって老化の自覚や経験による個人差がわかる	(1) 老化による自覚・思い・考え (2) 加齢に伴う変化における個人差	・定期的な観察(聴診、視診、触診)を行い、対象の状態をアセスメントし、様式2に記載する
	5) 入院や治療による社会・家庭での役割の変化を知ることができる	(1) 社会的変化の特徴と生活への影響 ◎経済状況・就業 ◎高齢者世帯・独居・老老介護・認知介護 (2) 社会・家庭での役割変化	・入院や治療による役割の変化について様式2にアセスメントする
	1) 対象の健康段階(急性・慢性・回復・終末)とその経過が述べられる	(1) 疾病の病態生理や障害の理解 ◎病態生理 ◎疾病の原因・誘因 ◎症状に伴う苦痛の有無と程度 ④現病歴・既往歴 ⑤疾病に関する検査の目的・内容・検査データ	・実習2日目までに対象の疾患について、学習を行う(解剖生理、病態及び症状、検査、治療、看護) ・対象や家族とのコミュニケーションや観察を通して情報収集をする
	2) 対象の健康障害の病態生理および症状、治療、検査、処置について述べられる 3) 援助前の対象の反応や変化を捉え観察することができる	(2) 一般状態の観察とアセスメント ◎バイタルサイン	・カルテや看護記録類から情報収集する ・情報は実習記録の様

		◎意識レベル ◎その他の一般状態 ④異常の早期発見 (3) 急変時の対応 (4) 高齢者に多い症状 (痛み, しびれ, 皮膚掻痒感, 視力低下, 難聴, 脱水, 褥瘡, 貧血, 浮腫, 電解質異常, 肝機能障害, 栄養障害, 高血圧, 不整脈, 倦怠感)	式 1(データベース)と様式2に主観的情報・客観的情報に分けて整理する ・主観的情報・客観的情報を用いて病態と関連づけてアセスメントし、様式2に記載する ・定期的な観察(聴診, 視診, 触診)を行い、対象の状態をアセスメントし、様式2に記載する ・対象に起きている諸症状の根拠についてアセスメントする
	4) 対象の疾病や入院が、日常生活機能に及ぼす影響を情報収集しアセスメントできる	(1) 日常生活機能 ◎食生活・食事動作・摂食機能・嚥下機能 ◎清潔・清潔行為・衣生活・更衣動作 ◎排泄状態・排泄動作 ④歩行・移動動作 ⑤生活リズムと睡眠 (2) 日常生活の評価指標 ◎基本的日常生活動作(BADL) ◎手段的日常生活動作(IADL) ◎バーセルインデックス ④カツインデックス ⑤障害老人の日常生活自立度	・食事・清潔・排泄・姿勢・運動・生活リズムなどの日常生活機能についてアセスメントし、様式2に記載する ・対象の日常生活機能について評価指標などを活用し、アセスメントする ・対象の「できない」部分だけではなく「できる」部分にも着目する
	5) 対象の看護問題を明確にし、全体像から優先度がわかる	(1) 顕在問題・潜在問題 (2) マズローの階層などを用いた問題の優先度	・情報を関連付けたうえで対象を理解し、顕在的・潜在的な問題かを考え、必要な問題を立案し、様式4にコード番号をつけて記載する ・関連図に様式 1(データベース)で記載した内容や様式 2 で分析した内容について身体的・精神的・社会的側面や生活面から全体像を記載する

3. 高齢者の状態に応じた日常生活に必要な援助が実施できる	1) 対象の看護目標が個別性を踏まえ、設定できる 2) 対象の生活習慣や生活リズムを踏まえた援助の方法が具体的に考えられる 3) 対象の安全・安楽・自立を考慮し日常生活援助が実施できる 4) 援助内容について対象の変化から評価・一部修正することができる	(1) 患者にとって達成可能な目標 (2) 測定や観察ができる内容 (3) 具体的な表現 (4) 達成可能な評価日の設定 (5) 1つの文章に1つの成果を記す (1) 対象の1日の過ごし方や価値観 ◎入院前の生活習慣 ◎生活リズム ◎活動と休息のバランス (1) 転倒予防のアセスメントと留意点 ◎転倒・転落・外傷の予防 ◎環境整備 (2) 廃用症候群のアセスメントと留意点 (3) 誤嚥予防のアセスメントと留意点 (4) 感染予防のアセスメントと留意点 (5) 日常生活援助 ◎食事援助:食事前の準備・食事介助の方法・嚥下状態の確認 ◎排泄援助:トイレ誘導・便器介助・おむつ交換 ◎睡眠援助:生活リズム ④清潔援助:入浴の工夫・清拭、陰部洗浄・手、足浴・洗髪・口腔ケア・義歯洗浄・更衣 ⑤移動・移乗の援助:歩行介助・車椅子移乗・杖歩行 (1) 看護目標の達成度 (2) 看護計画の再検討	・問題がどのように解決してほしいかを考え、目標を設定する ・実習期間中に達成可能で具体的な内容の目標とする ・対象の個別的を反映した目標とする ・高齢者の入院前の日常生活や生活習慣を把握し、それに近づくように援助を考える ・対象の安全・安楽について、転倒予防・廃用症候群・感染予防の視点から対象の状態を観察し、様式2 にアセスメントする ・転倒・転落のアセスメント表を参考にする ・対象の自立度や状態に応じた計画を立案のうえ、実施する ・残存機能を活かした援助や対象に応じた安全・安楽の援助を考える ・対象の食事・排泄・睡眠・清潔などの日常生活機能の自立度を理解し、個別性に合わせた援助を考え、実施できる ・援助中から援助後において対象の状態を観察する ・実施後は援助を振り返り、次回への改善策を具体的に考える
--------------------------------------	--	---	--

	5) 老年期の特徴を踏まえたコミュニケーションを図ることができる 6) 対象の人生観・価値観をふまえ、尊重した対応ができる 7) 対象の健康や疾病・治療に対する思いや考えを理解し実施できる	(1) 高齢者の特徴を踏まえたコミュニケーションの取り方 ◎視覚・聴覚などの感覚機能の変化 ◎認知機能の低下や言語障害 ◎コミュニケーション障害に合わせた具体的な方法 (1) 人生観・価値観 (2) 人間として尊重した態度 (1) 日常生活上の規制に対する思いや考え (2) 役割の変化に対する思いや考え (3) 受容の段階 ◎ショック期 ◎回復への期待 ◎悲哀 ④防衛 ⑤適応 (4) 健康や疾病・治療に対する思いや考え (5) 健康や疾病・治療に対する知識・対処方法 (6) 受容過程に応じた関わり (7) 自尊心や自信を高める関わり (8) 入退院への不安 (9) 急変時の不安 (10) 死への不安 (11) 状態を悪化させる要因の理解 ◎治療に対する理解不足 ◎治療の中断 ◎感染 (12) 治療が適切で正確に受けられる為の援助 ◎薬物療法 ◎運動療法 ◎安静療法	・対象の視覚・聴覚・認知機能などを踏まえ、工夫してコミュニケーションを行い、ペースに合わせた対応をする ・対象の生活習慣や価値観をふまえ、その人らしい生活が送れるように援助を考える ・援助前の状態を観察できる ・高齢者の特徴をふまえ、障害受容過程などを用いて、対象や家族の精神的側面を考える ・対象とのコミュニケーションや援助を通し、情報を収集する ・収集した情報は看護計画立案に活用する ・カルテや看護記録類から情報を収集する ・対象や家族のコミュニケーションを通し、対象や家族の思いを知る ・対象と家族の関係性や関わり、背景を通して、対象の社会的側面についてアセスメントする ・対象の受容過程を判断し、段階に応じた関わりを実施する（見守り、共感、支持など） ・自尊心や自信を高める関わりを実施する（尊重した言動、努力を認める、労うなど） ・対象の健康状態・治療状態に応じた援助を指導者または教員と共に
--	---	--	--

		④食事療法 ⑤手術療法 (13) 治療を受ける対象の援助指導 ㉟薬物の作用・副作用 ㉟薬剤の投与方法、保管方法 ㉟症状悪化の予防・対処方法 ④運動の方法の工夫 ⑤食事療法の原則・取り方、工夫 ⑥食事療法と運動療法の関連 ⑦日常生活指導 ⑧術後の指導 ⑨対象の理解の程度 ⑩対象の治療における継続性	実施する
	8) 対象にとって家族がどのように影響しているのか知り家族に必要な援助を考えることができる	(1) 家族の役割 (2) 家族介護の様相と課題 ㉟老老介護 ㉟認知介護 ㉟家族アセスメント (3) 継続看護	・対象や家族とのコミュニケーションを通し、対象や家族の思いを知る ・家族の生活状況・対象との関係・介護力などについて情報を得て、家族支援の必要性を考える
4. 高齢者の継続看護の必要性がわかり、社会資源について考えることができる	1) 対象や家族が活用できる社会資源がわかる 2) 退院後の生活に向けた継続看護の必要性がわかる	(1) 既習の社会資源の種類(人的・物的・制度) (1) 退院後の生活において、活用が考えられる社会資源	・対象にどのような職種が関わっているか、今後社会復帰に向けてどのようなサポートが必要か、事前学習をもとに関連付けて考える

V. 実習方法

1. 実習の組み立て

実習内容	時間配分	内 訳	実習時間	備 考
オリエンテーション	6 時間	実習調整1 時間 医療安全教育1 時間 領域担当3 時間 実習担当教員1 時間	(時間割を参照)	
臨地実習	80 時間	8 時間×10 日間	8 : 00～17 : 00	
実習のまとめ	4 時間	看護過程の振り返り	(時間割を参照)	
合 計	90 時間			

2. 老年看護学実習 I オリエンテーション

1) 領域実習についてオリエンテーション

実習要項に基づく

2) 東京女子医科大学足立医療センター、東京女子医科大学病院本院、東京女子医科大学八千代医療センターの各病棟直前オリエンテーション

3) 医療安全教育

4) 老年の看護過程の特徴

5) 記録用紙の説明

6) 実習準備

3. 事前学習＜講義・医学書院の教科書参照＞

1) 老年期の発達課題

2) 老年期の特徴および加齢変化について(身体的・精神的・社会的) 認知機能の変化

3) 看護過程

4) 社会資源について(介護保険)

5) 高齢者へのコミュニケーション

4. 学習のまとめ

5. 実習の進め方

	月	火	水	木	金
進 度	◎患者紹介 ◎情報収集 ・データベース ・S情報 ・O情報 ◎疾患の学習	◎情報収集 ・S情報 ・O情報 ◎加齢に伴う 変化及び病状と 病態生理の 関連付け ◎アセスメント	(学内) ◎加齢に伴う変 化及び病状と 病態生理の 関連付け ・アセスメント ◎全体像を統合 ・関連図	◎情報収集 ・S情報 ・O情報 ◎加齢に伴う 変化及び病状 と病態生理の 関連付け ◎アセスメント ④ケアの実施	◎看護上の問題 抽出 ◎看護目標の設 定 ◎計画立案 ④ケアの実施 ⑤中間カンファ レンス「看護問題 と看護の方向性 について」
	月	火	水	木	金
進 度	◎計画の実施 ◎計画の評価・ 修正	◎計画の実施 ◎計画の評価・ 修正	学内 ◎看護過程の 再検討 ◎計画の評価 修正	◎計画の実施 ◎計画の評価・ 修正	◎計画の実施 ◎計画の評価 ◎最終カンファ レンス 「実習での学び と今後の課題」 *記録提出

学内学習内容 1)原則水曜日は学内で実習する

2)実習記録の指導を受け、記録の整理を行う

VI. 実習記録

成人看護学実習に準ずる

VII. 評価

別紙参照

VIII. 実習記録の提出

指定された日時に提出する(各自、月日・曜日・時間確認し記入する)

令和 年 月 日() 時 締切(時間厳守)

老年看護学実習Ⅱ

I. 目的

介護老人保健施設での高齢者の関わりを通して、高齢者の理解を深めると共に看護の役割と高齢者福祉について学ぶ

II. 目標

1. 介護老人保健施設の役割と機能について理解できる
2. 高齢者の自立を支援した日常生活の援助がわかる
3. 施設における保健・医療・福祉チームの多職種連携を知り、看護・介護の役割を知る
4. 高齢者との関わりを通して、自己の老年観を養うことができる

III. 行動目標

1. 介護老人保健施設の役割と機能について理解できる
 - 1) 施設の概要・事業内容について知る
 - 2) 入所者および利用者の特徴を知る
 - 3) 介護老人保健施設の課題がわかる
2. 高齢者の自立を支援した日常生活の援助がわかる
 - 1) 高齢者に特有な健康障害の特徴と医療処置の内容、自立を支援した援助の方法がわかる
 - 2) 入所者および利用者の1日の過ごし方がわかる
 - 3) 入所者および利用者のニーズに応じた日常生活援助の実際を知る
 - 4) 入所者および利用者のQOLを高めるために行っている援助の内容を知り、一緒に実施することができる
 - 5) 入所者および利用者の安全を配慮した行動がとれる
 - 6) 入所者および利用者の考え方や方法を尊重した対応ができる
 - 7) 入所者および利用者にあつたコミュニケーション手段がわかり、ペースに合わせた対応ができる
 - 8) 高齢者を取り巻く人間関係・家族の役割について考えることができる
 - 9) 現代の高齢者問題について考え、述べるができる (追加)
3. 施設における保健・医療・福祉チームの多職種連携を知り、看護・介護の役割を知る
 - 1) 入所者および利用者を取り巻く看護師や介護士の役割について知ることができる
 - 2) 入所者および利用者を取り巻く様々な職種について知り、協働・連携の実際がわかる
4. 高齢者との関わりを通して、自己の老年観を養うことができる
 - 1) 入所者や利用者に対し、自尊心を尊重する関わりがもてる
 - 2) 自己の老年観について考え、述べるができる

IV. 実習目標・学習内容

目 標	行動目標	学習内容	方法・留意点
1. 介護老人保健施設の役割と機能について理解できる	1) 施設の概要・事業内容について知る	(1) 介護老人保健施設の理念・方針 (2) 介護老人保健施設の基本事業 ◎施設概要 ◎事業内容 (3) 介護老人保健施設の構造(居室、娯楽室、談話室、食	・オリエンテーション(学内・現地)や施設見学で施設の概要や事業、入所者や利用者の特徴についての説明を受ける 課題レポートⅡ-1-◎レポートに記載する

2. 高齢者の自立を支援した日常生活援助がわかる	2) 入所者および利用者の特徴を知る 3) 介護老人保健施設の課題がわかる	堂, 機能訓練室, 浴室, デイケア) (4) 施設の人員配置・体制 (医師, 看護職員, 介護職員, 介護支援専門員, 理学療法士, 作業療法士, 薬剤師, 栄養士, 言語聴覚士, 音楽療法士) (1) 入所者や利用者の特徴 ◎要介護度状況、日常生活動作状況 ◎平均年齢 ◎感染症状況 ④平均入所期間、退所者状況、入所待機者状況、デイケアの利用状況	・机上で学んだことと施設の実際を関連付けて課題を考える ・「介護老人保健施設の役割と機能」「実際の場面を通し学んだこと」「介護老人保健施設の課題と自分の考え」について学内学習の時間を用いてレポートに記載する <u>課題レポートⅡ-1-③</u>に記載する
	1) 高齢者に特有な健康障害の特徴と医療処置の内容、自立を支援した援助の方法がわかる	(1) 健康障害の特徴について (2) 医療処置について (3) 高齢者の自立支援の方法	・施設の役割と機能を考え健康障害の特徴を捉える ・記録やオリエンテーションの内容から確認する ・医療処置について指導者と共に見学, 一部実施する ・施設から配布された実習スケジュール表に基づいて行動する ・学生は様式 6 に目標・行動計画を立案して実習に臨み, 指導を受ける. 学んだ内容, 理解した内容, 実施した内容を具体的に記入する
	2) 入所者および利用者の1日の過ごし方がわかる	(1) 1日のスケジュール内容と過ごし方	・1日のスケジュールにどのような意図があるのか考え確認する
	3) 入所者および利用者のニーズに応じた日常	(1) 利用者のニーズと提供内容	・日常生活援助(入浴・食事・排泄)を看護師と

	生活援助の実際を知る	(2) 施設やデイケアの日常生活支援 (食事、排泄、清潔、活動について)	共に見学し、一部実施する ・実際の援助を通して日常生活の方法・留意点・工夫点を把握する ・日常生活援助の際は安全・安楽・自立に配慮する ・ <u>摘便モデルを用いた演習を学内学習の時間を用いて行う</u>
	4) 入所者および利用者の QOL を高めるために行っている援助の内容を知り、一緒に実施することができる	(1)QOL を高める援助方法	
	5) 入所者および利用者の安全を配慮した行動がとれる	(1) 入居者や利用者の安全、安楽に配慮した関わり方 ◎事故防止対策 ◎防災及び災害時対策	・既習学習, 事前学習を生かし高齢者と積極的にコミュニケーションをはかり, 方法や工夫について理解を深める
	6) 入所者および利用者の考え方や方法を尊重した対応ができる	(1) 尊重した対応	・デイケア送迎時など, 家族との情報共有や連携を見学する
	7) 入所者および利用者にあったコミュニケーション手段がわかり、ペースに合わせた対応ができる	(1) 入所者や利用者にあったペースやコミュニケーション	
	8) 高齢者を取り巻く人間関係・家族の役割について考えることができる	(1) 入居者や利用者を取り巻く人間関係や家族の役割 ◎家族との連携システム	
	9)現代の高齢者問題について考え、述べる事ができる	(1) 現代の高齢者問題について	・「現代の高齢者問題について」学内学習の時間を用いて新聞やニュースなどから関心のある1事例を選び, 社会的背景などを踏まえレポートに記載する(1,200字程度). 別紙に新聞記事などを

3. 施設における保健・医療・福祉チームの多職種連携を知り、看護・介護の役割がわかる	1) 入所者および利用者を取り巻く看護師や介護士の役割について知ることができる 2) 入所者および利用者を取り巻く様々な職種について知り、協働・連携の実際がわかる	(1) 生活を支える職種の役割や機能 (2) 多職種との協働・連携、情報共有の方法(記録類、申し送り、カンファレンスなど)	<u>添付する課題レポートⅡ-2</u> (学生便覧のレポートの書き方に準ずる) ・日常生活援助やレクリエーションなどで看護師や介護士の協働、連携を知る ・実習を通し、職種の役割や機能を知り、多職種との協働や連携を学ぶ ・「介護老人保健施設における看護師の役割、多職種の果たす役割」と連携について実際の場面を通し学んだことについて学内学習の時間を用いてレポートに記載する。 <u>課題レポートⅡ-1-②</u>に記載する。 ・高齢者を尊重して関わる ・実習やカンファレンスを通して、考えを深め、共有する。<u>様式7</u>
4. 高齢者との関わりを通して、自己の老年観を養うことができる	1) 入所者や利用者に対し、自尊心を尊重する関わりがもてる 2) 自己の老年観について考え、述べることができる	(1) 自尊心を尊重する関わり方 (2) 老年観	・高齢者を尊重して関わる ・実習やカンファレンスを通して、考えを深め、共有する。<u>様式7</u>

V. 実習方法

1. 実習の組み立て

実習内容	時間配分	内 訳	実習時間	備 考
オリエンテーション	3 時間	施設のオリエンテーション1 時間 医療安全教育1 時間 領域担当1 時間	(時間割を参照)	
臨地実習	40 時間	8 時間×5 日間	8 : 00～17 : 00	
実習のまとめ	2 時間		(時間割を参照)	
合 計	45 時間			

2. 老年看護学実習Ⅱオリエンテーション

1) 実習について

(1) 実習要項に基づく

(2) 実習タイムスケジュール

2) 施設・デイケアオリエンテーション

千壽介護老人保健施設、むくげのいえ介護老人保健施設

(1) 内容

施設

◎基本事業:概要、事業内容、構造、人員配置・体制

◎看護及び介護理念・方針

◎入所者の特徴:要介護度状況、日常生活動作状況、平均年齢、感染症状況、平均入所期間、退所者状況、入所待機者状況、病弱入所者(尿道留置カテーテル、胃瘻、インスリン注射、吸引など)状況

④看護及び介護体制:健康管理、受診・入退院、看取り対応、感染予防・管理

⑤関係機関や多職種との連携・協働

⑥事故防止対策・防災及び災害時対策

⑦家族の連携システム

⑧看護師業務の1日の流れ

デイケア

◎利用者の特徴:要介護度状況、日常生活動作状況、平均年齢、利用状況

◎利用者の健康管理体制

◎多職種との連携・協働

④事故防止対策・防災及び災害時対策

⑤家族の連携システム

⑥デイケアの日課

(2) 方法

◎施設に行き、指導者からオリエンテーションを受け施設見学を行う。または学内で施設指導者からオリエンテーションを受ける

◎服装:スーツ・校章着用、学内ではIDカード着用する。長い髪は一つに束ね整える。
施設内はナースシューズを使用する

3) 医療安全教育

4) 実習準備:実習中は演習着着用(実習着の正しい着用方法に準ずる)、ナースシューズ、レインコート、記録運搬用バック、施設ごとの実習連絡ファイル、カンファレンスノート

5) 記録用紙の説明

(1) 日々の実習記録

様式6(老年看護学実習Ⅱ・Ⅲ用)

*指導者のサインを必ずもらうこと(出席の有無に該当する)

(2) 課題レポート

課題レポートⅡ-1-◎~◎(既定の用紙に記入)

課題レポートⅡ-2(学生便覧のレポートの書き方に準ずる)

(3) 実習まとめ

様式7

(4) 評価表

3. 事前学習＜講義・医学書院の教科書参照＞※老年看護学実習Ⅰのファイルを継続使用し、深める
- 1) 高齢者に特有な症候・疾患・障害と看護
 - 2) 高齢者の発達課題
 - 3) 老年期の特徴及び加齢に伴う変化について(身体的・精神的・社会的)
 - 4) 介護老人保健施設における介護保険制度について
 - 5) 各職種の役割について(看護師・介護士・理学療法士・作業療法士・言語聴覚士・医師・栄養士)

4. 実習のまとめ

5. 実習の進め方

1) 施設実習日程

		月	火	水	木	金
	月日	/	/	/	/	/
G		施設実習	デイケア実習	学内実習 2G合同カンファレンス 演習「摘便」	学内実習	学内実習
		施設実習	デイケア実習			
		施設実習	デイケア実習			
		デイケア実習	施設実習			
		デイケア実習	施設実習			
		デイケア実習	施設実習			

2) 学内実習

- (1) 記録の整理
- (2) 学内学習中の課題レポート作成
- (3) 演習「摘便」

VI. 実習記録

評価表・様式6・様式7・課題レポートⅡ－1—◎～◎・課題レポートⅡ－2

VII. 評価

別紙参照

VIII. 実習記録の提出

実習最終日に提出(メンバー表・評価表・様式6・課題レポートⅡ－1—◎～◎・様式7・自己学習・配布資料)

令和 年 月 日 () 時 締切(時間厳守)

老年看護学実習Ⅱ

1. 介護老人保健施設の役割と機能

1) 介護老人保健施設」の特徴(老年看護学や社会福祉のテキストなど参照し記入する)

施設	関係法規	利用対象者		利用者負担	食事
		年齢	条件		
介護老人保健施設	法	歳 以上	(原則 以上の者)	()負担 または ()負担	あり

2) 介護保険制度における施設サービスの指定基準(入居者100人あたり)

* テキストを参考に記入

* 実習した施設の状況を記入する

介護老人保健施設	()介護老人保健施設
対象者	施設における入居者の基準
必要な施設 療養室：()人以下、ユニット()人以下 一人あたり()㎡以上 廊下幅：()m以上 中廊下：()m以上 食堂：()㎡かける定員数以上 浴室：() 診察室、機能訓練室、談話室、洗面設備、トイレ、レクリエーションルーム、サービスステーション、調理室、洗濯室・場、汚物処理室	
人員基準 医師：()()人以上 薬剤師； 看護・介護職員；()人以上、(うち看護・介護職員の総数に対し、看護は2/7、介護は5/7) 理学療法士、作業療法士また言語聴覚士；()人以上 介護支援専門員；()人	

3)介護老人保健施設の役割と機能

(1)施設の概要・事業内容・役割・機能・特徴、理念・方針

(2)介護老人保健施設の役割と機能について実際の場面を通し学んだこと

(3) 多職種連携と看護師の役割について学んだこと

(4) 介護老人保健施設の課題と自分の考え

本日の目標		
計画	修正計画	実施内容
振り返り および 学び（指導者からの助言等）		

1. 実習で学んだことと自己の課題について(自己の老年観についても記載する)

老年看護学実習Ⅲ

I. 目的

介護老人福祉施設での高齢者の関わりを通して、高齢者の理解を深めると共に高齢者福祉について学ぶ

II. 目標

1. 介護老人福祉施設の役割と機能について理解できる
2. 高齢者の生活史・時代背景を重視した日常生活の支援がわかる
3. 高齢者の自立や生きがいをもつための支援がわかる
4. 高齢者の生活を支える職種の役割と、その協働・連携がわかる
5. 高齢者との関わりを通して、自己の老年観を養うことができる

III. 行動目標

1. 介護老人福祉施設の役割と機能について理解できる
 - 1) 施設の概要・事業内容を知る
 - 2) 入居者や利用者の特徴を知る
 - 3) 介護老人福祉施設の課題がわかる
2. 高齢者の生活史・時代背景を重視した日常生活の支援がわかる
 - 1) 入居者や利用者の1日の過ごし方がわかる
 - 2) 入居者や利用者の健康の保持・増進・疾病予防の支援の実際を知る
 - 3) 入居者やデイサービス利用者の生活史を重視した日常生活支援の実際を知る
 - 4) 入居者や利用者に応じたコミュニケーションの手段がわかり、ペースに合わせた対応ができる
 - 5) 入居者や利用者の安全に配慮した関わりがもてる
 - 6) 高齢者を取り巻く人間関係・家族の役割について考え、述べるができる
3. 高齢者の自立や生きがいをもつための支援がわかる
 - 1) 施設におけるレクリエーションや行事の内容とその意義がわかる
 - 2) 入居者や利用者の個別に応じた余暇活動への支援がわかる
 - 3) 入居者や利用者の自立支援の実際を知る
 - 4) 高齢者のQOLについて考え、述べるができる
 - 5) 最後の人生を施設で生活するに至った経緯と高齢者の思いを知ることができる
4. 高齢者の生活を支える職種の役割と、その協働・連携がわかる
 - 1) 入居者や利用者の生活を支える職種の役割や機能がわかる
 - 2) 多職種との協働・連携について考え、必要性がわかる
5. 高齢者との関わりを通して、自己の老年観を養うことができる
 - 1) 入居者や利用者に対し、自尊心を尊重する関わりがもてる
 - 2) 自己の老年観について考え、述べるができる

IV. 実習目標・学習内容

目 標	行動目標	学習内容	留意点・方法
1. 介護老人福祉施設の役割と機能について理解できる	1) 施設の概要・事業内容を知る	(1) 介護老人福祉施設の理念・方針 (2) 介護老人福祉施設の基本事業 ◎施設概要 ◎事業内容 (3) 介護老人福祉施設の構造(居室, 娯楽室, 談話室, 食堂, 機能訓練室, 浴室, デイサービス) (4) 施設の人員配置・体制(医師, 看護職員, 介護職員, 介護支援専門員, 理学療法士, 作業療法士, 薬剤師, 栄養士, 言語聴覚士, 音楽療法士)	・オリエンテーション(学内・現地)や施設見学で施設の概要や事業, 入居者や利用者の特徴について説明を受ける ・「介護老人福祉施設の役割と機能」について学内学習の時間を用いてレポートに記載する ・机上で学んだことと施設の実際を関連付けて課題を考える <u>課題レポートⅢ-1-③</u> に記載する
	2) 入居者やデイサービス利用者の特徴を知る	(1) 入居者や利用者の特徴 ◎要介護度状況, 日常生活動作状況 ◎平均年齢 ◎感染症状況 ④平均入所期間, 退所者状況, 入所待機者状況, デイサービスの利用状況 ⑤病弱入居者(尿道留置カテーテル, 胃瘻, インスリン注射, 吸引)状況	・指導者と共に入居者や利用者の看護を見学し, 一部実施する ・健康管理について指導者と共に見学, 一部実施する ・学生は目標・行動計画を立案して実習に臨み, 指導を受ける
	3) 介護老人福祉施設の課題がわかる	(2) 施設やデイサービスの日課	
2. 高齢者の生活史・時代背景を重視した日常生活の支援がわかる	1) 入居者やデイサービス利用者の1日の過ごし方がわかる	(1) 1日のスケジュール内容と過ごし方	・オリエンテーションで日課を知る ・指導者と共に入居者や利用者の日常生活支援を見学し, 一部実施する
	2) 入居者やデイサービス利用者の健康の保持・増進・疾病予防の支援の実際を知る	(1) 施設やデイサービスで行われている看護や介護 ◎健康管理体制(観察・異常時対応, 予防など) ◎病院への受診・入退院 ◎看取りの対応 ④感染予防・管理 ⑤服薬管理 ⑥医療処置	・「介護老人福祉施設で生活する高齢者の特徴と生活支援」について課題レポートⅢ-1-③に記載し課題レポートⅢ-2へつなげる。

3. 高齢者の自立や生きがいをもつための支援がわかる	3) 入居者やデイサービス利用者の生活史を重視した日常生活支援の実際を知る	(1) 施設やデイサービスの日常生活支援 ◎食事, 排泄, 清潔, 活動について	・高齢者を尊重して関わる ・入居者や利用者と積極的にコミュニケーションをはかり, 理解を深める(1対1や複数, 余暇活動, 難聴や認知力低下の高齢者) ・実習を通し, 高齢者同士や高齢者とスタッフの関係性や関わり方を学ぶ ・会話を通して感じたことや学んだことをまとめることで高齢者の理解を深める <u>課題レポートⅢ—1-◎</u> に記載する。
	4) 入居者やデイサービス利用者に合ったコミュニケーションの手段がわかり、ペースに合わせた対応ができる	(1) 入居者や利用者にあったペースやコミュニケーション	・施設見学や実習を通し, 安全・安楽に配慮した環境や工夫を学ぶ
	5) 入居者や利用者の安全に配慮した関わりがもてる	(1) 入居者や利用者の安全、安楽に配慮した関わり方 ◎事故防止対策 ◎防災及び災害時対策	・デイサービス送迎時など, 家族との情報共有や連携を見学する
	6) 高齢者を取り巻く人間関係・家族の役割について考え、述べるができる	(1) 入居者や利用者を取り巻く人間関係や家族の役割 ◎家族との連携システム	・指導者又はスタッフと共にレクリエーションや行事に参加し, 内容や意義, 自立支援の方法を学ぶ
	1) 施設におけるレクリエーションや行事の内容とその意義がわかる	(1) レクリエーションや行事の内容と意義	・ <u>介護予防のための運動の機能向上プログラムを実施する(目的・方法・安全を考え計画する。必要物品も準備する。デイサービスで準備できるものもあるため、企画書は実習初日に施設担当指導者に提出し、実施に向けての指導を受ける。企画用紙は、学校指定のものを使用する。</u>
	2) 入居者やデイサービス利用者の個別に応じた余暇活動への支援がわかる	(1) 個別に応じた余暇活動への支援	・ <u>行った結果は様式6で評価する</u>
	3) 入居者やデイサービス利用者の自立支援の実際を知る	(1) 入居者や利用者の自立支援の関わり方	

			・カンファレンスやレポートなどで自分の考えや思いをまとめ、述べる ・「施設で生活する高齢者の特徴と生活の質」について学内学習の時間を用いレポートに記載する(1200字程度) <u>課題レポートⅢ—2</u> (学生便覧のレポートの書き方に準ずる)
	4) 高齢者の QOL について考え、述べることができる 5) 最後の人生を施設で生活するに至った経緯と高齢者の思いを知ることができる	(1) 施設で生活する高齢者の特徴と生活支援 (2) 高齢者のQOLについて (1) 施設で生活する高齢者の思い	・入所時の記録や高齢者とのコミュニケーションを通し、高齢者の多様性を把握する これを老年実習Ⅱの課題レポートⅡ-2 に繋げる
	1) 入居者や利用者の生活を支える職種の役割や機能がわかる 2) 多職種との協働・連携について考え、必要性がわかる	(1) 生活を支える職種の役割や機能を知る (1) 多職種との協働・連携 ◎情報共有の方法(記録類、申し送り、カンファレンスなど)	・事前に「社会資源」について学習する ・実習を通し、職種の役割や機能を知り、多職種との協働や連携を学ぶ
4. 高齢者の生活を支える職種の役割と、その協働・連携がわかる	1) 入居者やデイサービス利用者に対し、自尊心を尊重する関わりがもてる 2) 自己の老年観について考えを深め、老年実習Ⅱのまとめで述べるることができる。	(1) 自尊心を尊重する関わり方 (1) 老年観	・実習やカンファレンスを通して、考えを深め、共有する 老年実習Ⅱの様式7
5. 高齢者との関わりを通して、自己の老年観を養うことができる			

V. 実習方法

1. 実習の組み立て

実習内容	時間配分	内 訳	実習時間	備 考
オリエンテーション	5 時間	施設のオリエンテーション1 時間 医療安全教育1 時間 領域担当3 時間	(時間割を参照)	
臨地実習	40 時間	8 時間×5 日間	8 : 00～17 : 00	
合 計	45 時間			

2. 老年看護学実習Ⅲオリエンテーション

1) 実習について

(1) 実習要項に基づく

(2) 実習タイムスケジュール

2) 施設オリエンテーション

(現地・学内)

介護老人福祉施設()

(1) 内容

- ①基本事業:概要、事業内容、構造、人員配置・体制
- ②看護及び介護理念・方針
- ③入居者の特徴:要介護度状況、日常生活動作状況、平均年齢、感染症状況、平均入所期間、退所者状況、入所待機者状況、病弱入居者(尿道留置カテーテル、胃瘻、インスリン注射、吸引など) 状況
- ④看護及び介護体制:健康管理、受診・入退院、看取り対応、感染予防・管理
- ⑤関係機関や多職種との連携・協働
- ⑥事故防止対策・防災及び災害時対策
- ⑦家族の連携システム
- ⑧看護師業務の1日の流れ
- ⑨デイサービスのレクリエーションを企画する

(2) 方法

- ①施設または学内で、指導者からオリエンテーションを受ける。
- ②服装:スーツ・校章着用、学内では ID カード着用。長い髪は一つに束ね整える。
施設内はナースシューズを使用する

3) デイサービス実習オリエンテーション

(1) 内容

- ①利用者の特徴:要介護度状況、日常生活動作状況、平均年齢、利用状況
- ②利用者の健康管理体制
- ③多職種との連携・協働
- ④事故防止対策・防災及び災害時対策
- ⑤家族の連携システム
- ⑥デイサービスの日課

4) 医療安全教育

5) 実習準備: 演習着着用(実習着の正しい着用方法に準ずる)、ナースシューズ、記録運搬用バック、施設ごとの実習連絡ファイル

6) 記録用紙の説明

(1) 日々の実習記録

様式6(老年看護学実習Ⅱ・Ⅲ用)

* 指導者のサインを必ずもらうこと(出席の有無に該当する)

(2) 課題レポート

課題レポートⅢ-1—①～③(既定の用紙配布)

課題レポートⅢ-2(学生便覧のレポートの書き方に準ずる)

(3) 実習まとめ

様式7

(4) 評価表

3. 事前学習※老年看護学実習Ⅰからのファイルを使用し内容を深めて使用する)

- 1) 老年期の特徴及び加齢に伴う変化について(身体的・精神的・社会的)
- 2) 高齢者の加齢の変化とアセスメントについて(ヘルスアセスメント、身体の高齢変化のアセスメント)
- 3) 高齢者の生活機能を整える看護について
- 4) 認知症の病態、看護、コミュニケーションについて
- 5) 介護保険制度のしくみについて
- 6) 高齢者のコミュニケーションとかわり方について
- 7) 介護予防を含んだデイサービスでのレクリエーションについて調べ、グループに提案できる準備をする。
(目的、方法、安全性をふまえ実習グループで考える)

4. 実習のまとめ

5. 実習の進め方

1) 施設実習日程

学生			月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
			/	/	/	/	/
G 6人	1班	①	施設	デイサービス	学内	学内	デイサービス 演習／ 最終カンファ
		②	施設	デイサービス	学内	学内	
	2班	③	デイサービス		施設	学内	
		④	デイサービス		施設	学内	
	3班	⑤		施設	デイサービス	学内	
		⑥		施設	デイサービス	学内	
G 7人	1班	①	施設	デイサービス	学内	学内	デイサービス 演習／ 最終カンファ
		②	施設	デイサービス	学内	学内	
	2班	③	デイサービス		施設	学内	
		④	デイサービス		施設	学内	
	3班	⑤		施設	デイサービス	学内	
		⑥		施設	デイサービス	学内	
		⑦		施設	デイサービス		

2) 学内実習

(1) 記録の整理

(2) 学内学習中の課題レポート作成

3) デイサービスで、「運動器の機能向上プログラムの披露」

実習初日に介護予防を含んだデイサービスでのレクリエーション企画書を臨地指導者に提出する。

(最終日に実施できるよう各班で毎日指導を受け、学内日に予行演習をして実施日に備える)

VI. 実習記録

評価表・様式6・様式7・課題レポートⅢ-1—◎～◎・課題レポートⅢ-2・デイサービスレクリエーション企画書(グループで一部作成する)

VII. 評価

別紙参照

VIII. 実習記録の提出(メンバー表・評価表・様式6・課題レポートⅢ-1—◎～◎・Ⅲ-2

・デイサービスレクリエーション企画書・様式7・自己学習・配布資料)

令和 年 月 日 () 時 締切(時間厳守)

老年実習Ⅲ デイサ - ビスレクリエーション企画書

実習グループ	G	メンバー氏名				
レクリエーションタイトル						
予定参加人数 (スタッフ除く)		目安 所要 時間		実施 日時	月 日 () 開始時間 ~	
対象者		会場レイアウト・人の配置				
目的・ねらい						
レクリエーションの内容						
準備物				注意事項 (安全面など)		
予算			備考			

老年看護学実習Ⅲ

課題レポートⅢ－1－㉔

学籍番号： 氏名：

1. 介護老人福祉施設の役割と機能

1「介護老人福祉施設」の基準（老年看護学や社会福祉のテキストなど参照し記入する）

施設	関係法規	利用対象者		利用者負担	食事
		年齢	条件		
介護老人福祉施設	法	歳 以上	（原則 以上の者）	（ ）負担 または （ ）負担	あり
特別養護老人ホーム	法	歳 以上			あり
養護老人ホーム	法	歳 以上			あり

2）介護保険制度における施設サービスの施設基準（入居者100 人あたり）

* テキストを参考に記入

* 実習した施設の状況を記入する

介護老人福祉施設	（ ）介護老人福祉施設
対象者	施設における入居者の基準
居室（ ）人、 一人あたり（ ）㎡以上 医務室、静養室、洗面設備、トイレ、機能訓練室、食堂、浴室など 廊下幅（ ）m 以上	
人員基準 医師：入所者の健康管理、療養上の指導を行うために必要な数 看護・介護職員（ ）人以上 介護支援専門員（ ）人以上 栄養士（ ）人以上 機能訓練指導員（ ）人以上	

3) _____ 介護老人福祉施設の役割と機能
(老年看護学テキスト 認知症高齢者への環境支援のための指針「PEAP 日本版」参照)

(1)施設の概要・事業内容・役割・機能・特徴、理念・方針

(2)施設の理念や方針を感じたところ

2. 介護老人福祉施設で生活する高齢者の特徴と生活支援

平均年齢	
入居期間と退所状況	
平均要介護度	
日常生活動作の状況	
健康管理体制	
生活支援	
安全対策	

1. コミュニケーションを通して学んだこと(印象に残った場面)

入居者の特徴	会話の内容	会話を通して感じたこと・学んだこと

本日の課題		
計画	修正計画	具体的実践内容と学び
振り返り および 学び（指導者からの助言等）		
指導者印orサイン		

1. 実習で学んだこと

令和 年度 老年看護学実習Ⅰ 実習評価表

学籍番号:		実習期間: 年 月 日()～ 月 日()							
学生氏名:		実習施設: 実習病棟:							
評価項目	評価内容	学 生 自 己 評 価	教員評価						
			A	B	C	D			
1. 高齢者の加齢に伴う変化を身体的・精神的・社会的側面から捉え個人差があることを知る	1)対象の発達段階の特徴や発達課題が述べられる		4	3	2	1			
	2)対象の加齢に伴う身体的変化を理解できる		4	3	2	1			
	3)対象の加齢に伴う認知機能の変化を理解できる		4	3	2	1			
	4)対象にとっての老化の自覚や経験による個人差が分かる		4	3	2	1			
	5)入院や治療による社会・家族での役割の変化を知ることができる		4	3	2	1			
2. 高齢者の基本的ニーズが入院生活や健康障害によって受ける影響を知る	1)対象の健康段階(急性・慢性・回復・終末)とその経過が述べられる		4	3	2	1			
	2)対象の健康障害の病態生理および症状、治療、検査、処置について述べられる		4	3	2	1			
	3)援助前の対象の反応や変化を捉え観察することができる		4	3	2	1			
	4)対象の疾病や入院が、日常生活機能に及ぼす影響を情報収集しアセスメントができる		4	3	2	1			
	5)対象の看護問題を明確にし、全体像から優先度がわかる		4	3	2	1			
3. 高齢者の状態に応じた日常生活に必要な援助が実施できる	1)対象の看護目標が個別性を踏まえ、設定できる		4	3	2	1			
	2)対象の生活習慣や生活リズムを踏まえた援助の方法が具体的に考えられる		4	3	2	1			
	3)対象の安全・安楽・自立を考慮し日常生活援助が実施できる		4	3	2	1			
	4)援助内容について対象の変化から評価・一部修正することができる		4	3	2	1			
	5)老年期の特徴を踏まえたコミュニケーションを図ることができる		4	3	2	1			
	6)対象の人生観・価値観をふまえ、尊重した対応ができる		4	3	2	1			
	7)対象の健康や疾病・治療に対する思いや考えを理解し実施できる		4	3	2	1			
	8)対象にとって家族がどのように影響しているのか知り家族に必要な援助が出来る		4	3	2	1			
4. 高齢者の継続看護の必要性がわかり、社会資源について考えることができる	1)対象や家族が活用できる社会資源がわかる		4	3	2	1			
	2)退院後の生活に向けた継続看護の必要性がわかる		4	3	2	1			
5. 実習への取り組み	1)積極的に行動できる(対象を尊重した誠実な態度を含む)		4	3	2	1			
	2)チームの一員としての役割を認識し責任ある行動ができる(忘れ物がない、連絡・報告・相談・確認ができる)		4	3	2	1			
	3)自己の課題を明確にすることができる		4	3	2	1			
	4)自己の健康管理ができる (欠席・遅刻・早退がない、体調不良がない、居眠りがない)		4	3	2	1			
	5)記録物管理ができ、記録物の提出期限が守れる (出席表および記録の提出や印忘れがない)		4	3	2	1			
実習の振り返り(学生) 自己評価を(点:)とした理由		教員評価: ABCD ()点 欠席: ()時間 担当教員 印							
教員コメント									
A:よくできた B:だいたいできた C:努力を要する D:かなりの努力を要する									

令和 年度 老年看護学実習Ⅱ 実習評価表

学籍番号:		実習期間: 年 月 日()～ 月 日()				
学生氏名:		実習場所:()介護老人保健施設				
評価項目	評価内容	教員評価				
		学生 評価	A	B	C	D
1.介護老人保健施設の役割と機能について理解できる	1)施設の概要・事業内容を知る		4	3	2	1
	2)－◎入所者の特徴を知る		4	3	2	1
	－◎デイケア利用者の特徴を知る		4	3	2	1
	3)介護老人保健施設の課題がわかる		4	3	2	1
2.高齢者の自立を支援した日常生活の援助がわかる	1)高齢者に特有な健康障害の特徴と日常生活援助がわかる		4	3	2	1
	2)－◎入所者の1日の過ごし方がわかる		4	3	2	1
	－◎デイケア利用者の1日の過ごし方がわかる		4	3	2	1
	3)－◎入所者のニーズに応じた日常生活援助の実際を知る		4	3	2	1
	－◎デイケア利用者のニーズに応じた日常生活援助の実際を知る		4	3	2	1
	4)高齢者の自立を支援した援助の方法がわかる		4	3	2	1
	5)高齢者の考え方や方法を尊重した対応ができる		4	3	2	1
	6)高齢者のコミュニケーションの手段がわかり、ペースに合わせた対応が できる		4	3	2	1
	7)－◎入所者の安全を配慮した行動がとれる		4	3	2	1
	－◎デイケア利用者の安全を配慮した行動がとれる		4	3	2	1
	8)高齢者のQOLを高めるために行っている援助の内容を知り、一緒に実施 することができる		4	3	2	1
	9)高齢者を取り巻く人間関係や家族の役割について考えることができる		4	3	2	1
3.施設における保健・医療・福祉チームの連携を知り、看護・介護の	1)高齢者を取り巻く看護師や介護士の役割について知ることができる		4	3	2	1
	2)高齢者を取り巻く様々な職種について知り、協働・連携の実際がわかる		4	3	2	1
4.高齢者との関わりを通して、自己の老年観を養うことができる	1)高齢者に対し自尊心を尊重する関わりがもてる		4	3	2	1
	2)自己の老年観について考え、述べるができる		4	3	2	1
5.実習への取り組み	1)積極的に行動できる(対象を尊重した誠実な態度を含む)		4	3	2	1
	2)チームの一員としての役割を認識し、責任ある行動ができる(忘れ物が ない、連絡・報告・相談・確認ができる)		4	3	2	1
	3)自己の課題を明確にすることができる		4	3	2	1
	4)自己の健康管理ができる(欠席・遅刻・早退がない、体調不良がない、居眠りが ない)		4	3	2	1
	5)記録物管理ができ、記録物の提出期限が守れる(出席表および記録の提 出や印忘れがない)		4	3	2	1
実習の振り返り(学生) 自己評価を()とした理由		教員評価:ABCD ()点 欠席:()時間遅 刻:()時間早退: ()時間担当教員 印				
教員コメント						
A:よくできた B:だいたいできた C:努力を要する D:かなりの努力を要する						

令和 年度 老年看護学実習Ⅲ 実習評価表

学籍番号:		実習期間: 年 月 日()～ 月 日()				
学生氏名:		実習場所:介護老人福祉施設(特別養護老人ホーム)()				
評価項目	評価内容	教員評価				
		学生自己	A	B	C	D
1. 介護老人福祉施設の役割と機能について理解できる	1)施設の概要・事業内容を知る		4	3	2	1
	2)入居者やデイサービス利用者の特徴を知る		4	3	2	1
	3)介護老人福祉施設の課題がわかる		4	3	2	1
2. 高齢者の生活史を重視した日常生活の支援がわかる	1)－①入居者の1日の過ごし方がわかる		4	3	2	1
	－②デイサービス利用者の1日の過ごし方がわかる		4	3	2	1
	2)入居者やデイサービス利用者の健康保持・増進・疾病予防の支援の実際を知る		4	3	2	1
	3)－①入居者の日常生活支援の実際を知る		4	3	2	1
	－②デイサービス利用者の日常生活支援の実際を知る		4	3	2	1
	4)高齢者に合ったコミュニケーションの手段がわかり、ペースに合わせた対応ができる		4	3	2	1
	5)－①入居者の安全に配慮した関わりがもてる		4	3	2	1
	－②デイサービス利用者の安全に配慮した関わりがもてる		4	3	2	1
3. 高齢者の自立や生きがいをもつための支援がわかる	1)施設におけるレクリエーションや行事の内容とその意義がわかる		4	3	2	1
	2)－①入居者の個別に応じた余暇活動への支援がわかる		4	3	2	1
	－②デイサービス利用者の個別に応じた余暇活動への支援がわかる		4	3	2	1
	3)－①入居者の自立支援の実際を知る		4	3	2	1
	－②デイサービス利用者の自立支援の実際を知る		4	3	2	1
	4)高齢者のQOLについて考え、述べるができる		4	3	2	1
4. 高齢者の生活を支える職種の役割とその協働・連携がわかる	1)高齢者の生活を支える職種の役割や機能がわかり、多職種との協働・連携について考え、必要性がわかる		4	3	2	1
5. 高齢者との関わりを通して、自己の老年観を養うことができる	1)高齢者に対し自尊心を尊重する関わりがもてる		4	3	2	1
6. 実習への取り組み	1)積極的に行動できる(対象を尊重した誠実な態度を含む)		4	3	2	1
	2)チームの一員としての役割を認識し責任ある行動ができる(忘れ物が無い、連絡・報告・相談・確認ができる)		4	3	2	1
	3)自己の課題を明確にすることができる		4	3	2	1
	4)自己の健康管理ができる(欠席・遅刻・早退がない、体調不良がない、居眠りがない)		4	3	2	1
	5)記録物管理ができ、記録物の提出期限が守れる(出席表および記録の提出や印忘れがない)		4	3	2	1
実習の振り返り(学生)	自己評価を()とした理由		教員評価:ABCD ()点 欠席:()時間遅刻:()時間早退: ()時間担当教員印			
教員コメント						
A:よくできた B:だいたいできた C:努力を要する D:かなりの努力を要する						

小児看護学実習

I. 目的

小児期にある子どもとその家族を理解し、成長・発達段階および健康段階に応じて必要な看護を学ぶ

II. 目標

1. 小児に興味を持ち子どもと関わりコミュニケーションをとることができる
2. 小児各期の発達段階の特徴を理解し、小児の健全な成長・発達を促すための必要な援助ができる
3. 健康障害や入院が、小児と家族の成長発達や日常生活に及ぼす影響を理解できる
4. 小児及び家族の特徴を踏まえ、小児の家族との関わり的重要性を理解できる
5. 小児の安全管理における看護師の責任を自覚し、事故防止に努めることができる

III. 実習構成

○ 保育園実習

健康な子どもの看護学実習

○ 小児病棟、小児外来実習

健康障害をもつ子どもの看護学実習

IV. 実習進度

1 週目	月	火	水	木	金
Aグループ	病棟実習	病棟実習	病棟実習	病棟実習	病棟実習
Bグループ	外来実習オリエンテーション	4 日間のうち2 日間を保育園実習, 1 日を小児外来実習, 1 日を学内で学生毎にローテーションする			
2 週目	月	火	水	木	金
Aグループ	外来実習オリエンテーション	4 日間のうち2 日間を保育園実習, 1 日を小児外来実習, 1 日を学内で学生毎にローテーションする			
Bグループ	病棟実習	病棟実習	病棟実習	病棟実習	病棟実習

V. 実習方法

1. オリエンテーション

実習要項に基づく

2. 事前学習

- 1) 小児の成長発達
- 2) 小児期の健康増進のための看護
- 3) 小児看護技術
- 4) 小児期特有の疾患
- 5) 小児期に起こりやすい事故と予防策

1. 実習の組み立て(90 時間2 単位)

実習内容	時間配分	内訳	実習時間	備考
オリエンテーション	6 時間	領域担当 5 時間 医療安全教育1 時間	(時間割を参照)	
臨地実習	保育園実習 16 時間	8 時間×2 日間	8 : 30~17 : 30	
	外来 8 時間	8 時間×1 日間	8 : 00~17 : 00	
	病棟 56 時間	8 時間×7 日間		
実習のまとめ	4 時間		(時間割を参照)	
合 計	90 時間			

VI. 実習記録

保育園実習 : 別紙参照

病棟、外来実習 : 様式1は別紙参照、それ以外は基礎看護学実習Ⅱ記録用紙に準ずる

VII. 実習記録の提出

別紙参照

VIII. 評価

小児看護学実習では、保育園・小児科外来・小児病棟の3 か所を総合的に評価する

保育園実習

I. 目的

健康な子どもと関わり、子どもの成長発達のプロセスを学ぶことができる

II. 目標

1. 小児期の特徴を踏まえて、各段階における成長・発達の実態を理解できる
2. 乳幼児の日常生活に触れ、成長発達段階に応じた養護及び自立への導き方がわかる
3. 小児にとっての遊びの重要性と社会性の発達を促すための知識をもとに実態を体験できる
4. 乳幼児の集団生活における安全管理と健康管理の実態に触れ、その在り方について学ぶことができる

III. 行動目標

1. 小児期の特徴を踏まえて、各段階における成長・発達の実態を理解できる
 - 1) 小児期の各期の発達における特徴を学習することができる
2. 乳幼児の日常生活に触れ、成長発達段階に応じた養護及び自立への導き方がわかる
 - 1) 子どもとコミュニケーションを図りながら、養護や日常生活の自立について指導者とともに体験をすることができる
3. 小児にとっての遊びの重要性と社会性の発達を促すための知識をもとに実態を体験できる
 - 1) 小児に関心を持ちながら、実際に遊びの援助や関わりを体験することができる
4. 乳幼児の集団生活における安全管理と健康管理の実態に触れ、その在り方について学ぶことができる
 - 1) 乳幼児の安全な環境および感染予防について知識を活用しながら、実態を体験することができる

IV. 実習目標・学習内容

実習目標	行動目標	学習内容	留意点・方法
1. 小児期の特徴を踏まえて、各段階における成長・発達の実態を理解できる	1)小児期の各期の発達における特徴を学習することができる	(1) 保育園内のオリエンテーションを受ける。 ※安全、子ども達の視点にたった設備に注目すること	既習学習を想起し、多視点から子どもを観る
2. 乳幼児の日常生活に触れ、成長発達段階に応じた養護及び自立への導き方がわかる	1)子どもとコミュニケーションを図りながら、養護や日常生活の自立について指導者とともに体験をすることができる	(1) 原則的に 2 日間同じクラスで実習をする。 (2) 学習すべき内容を踏まえ、指導者の指導のもと保育園の1 日のプログラムに沿って実習を行う。(児への挨拶、遊び・日常生活の援助など)	ありのままの子どもの成長発達を理解する 子どもの気持ちを共感的に理解できるように関わる 言葉づかいに留意して誠意をもってかかわる
3. 小児にとっての遊びの重要性と社会性の発達を促すための知識をもとに実態を体験できる	1)小児に関心を持ちながら、実際に遊びの援助や関わりを体験することができる	(1) 積極的に子どもと遊ぶ	遊びの関わりを振り返り助言を受ける
4. 乳幼児の集団生活における安全管理と健康管理の実態に触	1)乳幼児の安全な環境および感染予防について知識を活用し	(1) 感染予防対策が指導者とともに実施できる (2) 事故が起こりそうな環境	厳重に事故防止に気をつける 感染予防対策について

れ、その在り方について学ぶことができる	ながら、実際に体験することができる	に注意をして未然に事故防止ができるように努めることができる	事前に学習をする
---------------------	-------------------	-------------------------------	----------

V. 実習方法

1. 実習の進め方

【1日目】

8:30～ 実習開始	・園長先生へ出席表、事前学習の提出 ・保育園内の施設設備についてオリエンテーションを受ける
オリエンテーション終了後	・担当クラスへ配置 指導担当の先生へ本日の行動目標の発表と行動の確認 その後クラスにはいって実習開始（遊び、日常生活の援助など）お昼ご飯の配膳および援助、見学 午睡の援助
学生休憩	1時間昼休憩
15:30 まで	クラスに分かれて実習
15:30～16:00 まで	本日の学びについて記録時間
16:00～16:30 まで	・記録にそって「本日の振り返りおよび明日の学びの視点について」 クラス担当の先生から助言、指導を受ける ※助言をうけたことについて記録をしていただきサインを受けること ・園長先生に明日の最終カンファレンスの時間を調整する 後片付け、出席表の返却後帰校する

【2日目】

8 : 30	・園長先生へ出席表提出、本日の最終カンファレンスの場所の確認 それぞれのクラスに分かれて実習開始（遊び、日常生活の援助など） 可能であれば、親との朝の様子や関わりについても見学をする お昼ご飯の配膳および援助、見学 午睡の援助
学生休憩	1時間昼休憩
15 : 30 まで	クラスに分かれて実習 実習中に最終カンファレンスの実施（1 時間予定） 全てのクラスで集合して学んだことが共有できるようなカンファレンスを実施すること 記録のまとめ 後片付け、提出をした記録物の返却、出席表の返却

1) 実習中のカンファレンス

実習終了日（実習2 日目）に、「保育園実習で学んだこと」について行う

VI. 実習記録

1. 保育園実習記録表紙
2. 保育園実習記録（小―保―1）
3. 本日の実習記録（小―保―2）

VII. 実習記録の提出

指定された日時に提出する（各自、月日・曜日・時間を確認し記入する）

VIII. 評価

別紙参照

IX. 実習に臨む上での留意事項

1. 集合時間

タやけこやけ保育園;午前8 時 30 分の開始に間に合うように現地集合(着替える時間を考慮する)。
小台橋保育園、至誠会第二保育園;午前8 時 10 分までに学校集合(その後保育園へ)。遅刻・
欠席の場合は、自分で7:45～8:10 までに学校に連絡する(園への直接の連絡は絶対にしない)。

2. 解散方法

タやけこやけ保育園;現地解散
小台橋保育園、至誠会第二保育園;現地終了後帰校

3. 記録の取り扱いについて

- 1) 事前課題提出をするものは、保育園ごとにまとめて学校からの紙ファイルに綴り保育園に提出して、確認・助言を受ける。(実習中、返却を受ける)
- 2) 全保育園実習終了後、実習後課題の用紙を記入し、一連の学習記録を紙ファイルに綴じて教員に提出する。

4. 事故の対応について

- 1) 実習中のヒヤリハットおよび事故等については、速やかに学校(実習担当の教員もしくは、実習調整担当教員)へ連絡相談すること。
例えば、子どもの喧嘩・事故場面や健康状態が問題視される場合、及び判断に困る事柄があった場合には、自分たちで判断せず、見過ごしたり自分だけで解決をしようしないこと。 学校の電話番号;代表 03-3857-0120
- 2) 保育園の各入り口の施錠管理を徹底する。

5. 災害時の対応について

- 1) 災害等時は、原則的に園の(園長先生及び主任先生)の指示に従い行動する。
また、園(園長先生及び主任先生)から、学校へ連絡をするように指示を受けた場合には、園(園長先生および主任先生)から、速やかに学校に連絡していただく。
※学校に戻る指示が出た場合、学校または広域避難場所へ避難する。

6. 身支度・持ち物

- 1) 実習をする服装は子どもは常に活発に動き回り、また外遊びや食事の援助で汚れたりすることが考えられるため、清潔かつ洗濯をしやすい服装を着用する。
子どもと一緒に遊んでいると、かがんだり、立ったり座ったりすることも多いため、胸が大きく開いた服や座るとおなかや腰が見えるような服装はさける。
また、ビーズなどの装飾品は、子どもを抱っこしたりするときに、傷つけたり子どもが口に入れる危険性もあるため、装飾品のついていないシンプルな服装にする。
※病棟実習で着用するもの(実習服・エプロン・シューズ)は使用禁止。
※タやけこやけ保育園の場合は、通園時は学生らしい服装を着用のこと。(園内で更衣をする)
- 2) 下足は、運動しやすい靴を2 足準備する。(園内で履く靴と園外で履く靴が必要)
- 3) クラス内ではIDカードは使用しない。
子どもに名前がわかり、また安全であるように、布名札を丁寧に胸に縫いつける。

◎名札はフェルト布(ひらがなでフルネーム)を縫い付ける

※キャラクターを縫い付けても可。ただし立体的ですぐにこわれてしまったり、ボタンなど
子どもが口にいれてしまう危険性のあるものはさける

◎合わせて学生マークを縫い付ける。白地の布(〔例〕横5 cm × 縦8~9 cm)に黒で文字の記入を
する。

- 4) 食事用のエプロンおよび毛髪を覆う三角巾を準備する。
7. 行事や園外保育で指導保育士とともに外出する場合以外に、昼食時間を含めて実習時間内は園外に 外
出をしないこと。
8. 毎日の記録について
実習記録は原則持ち帰ることは出来ない。(個人情報のため)
夕やけこやけ保育園で実習を行う人は記録の袋へ入れて保育園へ置いてくること。2日目は記録の袋
を入れて学校へ持ち帰り、保管をすること。
実習の朝、担当するクラスの方にファイルの記録を見てもらいながら、本日の目標および行動計画を 発
表する。
休憩時間を活用して夕方までに本日の実習記録内容を記載する。
夕方の実習終了報告後、担当するクラスの保育士の方に提出して助言及びサインを頂き返却を受ける。
9. 小児看護学実習すべてにおいて、小児は免疫力が成人に比べて弱く感染症の疾患に罹患しやすいこと か
ら、自己の健康管理に留意する。

小児病棟・小児科外来実習

I. 目的

健康障害をもつ子どもと家族に関わり、子どもの健康障害が子どもや家族へ及ぼす影響をふまえた看護を学ぶ

II. 目標

1. 健康障害や入院生活が、子どもの成長・発達や日常生活及び家族に影響を及ぼすことがわかる
2. 受け持ち患児およびその家族とコミュニケーションをとおして関わりをもつことができる
3. 受け持ち患児の安全および感染予防対策を考えることができる
4. 受け持ち患児および家族への看護を振り返ることができる
5. 小児科外来における看護師の役割を学び、実際について体験をすることができる

III. 行動目標

1. 健康障害や入院生活が、子どもの成長・発達や日常生活及び家族に影響を及ぼすことがわかる
 - 1) 受け持ち患児の成長・発達について学習できる
 - 2) 受け持ち患児の入院前の生活状況について情報を得ることができる
 - 3) 受け持ち患児の入院してからの生活リズムについて情報を得て援助に反映できる
 - 4) 受け持ち患児や家族が入院による影響や健康障害による影響を受けていることがわかる
 - 5) 受け持ち患児の健康障害の段階・病態生理、症状、臨床所見、治療内容、なりゆきを踏まえ関連図を描くことができる
 - 6) 受け持ち患児と家族の看護上の問題を、優先度を踏まえて抽出することができる
 - 7) 受け持ち患児の今の問題点から必要な援助の方向性を考え、実施することができる
2. 受け持ち患児およびその家族とコミュニケーションをとおして関わりをもつことができる
 - 1) 受け持ち患児に関心を持ち、発達段階に応じたコミュニケーション手段を用いながら、患児と関わることができる
 - 2) 発達段階に応じた学習および遊びの援助ができる
3. 受け持ち患児の安全および感染予防対策を考えることができる
 - 1) 受け持ち患児の発達段階を考えながら、安全な環境を考え、事故防止についての援助が実施できる
 - 2) 受け持ち患児の発達段階を考えながら、感染予防対策を考慮した援助が実施できる
4. 受け持ち患児および家族への看護を振り返ることができる
 - 1) 自分の実施した看護援助について振り返り、援助の意味を考えることができる
5. 小児科外来における看護師の役割を学び、実際について体験をすることができる
 - 1) 小児の検査・処置の場面を見学して看護師に必要な役割、および子どもの思いがわかる
 - 2) 外来の場での安全への配慮や感染予防について学習し、実践できる
 - 3) 看護師が受診時の限られた時間内で子どもの状態と家族の様子を把握して必要な判断をしていること、受診時に自宅または入院への継続的な看護について学ぶことができる

IV. 実習目標・学習内容

目標	行動目標	学習内容	方法・留意点
1. 健康障害や入院生活が、子どもの成長・発達や日常生活及び家族に影響を及ぼすことがわかる	1) 受け持ち患児の成長・発達について学習できる 2) 受け持ち患児の入院前の生活状況について情報を得ることができる 3) 受け持ち患児の入院してからの生活リズムについて情報を得て援助に反映できる 4) 受け持ち患児や家族が入院による影響や健康障害による影響を受けていることがわかる 5) 受け持ち患児の健康障害の段階・病態生理、症状、臨床所見、治療内容、なりゆきについて学習をすることができる 受け持ち患児に必要な状態を学習して観察をすることができる 受け持ち患児の今の問題点から必要な援助の方向性を考え、実施または一部実施をすることができる	既習の学習をまとめる (2) (3) (4) 受け持ち患児や家族から情報を得る (5) 受け持ち患児の病態生理を学習して症状、検査データ、薬などから看護を考える (6) (7) 受け持ち患児を観察しながら、今の看護問題を捉えることができる	授業で学んだ学習をまとめる
2. 受け持ち患児およびその家族とコミュニケーションをとおり関わりをもつことができる	1) 受け持ち患児に関心を持ち、発達段階に応じたコミュニケーション手段を用いながら、患児と関わりをすることができる 2) 発達段階に応じた学習および遊びの援助ができる	(1) 受け持ち患児と家族の反応を見ながらコミュニケーションを考えることができる (2) 症状、安静度を考え学習、遊びの援助を考える	子どもと家族に対してコミュニケーションを図る
3. 受け持ち患児の安全および感染予防対策を考えることができる	1) 受け持ち患児の発達段階を考えながら、安全な環境を考え、事故防止についての援助が実施および一部実施をすることができる 2) 受け持ち患児の発達段階を考えながら感染予防を考慮した援助が実施および一部を実施することができる	(1) 患児の発達段階、特徴を捉えて安全に看護援助を考える (2) 実施した援助の振り返りを行い次の援助につなげることができる	発達段階に応じた安全の学習を行う
4. 受け持ち患児および家族への看護を振り返ることができる	1) 自分の実施した看護援助について振り返り、援助の意味を考えることができる	(1) 日々の援助を評価して看護の振り返りができる	学内学習の時間も活用する
5. 小児科外来における看護師の役割を学び、実際について体験をすることができる	1) 小児の検査・処置の場面を見学して看護師に必要な役割、および子どもの思いがわかる 2) 安全への配慮や感染への対処をどのようにしてあるかということ学習して実施および一部実施をすることができる 3) 看護師が受診時の限られた時間内で子どもの状態と家族の様子を把握して必要な判断をしていること、受診時に自宅または入	(1) 受け持ち患児を観察しながら子どもの反応を捉え、患児の思いを考えることができる (2) 感染予防、対策について考えることができる (3) 継続看護における	小児科外来

	院への継続的な看護について学ぶことができる	看護師の役割を考える	
--	-----------------------	------------	--

V. 実習方法

1. 実習の進め方

※原則1週間で1名の受け持ち患児とするが、退院した場合には、他の小児の日常生活の援助を見学および一部実施する

	1日目(月)	2日目(火)	3日目(水)	4日目(木)	5日目(金)
午前 ／ 午後	(臨地) ・病棟オリエンテーション ・患者紹介 ・情報収集	(臨地) ・指導者と共に看護援助の見学または一部実施、実施 ・記録のまとめ	(臨地) ・中間カンファレンス 関連図 看護問題抽出 看護目標の立案	(臨地) ・看護目標に沿った実施・評価 ・記録のまとめ	(臨地) ・最終カンファレンス ・記録のまとめ

2. 実習中のカンファレンス

実習3日目に中間カンファレンス、実習5日目に最終カンファレンスを行う

VI. 実習記録

1. 小児病棟実習

小児看護学実習の様式1、その他は基礎看護学実習Ⅱに準ずる

2. 小児科外来実習

- 1) 小児科外来実習表紙
- 2) 基礎看護学実習Ⅱ 様式6

VII. 実習記録の提出

1. 小児病棟実習

指定された日時に提出する

2. 小児科外来実習

学校指定の外来実習ファイルに実習メンバー分をまとめ、実習日の翌日に小児科外来へ提出する

VIII. 評価

別紙参照

様式 1 : データベース

学生氏名

	年齢	保険の種類	診断名:					
家族構成	キーパーソン		主訴:					
			既往歴					
			症状・検査データ	受け持つまでの状態				
気質・情動状態: 性格 (情報源)		治療方針・治療内容						
身体的能力・機能状態	身体的能力							
	身長: cm 体重: Kg カウプ指数:							
	アレルギー: 無・有							
	身体機能状態							
	聴覚障害: 有・無		視覚障害: 有・無					
	平衡感覚障害: 有・無		触覚障害: 有・無					
疾病の説明	その他の感覚障害: 有・無		運動能力の低下・喪失: 有・無					
	疾病の説明・理解力 (母親)							
疾病の説明・理解力 (本人)								
生育歴								
生活習慣・自立度	食事	睡眠	更衣	排泄	清潔	予防接種 三種混合 BCG ポリオ 麻疹風疹混合 日本脳炎 Hib 肺炎球菌 水痘 おたふく ロタ		
	入院前の平均的な1日の過ごし方 0 2 4 6 8 10 12 14 16 18 20 22 24時 							

保 育 園 実 習 記 録

実習期間; 年
月 日() ~ 月 日()

実習施設名；()保育園

実習クラス名；
(歳クラス ； 歳クラス)

学籍番号 () 学生氏名 ()

保育園実習記録

実習期間； 年 月 日（ ） ～ 月 日（ ）
実習クラス； 歳児・ クラス
学籍番号（ ）氏名（ ）

I 保育園実習に向けて

保育園実習で学びたいこと(自分の言葉で)

II 保育園実習を終えて

保育園実習で学んだこと

指導者サイン（ ）

教員サイン（ ）

小―保―1

本日の実習記録

No..

実習日： 月 日（ ）（実習 日目）学籍番号： 氏名：

本日の行動目標（今日1日自分が何を学びたいか）

本日の実施をしたこと／子どもの様子・自分の関わり・先生の関わりから学んだこと

担当保育士の助言について

サイン（ ）

小—保—2

小児科外来 実習記録

実習日； 年 月 日（ ）

東京女子医科大学看護専門学校

グループ

学籍番号：

学生氏名：

令和 年度 小児看護学実習 評価表

学籍番号:		病棟実習期間： 令和 年 月 日 () ~ 月 日 ()				
氏 名：		実習施設： 保育園		実習病棟： 7階東病棟		
評価項目	評 価 内 容	学生 自己評価	教員評価			
			A	B	C	D
A:よくできた B:だいたいできた C:努力を要する D:かなりの努力を要する		学生自己評価は点数で記入する				
小児病棟実習	1) 受け持ち患児と家族の状況について、成長発達、生活リズム、健康状態の視点から看護に必要な情報を収集し、アセスメントできる		4	3	2	1
	2) 受け持ち患児の入院してからの生活リズムについて情報を得て援助に反映できる		4	3	2	1
	3) 受け持ち患児や家族が入院による影響や健康障害による影響を受けていることがわかる		4	3	2	1
	4) 受け持ち患児の健康障害の段階・病態生理、症状、臨床所見、治療内容、なりゆきを踏まえ関連図を描くことができる		4	3	2	1
	5) 受け持ち患児と家族の看護上の問題を優先度をふまえて抽出することができる		4	3	2	1
	6) 受け持ち患児と家族に合わせた目標、具体策を立案できる		4	3	2	1
	7) 具体策に基づき、安全性、安楽性、目的性を考え実施できる		4	3	2	1
	8) 受け持ち患児に関心をもち、発達段階に応じたコミュニケーション手段を用いながら、患児及び家族と関わりあうことができる		4	3	2	1
	9) 発達段階に応じた学習および遊びの援助ができる		4	3	2	1
	10) 受け持ち患児の発達段階を考えながら、安全な環境を考え事故防止についての援助が実施できる		4	3	2	1
	11) 受け持ち患児の発達段階を考えながら、感染予防を考慮した援助が実施できる		4	3	2	1
	12) 自分の実施した看護援助について振り返り、援助の意味を考えることができる		4	3	2	1
	13) 受け持ち患児と家族を取り巻く医療福祉教育の連携について考えることができる		4	3	2	1
小児科外来実習	1) 小児の検査・処置の場面を見学して看護師に必要な役割、および子どもの思いがわかる		4	3	2	1
	2) 外来の場での安全への配慮や感染対策について学習し、実践できる		4	3	2	1
	3) 看護師が受診時の限られた時間内で子どもの状態と家族の様子を把握して必要な判断をしていること、受診後に自宅または入院への継続的な看護について学ぶことができる		4	3	2	1
保育園実習	1) 小児の各期の発達における特徴を学習した上で実習に臨み、観察したことを考察できる		4	3	2	1
	2) 子どもとコミュニケーションを図りながら、養護や日常生活の自立について指導者とともに積極的に体験をすることができる		4	3	2	1
	3) 乳幼児の安全な環境について知識を活用しながら、実際に体験することができる		4	3	2	1
	4) カンファレンスにおいて、発表や討議に主体的・協働的に参加できる		4	3	2	1
実習態度	1) 主体的、積極的に行動できる		4	3	2	1
	2) チームの一員として役割を認識し、責任ある行動がとれる		4	3	2	1
	3) 自己の課題を明確にすることができる		4	3	2	1
	4) 自己の健康管理ができる		4	3	2	1
	5) 記録物の取り扱い、提出期限を守ることができる		4	3	2	1
学生コメント 自己評価を()点にした理由		最終評価： A B C D ()点 欠課：()時間 担当教員： 印 学生サイン				

母性看護学実習

I. 目的

妊娠・分娩・産褥・新生児各期の特徴を理解し、対象に応じた看護を学ぶ。

女性特有の母性に注目し、妊娠・分娩・産褥・新生児各期の特徴を理解し、対象に応じた看護を学んでいく。正常に経過し、母児が心身共に健康な状態で生活していくためには、どのような看護支援が必要なのか、母児相方を捉え、対象を身体的、生理的、心理的、社会的に理解し、セルフケア向上に向けて、必要なウェルネス思考の看護を学んでいく。社会情勢により妊婦の高齢化、ハイリスク妊娠・分娩が増える中、心身共に正常に経過していく事がいかに重要で大切な事かを認識していく。自分自身も母性であることを踏まえて、リプロダクティブヘルス、ウイメンズヘルスの視点から、本実習にて母性観が養われていく事を目的とする。

II. 目標

1. 妊婦・産婦・褥婦・新生児の特徴がわかる
2. 対象に必要な援助がわかる
3. 母性観を養うことができる

III. 行動目標

1. 病棟実習

- 1) 対象の妊娠経過がわかる
- 2) 対象の分娩経過がわかる
- 3) 産褥期にある対象に必要な援助が考えられる
 - (1) 対象の全体像がわかる
 - (2) 対象の日常生活援助が整えられる
 - (3) 退行性変化を促す援助が考えられる
 - (4) 進行性変化を促す援助が考えられる
 - (5) 母親(父親)役割を促す援助が考えられる
- 4) 新生児期にある対象に必要な援助が考えられる
 - (1) 対象の全体像がわかる
 - (2) 対象の日常生活援助が整えられる

2. 分娩室実習

- 1) 分娩期にある対象の特徴がわかる
- 2) 分娩期にある対象に必要な援助が考えられ、一部実施できる
- 3) 分娩室看護の特徴及び看護スタッフの役割がわかる
- 4) 帝王切開術によって出産する母児の特徴がわかる
- 5) 帝王切開術における看護師の役割がわかる

3. 外来実習

- 1) 妊娠期にある対象の特徴がわかる
- 2) 外来看護の特徴および看護スタッフの役割がわかる

4. MFICU 実習

- 1) ハイリスク妊婦の特徴を考える
- 2) ハイリスク妊婦への看護のあり方考える

5. NICU 実習

- 1) NICU に入院中の児の特徴がわかる
- 2) NICU に入院中の母児関係が考えられる
- 3) NICU における看護の特徴及び看護スタッフの役割を考えられる

IV. 実習目標・学習内容

実習目標	行動目標	学習内容	方法・留意点
1. 妊婦・産婦・褥婦・新生児の特徴がわかる 2. 対象に必要な援助がわかる	産科外来実習 1) 妊娠期にある対象の特徴がわかる 2) 外来看護の特徴及び看護スタッフの役割がわかる 分娩実習 1) 分娩期にある対象の特徴がわかる。 2) 分娩期にある対象に必要な援助が考えられる。 3) 分娩室看護の特徴及び看護スタッフの役割がわかる。	産科外来実習 - 妊娠中期 - 後期の妊婦に付き添い、妊婦健診の流れを知る。 - 妊婦とのコミュニケーションを通じて、妊娠期における対象の特徴を知る。 - 外来における看護師と妊婦の関わりを見学し、外来看護の特徴及び看護師の役割を知る。 分娩室実習 ・分娩第Ⅰ期Ⅱ期Ⅲ期Ⅳ期、各期の経過を理解し、母児の安全安楽を第一に、自分達が行える看護を、臨床指導者の指導の下で実施する。	・事前学習を行う。 ・産科外来実習の目的を明確にし、指定用紙に記入、実習初日に教員に提出し、指導を受ける。 ・火曜日 8 時半より、全員で外来オリエンテーションを受ける。 - 実習は13 時より開始。調整のもとに妊婦健診に同伴する。 - ドップラー聴診、子宮底測定・レオポルド触診等、実施出来る場面では、対象の了解のもと指導者と共に実施する。 - NST 検査時には、指導者の調整のもと、対象の了解を得て、コミュニケーションを図り、妊娠期における対象の特徴を知る。 ・妊婦超音波検査時には、指導者の調整のもと、対象の了解を得て見学する。 ・実習終了後は指定の用紙に学び、振り返りを記載し、金曜日にグループでまとめて外来指導者に提出する。 ・事前学習を行う。 - 分娩室実習の目的を明確に指定用紙に記入、実習初日に教員に提出し指導を受ける。 ◎対象の妊娠・分娩経過をカルテ、看護記録より情報収集する。 ◎臨床指導者ととともに、産婦の補助動作、呼吸法、マッサージに関わる。 ◎看護師の動き、産婦への声かけ、医療スタッフ間の連携を見学する。 ・出生直後の新生児ケア、アルゴリズムを見学する。 ・カンガルーケア、初回面会を見学する。 ・娩出後の胎児付属物の観察を行う。 ・分娩時の状況、情報、関わった内容、学び、感想は、指定用紙に記載、グループでまとめて

	MFICU 実習 1)ハイリスク妊婦の特徴を考える 2)ハイリスク妊婦への看護のあり方を考える	MFICU 実習 - 入院妊婦のNST 装着の場面を見学し、妊婦の背景を捉え、看護のあり方を考える	金曜日、臨床指導者に提出する。 ・実習で学んだことは、カンファレンスにて共有する。 - 事前学習をする - 臨床指導者の調整のもと、カテから情報収集を行う - 臨床指導者、看護師の関わりを見学する - コミュニケーションが取れそうな対象には、調整 - 指導のもと対象の思いを聴いていく - NST の基礎を学ぶ
	帝王切開術実習 1)帝王切開によって出産する母児の特徴がわかる。 2)帝王切開術における産科看護師の役割がわかる。	帝王切開術実習 ・娩出方法の一つとして帝王切開術を捉え、経膣分娩との違いを学習しながら、命の誕生という状況では共通であることを認識し、baby 受けの看護師の一連の看護援助を見学する。	・事前学習を行う。 ・新生児受けの看護師と共に手術室に入室。娩出、出生直後の新生児ケア、初回面会、アルゴリズムの実際を見学する。 ・娩出後の胎児付属物の観察を行う。 ・分娩時の状況、情報、関わった内容、学び、感想は、指定用紙に記載、グループでまとめて金曜日、臨床指導者に提出する。 ・実習で学んだことは、カンファレンスにて共有する。
	病棟実習 ・産褥期にある対象に必要な援助が考えられる 1)対象の全体像がわかる。 - 対象の妊娠経過、分娩経過がわかり、現在の状況を退院後をふまえて考える。 2)対象の日常生活援助が整えられる。 3)進行性変化を促す援助が考えられる。 4)退行性変化を促す援助が考えられる。 5)母親(父親)役割を促す援助が考えられる。	病棟実習 ・産褥期にある母児を1組受け持ち、対象に必要な援助を考える。	- 事前学習を行う。 - 産褥期にある母児1組を学生2名1組になり受け持つ ・臨床指導者の調整のもと、対象の了解を得て、看護に関わる。 ◎対象の妊娠経過、分娩経過をふまえた現在の状況を情報収集する。 - 退行性変化はどうか - 進行性変化はどうか - 母親役割の習得はどうか - 母児相互作用はどうか - 母児愛着形成はどうか ◎対象のみではなく、新生児の現在の状況も同時に情報収集する。 ◎既習のアセスメントガイドを参照に身体的 - 生理的 - 心理的 - 社会的側面より母児のアセスメントを行う。 ④アセスメントをもとに、対象

	新生児実習 新生児期にある対象に必要な援助が考えられる 1)対象の全体像がわかる 2)対象の日常生活援助が整えられる	新生児実習 - 産褥期にある母児を1組受け持ち、対象に必要な援助を考える。 - 対象の胎内、出生状況がわかり、現在の状況を退院後の状況を踏まえて捉え、必要な援助が考えられる。	への看護計画を考え、調整。臨床指導者(時に教員)と共に看護を実施する。 ⑤実施した看護は評価修正を行い、一連の看護過程を展開する。 - 看護を展開していく際には、母児の安全を第一に、調整・指導の下で行う。 - 褥婦のセルフケアが向上出来る様に、退院に向けて、ウェルネス思考で看護展開をしていく。 ・事前学習を行う。 - 産褥期にある母児1組を学生2名1組になり受け持つ。 - 褥婦の了解を得、新生児の看護に関わる。 ◎対象の胎内、出生状況をふまえた現在の状況を情報収集する。 ◎新生児のみではなく、褥婦の現在の状況も同時に情報収集する。 ◎既習のアセスメントガイドを参照に生理的変化・体外生活への適応がスムーズに出来ているか、観察項目をあげ、新生児のバイタルサイン、フィジカルアセスメントを実施する。 ④新生児に必要な日常生活援助(沐浴、授乳、オムツ交換等)を考え、調整、臨床指導者(時に教員)と共に看護を実施する。 ⑤実施した看護は評価修正を行い、一連の看護過程を展開する。 - 看護を展開していく際には、母児の安全を第一に、調整・指導の下で行う。 ・事前学習をする。 - NICU実習の目的を明確にし、指定用紙に記入、実習初日に教員に提出し指導を受ける。 - 見学実習にて(NICU → GCU)に入室している児の特徴、NICU → GCUの設備、環境、看護の特徴、)を学ぶ。
	NICU実習 1)NICUに入院中の児の特徴がわかる 2)NICUに入院中の母児関係が考えられる 3)NICUにおける看護の特徴および看	NICU実習 - NICUの特徴を理解し、入院中の児の特徴がわかる。 - 母児面会を見学し、母児関係を考え、NICUにおける看護の特徴及び看護スタッフの役割を考える。	・事前学習をする。 - NICU実習の目的を明確にし、指定用紙に記入、実習初日に教員に提出し指導を受ける。 - 見学実習にて(NICU → GCU)に入室している児の特徴、NICU → GCUの設備、環境、看護の特徴、)を学ぶ。

3 母性観を養う	護スタッフの役割を考えられる。 1)実習を通じて自分自身の出生を振り返り、思い、考えを表現する事ができる 2)自分自身も母性であることを認識し、母性観を対する理解を深めていく 3)命の素晴らしさ、愛おしさから、自己の看護観を、つなげることが出来る	・倫理観を持ち、生命の尊さを認識し、対象である人間への理解をグループで深めていく。 ・カンファレンスを通じて自分の思い、考えを言語化し、表現していく。 ・実習での学びをカンファレンスをして深め、グループをして共有していく。	・母児面会を見学し、NICU・GCUを、おける母児関係を考える。 ・ドクター・ナースカンファレンスを通じて、看護師の医療チームを、おける役割を学ぶ ・個々の感想・学びはカンファレンスをしてグループ内で共有する ・記録は所定の用紙を、記載し、グループでまとめて翌日昼、NICU 受付を、提出する。 ・カンファレンスをして、おいて、個々が思いを表現し、グループ内で母性観を、対する理解を深めていく。
----------	---	--	--

V. 実習方法

1. 実習の組み立て

実習内容	時間配分	内 訳	実習時間	備 考
オリエンテーション	6 時間	領域担当 医療安全教育	時間割を参照	
臨地実習	80 時間	8 時間×10 日間 ・病棟実習 ・学内実習 ・外来実習・MFICU 実習 ・分娩実習・NICU 実習	8 : 00～17 : 00	
実習のまとめ	4 時間	リプロダクティブヘルス、 ウイメンズヘルスをして、 国家試験対策	時間割を参照	
合 計	90 時間			

・2グループが同時をして、実習する。

A : 産科病棟グループ、B : 外来・MFICU・分娩・NICU グループ

・臨地での実習オリエンテーションは初日をして、2グループ合同をして、実施する。

・A : 産科病棟グループの金曜日は、原則学内日をして、記録整理とする。

・実習記録は金曜日17 時、時間厳守をして、提出する。

・2週目金曜日は、2グループ合同をして、病棟で最終カンファレンスを行う。

2. 標準的な実習進度

		月 日()	月 日()	月 日()	月 日()	月 日()
1 週 目	A	実習オリエンテーション 沐浴デモ 母児1組を学生2名で 受け持ち、看護過程を 展開する				学内にて 記録整理 16:00 記録提出
	B	全体オリエンテーション 分娩室実習2~3人	外来実習 2~3人 8:30 オリエンテー ション(全員) 13:00~実施	NICU実習 全員	分娩室実習2~3人	外来実習2~3人 13:00~実施
帝王切開術がある場合、新生児受け助産師と共に手術見学を行う						
		月 日()	月 日()	月 日()	月 日()	月 日()
2 週 目	A	分娩室実習 2~3人	外来実習 2~3人 8:30 オリエンテー ション(全員) 13:00~実施	NICU実習 全員	分娩室実習2~3人 最終カンファレンス	外来実習2~3人 13:00~実施
	B	沐浴デモ 母児1組を学生2名で 受け持ち、看護過程を 展開する				学内にて 記録整理 17:00 記録提出
最終カンファレンス						

A：産科病棟グループ - 水まで受け持ち母児が決まらない場合、金曜日AM まで病棟実習

B：外来・NICUグループ - 帝王切開術の有無により手術見学が入る。学生は1手術1名
分娩室、外来、MFICU、NICU 以外の実習時間は母子実習室での演習、課題を行う

2. 事前学習

- 1) 妊婦、産婦、褥婦、新生児の特徴
 - 2) 妊婦、産婦、褥婦、新生児の看護
 - 3) 母性における看護過程
- ※実習初日、担当教員に提出する

3. 実習のまとめ

リプロダクティブヘルス、ウイメンズヘルスについて考えを深める。

講義・実習で学んだことをもとに、母性領域の国家試験出題基準に合わせて、国家試験対策を行う。

VI. 実習記録

別紙参照

VII. 実習記録の提出

A：産科病棟グループ：金曜日17:00 に提出

B：外来・NICUグループ：それぞれ専用のファイルにグループメンバー全員の用紙を入れ
提出する

外来・・・金曜日、記録記載後、外来指導者に提出

NICU・・・木曜日昼、NICU 受付に提出

MFICU、分娩・・・金曜日、8:30 前後、指導者（又は師長、主任）に提出

VIII. 評価 別紙参照

＜データベース＞							
氏名 B - 歳		入院日 / (週 日)		未婚or 既婚 未婚 - 既婚		初産婦or 経産婦 初 - 経 (×)	
住所 区 - 市				不妊治療の有無 有・無 ()		母親学級受講の有無 有・無 前回済	
家族構成・同居者				職業(産後休暇・育児休業・職場復帰の予定など)			
				退院後の生活(どこに帰るのか誰が手伝ってくれるのか)			
身長 cm	体重(非妊時) kg	BMI(非妊時) %	体重増加 + kg	体重(分娩前) kg	BMI(分娩前) %		
主訴・入院理由				飲食			
				排泄			
結婚歴・妊娠歴・分娩歴				活動			
				休息・睡眠			
既往歴(今回の妊娠前)				清潔			
				環境			
合併症(今回の妊娠中)				乳房・乳頭			
				乳房 _____ 型 緊満 _____			
				乳頭 大きさ _____ 形 _____ 硬さ _____ 開口 _____ ケ			
バースレビュー				母乳に対する考え方			

[illegible]

<分娩記録> -母-

入室理由 _____

予定日 令和 年 月 日

分娩日時 令和 年 月 日 時 分

在胎週数 妊娠 週 日

<分娩経過> 陣痛開始 _____ 時 分

破水 _____ 時 分

子宮口全開 _____ 時 分

胎児娩出 _____ 時 分

胎盤娩出 _____ 時 分

<分娩所要時間と出血量>

	所要時間	出血量
分娩第1期	時間 分	g
分娩第2期	時間 分	g
分娩第3期	時間 分	g
Total	時間 分	g

<分娩様式> 自然 - 吸引 - 鉗子 - 帝王切開
適応 ()創 部 無 - 有
会陰切開・会陰裂傷 (度) ・頸管裂傷誘発・促進 無 - 有
PG経口・PG点滴・アトニン点滴
適応 ()

<後産所見> 娩出様式 _____ 式

胎盤 重量 _____ g

大きさ _____ × _____ cm

厚 _____ cm

臍帯 長さ _____ cm

付着 _____ 卷

絡 _____

羊水 混濁 _____

特記事項 _____

<分娩後の経過>

	子宮底長	出血量	収縮硬度	血圧
60分	cm	g		/
120分	cm	g		/
180分	cm	g		/

分娩第4期の出血量	分娩時出血量
g	g

<特記事項>

© 妊娠経過

© 分娩経過（出生状態を含む） * 情報はかかなくてよい

様式2ー2 母児のアセスメント

学籍番号

氏名

月 日 () 産褥 ー 生後 日目

<母>

S情報	O情報	分 析

<児>

情報	分 析

立案日	<母>	解決日	立案日	<児>	解決日
/	# 1	/	/	# 1	/
/	# 2	/	/	# 2	/
/	# 3	/	/	# 3	/
/	# 4	/	/	# 4	/
/	# 5	/	/	# 5	/
/	# 6	/	/	# 6	/
/	# 7	/	/	# 7	/
/	# 8	/	/	# 8	/
/	# 9	/	/	# 9	/
/	# 10	/	/	# 10	/

看護目標（母 ー 児 ）			
#			
／	看護計画(具体策)	追加・修正	実施・評価

様式5-1 実習日： / 指導者： 学籍番号 氏名 _____

＜ 分 娩 室 実 習 の 記 録 ＞

＜何を学びたいか＞（実習前に記載、実習初日に教員へ提出）

＜何が学べたか＞ （実習後に記載、実習週の金曜日朝に病棟指導者へ提出）

臨床指導者のサイン

様式5-2 実習日： / 指導者： 学籍番号 氏名 _____

< 外 来 実 習 の 記 録 >	
<何を学びたいか> (実習前に記載、 <u>実習初日</u> に <u>教員</u> へ提出)	
<何が学べたか> (実習後に記載、 <u>実習週の金曜日</u> に <u>記載したら</u> に <u>外来指導者</u> へ提出)	
臨床指導者のサイン	

様式5-3 実習日： / 指導者： 学籍番号 氏名

< M F I C U 実 習 の 記 録 >

<何を学びたいか> (実習前に記載、実習初日に教員へ提出)

<何が学べたか> (実習後に記載、実習翌日昼にNICU・GCU受付へ提出)

臨床指導者のサイン

様式5-4 実習日： / 指導者： 学籍番号 氏名

< N I C U - G C U 実 習 の 記 録 >

<何を学びたいか> (実習前に記載、実習初日に教員へ提出)

<何が学べたか> (実習後に記載、実習翌日昼にNICU・GCU受付へ提出)

臨床指導者のサイン

本日の目標		
計画	修正計画	実施内容
振り返り および 学び（指導者からの助言等）		

1. 母性看護学実習で学んだこと
2. 対人関係について
＜褥 婦＞
＜指導者＞
＜教 員＞
＜メンバー＞
3. 自己課題について

評価項目		評価内容	学生 評価	教員評価			
				A	B	C	D
事前学習		1. 母性看護学実習に必要な事前学習をしている		4	3	2	1
病棟実習	妊娠経過 分娩経過が 理解できる	2. 妊娠経過を理解するための情報が収集できる		4	3	2	1
		3. 分娩経過を理解するための情報が収集できる		4	3	2	1
		4. 妊娠経過をアセスメントできる		4	3	2	1
		5. 分娩経過をアセスメントできる		4	3	2	1
		6. 褥婦を理解するための情報が収集でき、産褥経過をアセスメントできる		4	3	2	1
	褥婦の看護が 実施できる	7. アセスメントに基づいた看護診断ができる		4	3	2	1
		8. 看護診断に応じた看護目標が設定できる		4	3	2	1
		9. 看護目標を達成するための具体的な看護計画が立案できる		4	3	2	1
		10. 看護計画に沿った看護が実施できる		4	3	2	1
		11. 実施した看護を振り返り、評価できる		4	3	2	1
		新生児の看護 が実施できる	12. 新生児を理解するための情報が収集でき、成育経過をアセスメントできる		4	3	2
	13. アセスメントに基づいた看護診断ができる			4	3	2	1
	14. 看護診断により看護目標が設定できる			4	3	2	1
	15. 看護目標を達成するための具体的な看護計画が立案できる			4	3	2	1
	16. 看護計画に沿った看護が実施できる			4	3	2	1
	17. 実施した看護を振り返り、評価できる			4	3	2	1
	母児関係	18. 実習を通し、母児との関係が良好である		4	3	2	1
外来実習		19. 妊婦の特徴・外来看護の特徴・看護師の役割がわかる		4	3	2	1
NICU実習		20. 児の特徴・母児関係・NICU看護の特徴・看護師の役割がわかる		4	3	2	1
実習への取り組み (共通項目)	21. 積極的に行動することができる		4	3	2	1	
	22. チームの一員として、責任をもって行動することができる		4	3	2	1	
	23. 自己の課題を明確にすることができる		4	3	2	1	
	24. 自己の健康管理をすることができる		4	3	2	1	
	25. 記録物の取り扱い、提出期限を守ることができる		4	3	2	1	
＜学生評価＞ 自己評価を()にした理由		教員評価 A・B・C・D ()点 欠席()時間 遅刻()時間 早退()時間 担当 印					
＜教員評価＞							
A・・・よくできた B・・・だいたいできた C・・・努力を要する D・・・かなりの努力を要する							

精神看護学実習

I. 目的

精神の疾病・障害をもつ対象者を全人的に捉え、あらゆる健康レベルに応じた看護を実践し臨床判断能力を養う

II. 目標

1. 対象者を身体的・精神的・社会的・スピリチュアルを全人的に捉えた理解することができる
2. 対象者の人権を尊重し看護倫理に基づいた看護を実践することができる
3. 対象者において社会的環境の自立に向けた看護を実践することができる
4. 保健医療福祉との連携・協働を通した看護の役割を理解することができる

III. 実習時間配分・実習時間

実習内容	時間配分	内 訳	実習時間	備 考
オリエンテーション	7 時間	外部施設オリエンテーション 現地オリエンテーション3 時間 * 本院・他病院で実習する学生 学内で学習3 時間 領域担当4 時間	(時 間 割 を 参 照)	
臨地実習	80 時間	8 時間 × 10 日間	8 : 00 ~ 17 : 00	昼 休 憩 を 含む
実習のまとめ	3 時間	まとめ 国家試験対策	(時 間 割 を 参 照)	
合 計	90 時間			

精神看護学実習【病棟】

I. 目的

精神の疾病・障害をもつ対象者の特徴を理解し、あらゆる健康レベルに応じた看護を実践し臨床判断能力を養う

II. 目標

1. 精神科病院・各病棟の概要と治療的環境について理解できる
2. 対象者との関わりを通して全人的に捉えたあらゆる健康レベルを理解することができる
3. 精神障害をもつ人を受け持ち、看護過程が展開できる
4. 対象者の人権を尊重し看護倫理に基づいた看護を実践することができる
5. コミュニケーション技術を用いて「治療的関わり」を築くことができる
6. 精神科医療チームとの連携の中で精神科看護師の役割について理解することができる
7. 対象者の家庭・地域での生活を知り、サポート体制を理解することができる

III. 行動目標

1. 精神科病院・各病棟の概要と治療的環境について理解できる
 - 1) 病院・各病棟の機能と構造の特徴が説明できる
 - 2) 精神保健福祉法における入院形態、処遇について説明できる
2. 対象者との関わりを通して全人的に捉えたあらゆる健康レベルを理解することができる
 - 1) 対象者の入院に至るまでの経過を生育歴や入院生活歴をとおして知ることができる
 - 2) 対象者を全人的に捉えたあらゆる健康レベルを理解することができる
 - 3) 対象者の精神の状態が日常生活(セルフケア)に与える影響を説明することができる
3. 精神障害をもつ人を受け持ち、看護過程が展開できる
 - 1) 精神障害をもつ人を理解するための観察をし、情報収集ができる
 - 2) 情報を整理し、その意味を考え分析できる
 - 3) 全体像を捉えることができる
 - 4) 看護上の問題を抽出し、看護目標を設定できる
 - 5) 対象の現状に合わせ、具体的に計画を立案できる
 - 6) 計画を実施し、評価・修正ができる
4. 対象者の人権を尊重し看護倫理に基づいた看護を実践することができる
 - 1) 対象者の一人の生活者として捉えることができる
 - 2) 対象者の安全対策について説明することができる
 - 3) 社会復帰を目指す対象者が地域社会で生活する上での困難について理解することができる
5. コミュニケーション技術を用いて、「治療的関わり」を築くことができる
 - 1) 相手との適切な距離がとれる
 - 2) 受容・共感・傾聴することができる
 - 3) 相手の表現を助けることができる
 - 4) 自分の考えや理解を相手の言動で確認することができる
 - 5) 相手を尊重した態度で、誠実に関わるることができる
 - 6) プロセスレコードを通し自己を振り返ることができる

6. 精神科医療チームとの連携の中で精神科看護師の役割について考えることができる

1) 精神科医療チームにおける看護師の役割の実際を知ることができる

7. 対象者の家庭・地域での生活を知り、サポート体制を考えることができる

1) 入院前の生活についてカルテや精神科医療チームから情報を得ることができる

2) 対象者の今後の生活について、本人・家族・精神科医療スタッフから情報を得ることができ、社会資源について考えることができる

IV. 実習目標・学習内容

目標	行動目標	学習内容	方法・留意点
1. 精神科病院・各病棟の概要と治療的環境について理解できる	1) 病院・各病棟の構造と機能の特徴が説明できる 2) 精神保健福祉法における入院形態、処遇について説明できる	・慢性期・急性期病棟 ・閉鎖病棟・開放病棟 ・実習施設についての学内オリエンテーションを受ける ・入院形態による処遇 ・行動制限に伴う管理、面会、外出、外泊、代理行為、生活必需品の購入、金銭管理 ・安全面の管理、鍵の取り扱い、所持品の保管と管理 ・隔離・拘束の看護 ・移送時の行動制限、非難誘導方法と観察・援助 ・OT やリハビリテーションへ参加及び見学をする	・既習内容を学内日に確認する ・危険安全、看護の視点の特徴を捉える ・実習グループ単位で安全面についてワークする ・受け持ち患者の処遇や患者の入院に対する思いを知る事で、関わりに繋げる ・病棟オリエンテーションの際に避難経路や学生の行動について確認しておく
2. 対象者との関わりを通して全人的に捉えたあらゆる健康レベルを理解することができる	1) 対象者の入院に至るまでの経過を生育歴や入院生活歴をとおして知ることができる 2) 対象者を全人的に捉えたあらゆる健康レベルを理解することができる 3) 対象者の精神の状態が日常生活(セルフケア)に与える影響を説明することができる	・発達段階と合わせ患者の生育歴・生活歴の情報を得る ・フロイトによる防衛機制 ・ストレングス ・ストレスコーピング ・対象者の受けている検査・治療 ・対象者の身体的・精神的・社会的・スピリチュアルな特徴を捉える ・対象者の言動や表情から現在の精神状態を観察する	・既習内容の確認を学内学習で行う ・中間カンファレンス時に受けもち患者の状況を説明し、看護の方向性を確認する ・検査・治療について復習を行う
3. 精神科医療チームとの連携の中で精神科看護師の役割について考えることができる	1) 精神科医療チームにおける看護師の役割の実際を知ることができる	・本人・家族・医療スタッフから入院前の生活や現在の状況今後の生活についてどのように考えているのかを知る ・退院後の社会的資源(外来・デイケア・グループホーム・訪問看護・障害者総合支援法など)	・精神科医療チームについて復習する ・既習内容を復習する ・DVD をとおし知識の確認をする

4. 人権を尊重し看護倫理に基づいた看護を実践することができる	1)対象者を一人の生活者として捉えることができる 2)対象者の安全対策について説明することができる 3)社会復帰を目指す対象者が地域社会で生活する上での困難について理解することができる	- 患者の権利擁護 - 意思決定の尊重 - 入院形態に関する処遇 - 病棟環境 - 私物の管理 - 通信・面会の自由と制限 - 成年後見人 - リスクマネジメント - 事故防止と安全管理 - 対象者・家族の思い - 対象者とその家族を取り巻く環境 - 地域社会で生活する上での困難な要因	- 精神疾患を持った対象者における法律 - 入院形態における特徴 - 精神保健福祉法について学習する - 誤薬・転倒・車落・誤嚥・窒息についての学習 - 隔離拘束に関する法律と環境 - リハビリ - 精神疾患を持った対象者に対する家族としての願い - 社会から捉えられた精神疾患を持った患者について考え
5. 受け持ち対象の家庭・地域での生活を知り、サポート体制を考えることができる	1)入院前の生活についてカルテや精神科医療チームから情報を得ることができる 2)受けもち患者の今後の生活について、本人・家族・精神科医療スタッフから情報を得ることができ、社会資源について考えることができる	- 精神保健指定医・看護師・リハビリ看護師・PSW/ソーシャルワーカー・栄養士・薬剤師・OT - 医療スタッフ・家族などからの情報を得る - カルテから情報を得る	- 既習学習を復習する - 学内学習日・社会的資源についてグループで考える
6. 精神障害をもつ人を受け持ち、看護過程が展開できる	1)精神障害をもつ人を理解するための観察をし、情報収集ができる 2)情報を整理し、その意味を考え分析できる 3)全体像を捉えることができる 4)看護上の問題を抽出し、看護目標を設定できる 5)対象の現状に合わせて、具体的に計画を立案できる 6)計画を実施し、評価・修正ができる	- オレム理論 - 発達段階 - フロイトによる防衛機制 - ストレングス - ストレスコーピング - クライシスモデル	- 既習学習を参考にセルフケア理論・ヘンダーソン理論などを用いて看護を展開する - 発達段階を参考に対象を全人的にとらえる
7. コミュニケーション技術を用いて、「治療的関わり」を築くことができる	1)相手との適切な距離がとれる 2)受容・共感・傾聴することができる 3)相手の表現を助けることができる 4)自分の考えや理解を	- 関係を持ち始める時期 - 関係を発展させる時期 - 関係の終結に向かう時期 - 指導者、教員の関わりを模倣し、なぜそのような関わりをしたのか考え、自己の計画に取り入れる	- プロセスレコードをとおり、患者の限度や自己の振り返りを考える - 基礎看護技術、精神看護学方

	相手の言動で確認することができる 5) 相手を尊重した態度で、誠実に関わることができる 6) プロセスレコードを通し自己を振り返ることができる	－ 受け持ち患者との関係をプロセスレコードで振り返り、自己の傾向や課題に気づき、看護に生かす － プロセスレコードの考察を生かしたコミュニケーションを考える － コミュニケーション技術意図的に使って患者-学生関係を構築する － 患者の状態別に距離感やコミュニケーション、観察方法を変え、患者に安心感を与えるられるよう関わる	法論 I で学んだ専門的なコミュニケーション技術を用いて患者-学生関係を発展させる － 指導者、教員の関わりについてその意味を考え、ロールモデルとして取り入れる － 常に患者中心の思考や援助を心がける
--	--	--	--

V. 実習方法

1. 実習の組み立て

- 1) 精神看護学オリエンテーション
実習要項に基づく
- 2) 本院西A5 階
東京足立病院
大石記念病院
- 3) 医療安全教育
- 4) 実習準備…名札等の使用方法の説明
- 5) 記録用紙の説明

2. 事前学習 <講義・医学書院の教科書参照>

- 1) 人間の発達段階の特徴
- 2) 社会の中の精神障害(精神障害と法制度(入院形態))
- 3) 精神疾患の主な病態・症状・検査・治療・薬物療法・看護(統合失調症・躁病・うつ病・認知症－アルコール依存症・パーソナリティ障害)
- 4) 社会資源(障害者総合支援法)

3. 実習のまとめ

- 1) 実習病院の特性について意見交換(対象・入院背景・治療・治療経過)の共有
- 2) 国家試験に準じた問題の取り組み

4. 実習の進め方

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
実 習 内 容	臨地実習 病棟オリエンテーション 学生－患者関係の開始	臨地実習	学内学習	臨地実習 学生－患者関係の展開	臨地実習 プロセスレコード提出
	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
実 習 内 容	臨地実習	臨地実習	学内学習	臨地実習 プロセスレコード提出 学生－患者関係の終結	臨地実習 最終カンファレンス

学内学習 1)水曜日は学内で実習する(曜日を移動する場合あり)

2)実習記録の指導を受ける

3)実習のまとめをする

4)受け持ち患者の日々の援助から、ロールプレイなどを通して患者理解を深める
(事故防止の実際(危険物の管理・他害(暴力を含む)自傷)から考える)

VI. 実習記録

プロセスレコード(様式 8) 以外は「基礎看護学実習Ⅱ」記録用紙に準ずる

VII. 評価

別紙参照

精神看護学実習【精神科外来】

I. 目的

精神科外来を利用する対象者の社会的生環境における回復や再発予防について理解し、それらの継続看護と医療チームとの協働・連携について学ぶ

II. 目標

1. 精神科外来における看護の機能と役割を理解する
2. 精神科外来を利用する対象者の社会的環境における回復や再発予防について理解する
3. 精神科外来における継続看護と医療チームとの協働・連携を理解する
4. 精神科外来で行われている検査や治療について理解する

III. 行動目標

1. 精神科外来における看護の機能と役割を理解する
 - 1) 精神科外来の構造と機能の特徴が説明できる
2. 精神科外来を利用する対象者の社会的環境における回復や再発予防について理解する
 - 1) 精神的疾患を持った対象者に応じた治療継続にむけた教育的指導について理解する
3. 精神科外来における継続看護と医療チームとの協働・連携を理解する
 - 1) 外来・在宅看護において対象者における継続と地域生活の両立ができる支援について理解する
 - 2) 対象者を含めた生活面の援助や家族支援とその治療的関係を併せ理解する
4. 精神科外来で行われている検査や治療における看護援助を理解する
 - 1) 精神科外来特有の検査・治療について理解する

IV. 実習目標・学習内容

目標	行動目標	学習内容	方法・留意点
1. 精神科外来における看護の機能と役割を理解する	1) 精神科外来の構造と機能の特徴が説明できる	・精神科外来としての機能・構造の特徴	・既習内容の確認を学内で行う
2. 精神科外来を利用する対象者の社会的環境における回復や再発予防について理解する	1) 精神的疾患を持った対象者に応じた治療継続にむけた教育的指導について理解する	・精神科外来患者の生活状況 ・教育的指導 ・治療継続への思い ・	・社会で生活する上でのストレスや再燃する可能性を知る ・継続的内服
3. 精神科外来における継続看護と医療チームとの協働・連携を理解する	1) 外来・在宅看護において対象者における治療継続と地域生活の両立ができる支援について理解する 2) 対象者を含めた生活面の援助や家族支	・多職種の役割と連携 ・看護師の役割 ・社会環境から治療的継続における困難の要因 ・本人・家族の思い ・医療チームとの関係	・多職種との連携について学修する ・対象者・家族を含めた支援とは何か学修する

4. 精神科外来で行われている検査や治療について理解する	援とその治療的関係を併せ理解する 1)精神科外来特有の検査・治療における看護援助を理解する	・外来検査・治療	・精神科特有の検査で何を観察するのか学修する
------------------------------	--	----------	------------------------

V. 事前学習

1. 精神科外来位置づけ
2. 機能と役割
3. 継続看護と教育的指導
4. 外来で行われる検査

VI. 実習内容

1. 学内オリエンテーション
2. 臨地オリエンテーション
3. 受け持ち制はとらない
4. スタッフに同行し看護師の業務を見学

VII. 評価

1. 実習目標に沿ったレポート (当校で決められたレポート1枚以上2枚以内とする)

精神看護学実習【精神科デイケア】

I. 目的

精神科デイケアを利用する対象者の社会的生活機能と回復や再発予防について理解し、それらの看護の役割を学ぶ

II. 目標

1. 精神科デイケアの機能と役割を理解する
2. 精神科デイケアを利用する対象者の社会的機能と回復や再発予防について理解する
3. 精神科デイケアにおける看護の役割を理解する

III. 行動目標

1. 精神科デイケアの機能と役割を理解する
 - 1) 精神科デイケア構造と機能の特徴が説明できる
 - 2) 障害者総合支援法による障害者サービスについて説明できる
2. 精神科デイケアを利用する対象者の社会的機能と回復や再発予防について理解する
 - 1) 今後の社会生活をする上で、本人・家族を取り巻く環境から社会資源について理解する
3. 精神科デイケアにおける看護の役割を理解する
 - 1) 多職種と連携し看護師の役割の実際を述べる事ができる

IV. 実習目標・学習内容

目標	行動目標	学習内容	方法・留意点
1. 精神科デイケアの機能と役割を理解する	1) 精神科デイケア構造と機能の特徴が説明できる 2) 障害者総合支援法による障害者サービスについて説明できる	- 医療施設としての機能と構造の特徴 - 精神科デイケア利用者の生活状況 - 精神科デイケア利用者の心理的 - 利用者の思い - 障害者サービス	- 既習内容の礎を学内で行う - 障害者総合支援法における利用できる法的内容を捉え障害者福祉サービスの知識を得る
2. 精神科デイケアを利用する対象者の社会的機能と回復や再発予防について理解する	1) 今後、社会生活する上で本人・家族を取り巻く環境から社会資源について理解する	- 社会環境から生活における困難の要因 - 本人・家族の思い - 社会資源の活用	- 社会で生活する上でのストレスや再燃する可能性を知る - 継続的内服
3. 精神科デイケアにおける看護の役割を理解する	1) 多職種と連携し看護師の役割を述べる事ができる	- 多職種の役割と連携 - 看護師の役割	- 多職種と連携対象者への関わりを知る

V. 事前学習

1. 精神科デイケアの位置づけ
2. 機能と役割
3. 多職種との連携・協同
4. 障害者福祉サービス

VI. 実習内容

1. 学内オリエンテーション
2. 臨地オリエンテーション
3. 受け持ち制はとらない
4. スタッフに同行し看護師の業務を見学・一部介助の実施

VII. 評価

1. 実習目標に沿ったレポート（当校で決められたレポート1枚以上2枚以内とする）
2. 精神看護学実習評価表(参照)

令和 年度 精神看護学実習評価表

学籍番号: 氏名:	実習期間: 令和 年 月 日() ~ 月 日() 実習施設: 実習病棟:					
評価項目	評価内容	学生	A	B	C	D
1. 精神科病院・各病棟の概要と治療的環境について理解できる	1) 病院・各病棟の構造と機能の特徴を理解し説明できる		4	3	2	1
	2) 精神保健福祉法における入院形態、処遇について説明できる		4	3	2	1
2. 対象者との関わりを通して全人的に捉えたあらゆる健康レベルを理解することができる	1) 対象者の入院に至るまでの経過を生育歴や入院生活歴をとおして説明することができる		4	3	2	1
	2) 対象者を全人的に捉えたあらゆる健康レベルを理解することができる		4	3	2	1
	3) 対象者の精神の状態が日常生活(セルフケア)に与える影響を説明することができる		4	3	2	1
3. 精神科医療チームとの連携の中で精神科看護師の役割について考えることができる	1) 精神科医療チームにおける看護師の役割の実際を知ることができる		4	3	2	1
	2) 社会復帰を目指す対象者が地域社会で生活する上で困難について理解することができる		4	3	2	1
4. 人権を尊重し看護倫理に基づいた看護を実践することができる	1) 対象者を一人の生活者として捉えることができる		4	3	2	1
	2) 対象者との関わりを通し自己洞察することができる		4	3	2	1
4. 受け持ち対象の家庭・地域での生活を知り、サポート体制を考えることができる	1) 入院前の生活についてカルテや精神科医療チームから情報を得ることができる		4	3	2	1
	2) 受け持ち患者の今後の生活について、本人・家族・精神科医療スタッフから情報を得ることができ、社会資源について考えることができる		4	3	2	1
5. 精神障害をもつ人を受け持ち、看護過程が展開できる	1) 対象者の病状の変化を捉えたアセスメントすることができる		4	3	2	1
	2) 日々の症状変化の要因が日常生活に与える影響を述べることができる		4	3	2	1
	3) 看護上の問題を抽出し、状況に応じた計画の立案できる		4	3	2	1
	4) 計画を実施し、評価・修正ができる		4	3	2	1
6. コミュニケーション技術を用いて、「治療的関わり」を築くことができる	1) 相手との適切な距離がとれ受容・共感・傾聴的行動がとれる		4	3	2	1
	2) 対象者との関わりを通して人間関係の重要性を理解できる		4	3	2	1
	3) 自分の考えや理解を相手の言動で確認することができる		4	3	2	1
	4) 相手を尊重した態度で、誠実に関わることができる		4	3	2	1
	5) プロセスレコードを通し自己を振り返ることができる		4	3	2	1
実習の取り組み(共通項目)	1) 積極的に行動することができる		4	3	2	1
	2) チームの一員として責任ある行動をとることができる		4	3	2	1
	3) 自己の課題を明確にすることができる		4	3	2	1
	4) 自己の健康管理ができる		4	3	2	1
	5) 記録物を適切に保管し、提出期限を守ることができる		4	3	2	1
学生()にした理由	評価: A・B・C・D() 点 欠席: () 時間 (遅刻: () 時間 (早退: () 時間 担当教員					
教員()にした理由						

A:よくできた B:だいたいできた C:努力を要する D:かなりの努力を要する

プロセスレコード

学生番号;

学生氏名:

プロセスレコードを起こした目的:	場面(年 月 日)
------------------	---------------------------

患者の非言語的行動	患者の言語的行動	学生の思考	学生の非言語的行動	学生の言語的行動	アセスメント
まとめ					

在宅看護論実習

I. 目的

地域における在宅ケアシステムの実際を知り、在宅で療養生活を送る対象とその家族に看護が実践できる基礎的能力を養う。

II. 目標

- 療養者と家族のニーズを総合的にとらえることができる。
- 療養者と家族の生活状況に応じた援助を見学または一部実施できる。
- 在宅での社会資源の活用方法の実際と多職種連携・協働の必要性が理解できる。
- 看護実践を通し、訪問看護師の基本的態度と看護観を養う。

III. 行動目標

- 療養者と家族のニーズを総合的にとらえることができる。
 - 療養者および家族の身体的・社会的・精神的特徴をとらえることができる。
 - 療養者と家族の生活環境、生活状況、介護状況、家族が抱える問題を確認できる。
 - 療養者と家族の生活全般の解決すべき課題(ニーズ)が把握できる。
- 療養者と家族の生活状況に応じた援助を見学または一部実施できる。
 - 療養者や家族の主体性、自己決定を尊重した目標設定と看護計画が立案できる。
 - 安全安楽に考慮し、看護援助を実施・評価できる。
- 在宅での社会資源の活用方法の実際と多職種連携・協働の必要性が理解できる。
 - 患者サポートセンターの実際を知る。
 - 地域包括支援センターの機能と役割を知る。
 - 訪問ステーションの役割と多職種連携・協働について知る。
- 訪問看護師としての基本的態度を学び、看護を学ぶものとして責任ある行動がとれる。
 - 訪問時のマナーを理解し、実践できる。
 - 個人情報の保護を遵守した行動がとれる。
 - 看護の実践者として心身の健康を管理し、必要な確認・相談・連絡・報告ができる。
 - 学生として誠意を持って自己を振り返り、自己課題を明確にできる。

IV. 学習内容・学習方法

目標	行動目標	学習内容	方法・留意点
1. 療養者と家族のニーズを総合的にとらえることができる。	1) 療養者および家族の身体的・社会的・精神的特徴を理解できる。	(1) 身体的特徴 傷病名、健康管理状況(受診状況、自宅での医療処置、健康管理方法) 既往歴、現在の健康状況、機能障害の有無(ADL — IADL)、日常生活自立度、介護認定区分、医師の指示事項(留意事項) 訪問看護開始までの経過、介護支援専門員の居宅サービス計画(介護保険利用者のみ)等 (2) 社会的特徴 生活歴、家庭内での役割、経済状況(収入・サービスの自己負担・公費) 家族構成(同居家族の有無・各家族の役割)等	- 1 事例の療養者を受け持ち看護過程を展開する。 - 看護師に同行訪問し、訪問看護を見学・実践する。 (訪問先・日時については各ステーション及び教員の指示を受ける) - 初回訪問の前(実習1日に、訪問看護指示書、訪問看護計画書、訪問看護記録、居宅サービス計画書等により情報収集を行う。

	2) 療養者と家族の生活環境、生活状況、介護状況、家族が抱える問題を確認できる。 3) 療養者と家族の生活全般の解決すべき課題(ニーズ)が把握できる。	(3) 精神的特徴の理解 疾患 - 機能障害 - 自立度 - 受けている医療 - 処置に対する思い、訪問看護に対する思い、療養生活への思い等 (1) 生活状況(日常生活の状態・過ごし方) (2) 在宅療養者の生活環境の理解(自宅の構造(自宅の間取り、居室の構造、自宅改修の有無)、自宅周囲の環境) (3) 主な介護者(本人との続柄、人間関係)、介護内容 (4) 介護者の状況(介護者の理解力・判断力・介護知識・介護技術、健康状態・意欲) (5) 他の協力者の有無 (6) 介護者の介護に対する思い、今後の希望 (7) 訪問看護の依頼内容・看護目的・看護内容 (1) 身体側面のアセスメント (2) 家族全体のニーズのアセスメント (3) 住環境のアセスメント (4) 社会資源のアセスメント (5) 介護力のアセスメント (6) 経済力のアセスメント	- フィジカルアセスメントの技術を用い観察する。 - 同行する指導者より直接説明を受ける。 - 得た情報は様式1を用い整理する。 - 実習オリエンテーションで、保健師より、地域の健康特性、健康施策、高齢者健康施策について説明を行う。 - 直接生活環境を把握する際は、プライバシーに配慮する。 - 家族関係や家族の思いは見当に時間だけでは把握は難しいため指導者より助言を得る。 - 得た情報は様式1に記載する。 ・様式2で左記(1)から(6)の観点で整理し、統合的にアセスメントを行う。 ・アセスメントの結果をもとに、看護問題を抽出し、統合アセスメントを行う。 ・指導者または教員に、自分を行った分析の指導をもらう。
2. 療養者と家族の生活状況に応じた援助を見学または一部実施できる。	1) 療養者や家族の主体性、自己決定を尊重した目標設定と看護計画が立案できる。 2) 安全安楽に考慮し、看護援助を実施 - 評価できる。	(1) 日常生活自立、健康維持・回復のための援助を考える。 (2) 住居環境・使用可能物品・介護力の情報から創意工夫した援助を考える。 (1) 生活の場にあった援助の実践 (2) 療養者と家族の主体性や自己決定を尊重した援助の実践	・様式3を用い、看護目標設定と看護計画を立案する。 - 訪問目的やこれまでの看護内容の情報から必要な援助を優先に計画する。 - 看護計画立案の際は病院と在宅での援助の違いを考える。 - 指導者より、計画した看護援助の方法が最適であるか指導をもらう。 - 実施前に、指導者より実施許可を得て、指導者と共に実施する。 - 実施前には自分が考えた看護

		(3) 看護計画の実施に対し、以下の視点で評価する。 ◎安全・安楽、◎問題解決、◎療養者と家族の生活 ― 主体性 ― 自己決定尊重の視点 (4) 受け持たせていただく療養者以外について ◎対象の基本情報 年齢・性別・病名・訪問目的看護内容 ◎訪問看護師の方の援助方法	手順に沿って技術練習を行う。 - 技術に不安がある場合、療養者からの了承が得られない場合は無理に援助を行わない。 - 様式3 で、左記の視点で観察し評価する。 - 日々の実習終了時に指導者へ1日の振り返り ― 学びを報告し助言を受ける。頂いた助言は青ペンで記載し、翌日に活かす。 - 受け持ち療養者以外に 3～4件を訪問する。具体的には訪問看護ステーションの指示を受ける。 - 見学を基本とする。 - 初回訪問の前に、訪問看護指示書、訪問看護記録、居宅サービス計画書等で情報収集を行う。 - 様式4 に受け持ち以外の方を見学内容と学びを記載し、日々の実習終了時の指導者へ報告する。報告の際に頂いた助言は青ペンで記載し、翌日に活かす。 - 援助について指導者から説明を受けるが、疑問があれば積極的に質問する。
3. 在宅での社会資源の活用方法の実際と、関連機関との連携 ― 協働の必要性が理解できる	1) 患者サポートセンターの実際を知る。 2) 地域包括支援センターの機能と役割を知る。	(1) 患者・病院組織における患者サポートセンターの役割と機能 (2) 外来患者の相談・支援の実際 (3) 入院患者の退院支援の実際 (4) 他職種との連携・協働の実際 (1) 地域包括支援センターの役割・機能 (2) 職員の構成(職種) (3) 活動の内容と実際	- 領域のオリエンテーションで、東医療センター患者サポートセンターの看護師より、機能や役割についてオリエンテーションを受ける。 - 東医療センター患者サポートセンターの見学実習で学習する。見学は事前学習を活用し、視点を明確にして学ぶ。 - 見学終了の際に、1日の学びを指導者へ報告し助言を受ける。頂いた助言は青ペンで記載し、翌日に活かす。 - 見学や助言で得た学びは様式6に記載する。 - 足立区の地域包括支援センターの見学実習で学習する。見学は事前学習を活かし、視点を明確にして学ぶ。

	3) 訪問看護ステーションの役割と多職種連携 - 協働について知る	(1) 社会資源の活用について ◎活用できる社会資源の種類と実際に活用している社会資源 - 活用方法 ◎訪問看護サービスの保険区分 - 利用方法 ◎活用している介護保険サービスの種類 - 内容 - 頻度 - 自己負担の有無 ④介護保険以外で活用している介護用品やサービス内容 (2) 訪問看護ステーションと他機関との連携の取り方 ◎他機関との連絡・相談の仕方 ◎看護サマリー ◎退院調整看護師との連携、退院前訪問 (3) 多職種との連携の取り方 ◎連絡ノート等の情報の共有方法 ◎サービス担当者会議 (4) 訪問看護における看護師の役割	- 見学終了の際に、1日の学びを指導者へ報告し助言を受ける。頂いた助言は青ペンで記載し、翌日に活かす。 - 見学や助言で得た学びは様式6に記載する。 - 在宅療養者 - 家族に直接確認とがある場合は必ず内容を指導者に確認してからとする。 - 事前学習を行い、社会資源法的根拠を学習する。 - サービス利用表や同行訪問により把握する。 - 解らないことは指導者から助言を受ける。 - 訪問看護ステーションでの学びは様式5に記載する。 - カンファレンスを通して他の学生 - 指導者の意見を聞き自分の考えを深める。
4. 看護実践を通し、訪問看護師の基本的態度と看護観を養う。	1) 訪問看護師としてのマナーを理解し実践できる。 2) 個人情報の保護を遵守した行動がとれる。 3) 看護の実践者として、心身の健康を管理し、必要な確認・相談・連絡・報告ができる。	(1) 訪問時・退室時の挨拶、言葉遣い (2) 訪問看護ステーション内での挨拶、言葉遣い (3) 身だしなみ (4) 面接技術 (5) 訪問に必要な物品 (1) 実習記録の管理 (2) 施設や学校以外での言動 (1) 自己の栄養、睡眠・休息の確保 (2) 体調不良時や突発事項発生時の対応の遵守	- オリエンテーションで訪問看護師のマナーを学習し、療養者のお宅に訪問する際に必要な物品の説明を受ける。 - 訪問時に指導看護師が療養者や家族を関わる時の様子を観察する。 - 実習施設 - 学校以外で療養者とその家族、訪問看護ステーションに関わる方々の個人情報話を話さない。 - 自己の健康管理に留意する - 欠席、遅刻、早退時の行動は学生便覧に示す行動を自ら行う。 - 自己の意思を言葉で表現することを意識する。

	4) 看護学生として誠意を持って自己を振り返り、課題を明確にすることができる。	(1) 学習目標を意識し実習に取り組む (2) 各様式の記載	・真摯な態度で課題に取り組む。 ・様式7を記載する際は、学習で得た学びに加えて自己課題も記載する。
--	---	-----------------------------------	--

V. 実習方法

1. 実習施設

1) 訪問看護ステーション

- ・東京ふれあい医療生活協同組合 ふれあい訪問看護ステーション(北区 梶原)
- ・社会医療法人 一成会 訪問看護ステーション みどり(荒川区 町屋)
- ・社会医療法人 一成会 訪問看護ステーション みどり わかば営業所(荒川区 南千住)
- ・合同会社 ウイングケア 訪問看護ステーション つばさ(荒川区 小台)
- ・有限会社ていーら スイートハート訪問看護ステーション(荒川区 日暮里)
- ・訪問看護ステーションユアアイ(荒川区 荒川)
- ・ケアプロ足立訪問看護ステーション(足立区)
- ・かもめ訪問看護ステーション(足立区)
- ・北千住訪問看護ステーション(足立区)
- ・天使の翼訪問看護(荒川区)

2) 東京女子医科大学附属足立医療センター 患者サポートセンター

3) 地域包括支援センター

- ・基幹足立区地域包括支援センター
- ・足立区地域包括支援センターあだち
- ・足立区地域包括支援センター伊興
- ・足立区地域包括支援センター扇
- ・足立区地域包括支援センター江北
- ・足立区地域包括支援センター関原
- ・足立区地域包括支援センター千住本町
- ・足立区地域包括支援センター西新井
- ・足立区地域包括支援センター六月

2. 実習の組み立て

実習内容	時間配分	内 訳	実習時間	備 考
オリエンテーション	7.5 時間	領域担当 4 時間 保健師 2 時間 患者サポートセンター1.5 時間	(時間割参照)	
臨地実習	80 時間	8 時間×10 日間	8:00~17:00	
実習のまとめ	2.5 時間		(時間割参照)	
合 計	90 時間			

3. 事前学習

以下の内容を、実習開始時に指導教員に提出する。

- 1) 訪問看護を利用する際の法・制度について
 - ①介護保険と医療保険の違い・使い分け ②公費負担医療制度の詳細
- 2) 訪問看護ステーションについて
 - ①訪問看護ステーションの利用方法・運営 ②訪問看護師の役割・機能について

- 3) 在宅療養者を支える多職種について
 - ①医療職種の種類と各役割・各機能 ②職種間の関係・連携
- 4) 受け持ち患者の疾患(病態)・治療・処置についての学習
- 5) 地域包括支援センターについて

地域包括支援センターの役割・機能、職員構成(職種)
- 6) 病院での退院支援について

東京女子医科大学附属足立医療センターの患者サポートセンターの役割・機能、利用者の特徴

4. 実習の進め方

- 1) 実習期間中に、①訪問看護ステーションでの臨地実習6日間、②東医療センター患者サポートセンターでの見学実習1日、③地域包括支援センターでの見学実習1日 を学習する。
- 2) 訪問看護ステーションでの実習については、6日間のうち4日間は訪問看護ステーションでの学習を行う。
 - (1) 4日間の構成は、①受け持ち療養者の情報収集、②看護援助見学、③計画の実施、④他の療養者の訪問見学とする。日程は、訪問看護ステーションの指示を受ける。
 - (2) 残りの2日間は、受け持ち療養者のアセスメントや計画実施後の評価の記載、他の受け持ち患者の訪問記録記載を、学内(または訪問看護ステーション内)で行う。
- 3) 各実習施設の状況により、進め方が異なるため注意する。

実習進度 1

	(月)	(火)	(水)	(木)	(金)
1 週 目	学内学習	臨地	臨地	臨地	臨地
	1. 地域についての確認	・患者サポートセンター	・地域包括支援センター	訪問看護ST 1日目	訪問看護ST 2日目
	2. 訪問物品準備	または	または	・オリエンテーション	
	3. DVD 視聴	・地域包括支援センター	・患者サポートセンター	・紙面より情報収集(時間帯はSTの指示)	
	4. 国家試験対策				
	(月)	(火)	(水)	(木)	(金)
2 週 目	臨地	臨地	臨地	臨地	学内
	訪問看護ST 3日目	訪問看護ST 4日目	訪問看護ST 5日目	訪問看護ST 6日目	最終カンファレンス

5. 実習上の注意事項

- 1) 服装は別紙で指示する。
髪型や身だしなみは、学内演習オリエンテーションを参照する。
- 2) 必要物品(合羽・自転車用ヘルメット等)は学校の物品を借用して使用する。借用の際は所定の手続きを行う。
- 3) 訪問看護ステーションへの移動は、原則として学校の自転車を利用する。規定の安全対策に従い交通事故防止に努める。
- 4) 出席表は各施設の指導者に押印していただく。
- 5) 受け持ち利用者の状況により、途中で訪問日や受け持ち等予定変更が生じる場合がある。
- 6) 実習施設や学習進度が各学生で異なるため、グループ間での情報共有は特に意識で行う。
- 7) 看護学生として礼儀と節度をもって臨地実習に臨む。
- 8) 実習オリエンテーション内容を厳守する。

VI. 実習記録 別紙参照

VII. 評価 別紙参照

様式1

情報の整理・アセスメント

学籍番号：

氏名：

記載：月 日（ ）	既往症：	医療保険：□国保 □社保（□本人 □家族） □生保 年金受給状況：□国民年金 □厚生年金 □共済年金各 種手当：□無し □あり 各種手帳：□無し □あり 受診療境：かかりつけ医 □無し □あり緊 急受け入れ先：□無し □あり 介護保険料利用：□無し □あり 介護度：要支援：□Ⅰ □Ⅱ 要介護：□Ⅰ □Ⅱ □Ⅲ □Ⅳ □Ⅴ 障 害高齢者の日常生活自立度判定基準 □J1 □J2 □A1 □A2 □B1 □B2 □C1 □C2 認知症高齢者の日常生活自立度判定 □Ⅰ □Ⅱa □Ⅱb □Ⅲa □Ⅲb □Ⅳ □M 社会資源利用状況 □居宅サービス □その他サービス	住宅環境： 周辺（ ） □一戸建て □集合住宅 □専用居室 家族構成 主介助者の状況 歳代 療養者との関係 健康状態：□良 □悪い □疾患 就労状況：□無し □あり □常勤 □非常勤 □自営 介護状況 □良 □介護疲労 □時間不足 □知識不足
年齢：歳代性別：			
診断名：			
訪問看護に至った経緯：			
訪問目的：			
療養者・家族の希望・要望すること：	日常生活行動（具体的な状況） 歩行：□自立 □一部介助 □全介助 立位：□自立 □一部介助 □全介助 座位：□自立 □一部介助 □全介助 寝返り：□自立 □一部介助 □全介助 排泄：□自立 □一部介助 □全介助 食事：□自立 □一部介助 □全介助 入浴：□自立 □一部介助 □全介助 IADL：□自立 □一部介助 □全介助		
受けている医療（治療・処置・医療機器利用）： □酸素療法（流量 L/分） 吸入方法：□マスク □経鼻カニューレ □人工呼吸器（設定 ） □気管切開カニューレ □NPPVマスク □中心静脈栄養 □ポート □輸液ポンプ □経管栄養（□経鼻 □胃瘻 日に1回交換） □膀胱留置カテーテル（ Fr 日に1回交換） □消化器系ストマ □尿路系ストマ □CAPD □血糖測定 □薬剤			
感染症：□無し □あり			
アレルギー：□無し □あり			
		サービス計画	家屋の間取り
		月 火 水 木 金 土 日	
		午前	
		午後	
		夜間	
			経済状況： □安定 □不安定 □年金 □生保

様式2－①

情報の整理・アセスメント

学籍番号：

氏名：

身体側面		家族のニーズ	
情報収集	アセスメント	情報収集	アセスメント
住環境		社会資源	
情報収集	アセスメント	情報収集	アセスメント
介護力		経済力	
情報収集	アセスメント	情報収集	アセスメント

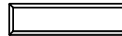
病態・情報関連図

関連図の凡例

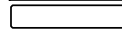
対象の基本属性

実在（健在）情報

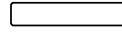
潜在情報



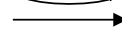
看護問題



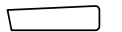
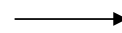
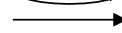
顕在する情報のつながり



潜在する情報のつながり



治療・処置・介入



統合アセスメント

様式

学籍番号：

氏名：

看護目標・具体策・実施評価

訪問月日

月

日（ ）

看護問題：

看護目標

具体策（観察項目・直接ケア計画・指導計画）

実施評価（SOAP）

振り返り・学び

指導者サイン

様式

学籍番号：

氏名：

1日の学習内容（訪問状況と学び）

訪問月日 月 日（ ）

情報	訪問内容
【事例1】 歳 性別： 保険の種類 介護度 利用している社会資源 疾患・病状 訪問目的	
【事例2】 歳 性別： 保険の種類 介護度 利用している社会資源 疾患・病状 訪問目的	
【事例3】 歳 性別： 保険の種類 介護度 利用している社会資源 疾患・病状 訪問目的	
【事例4】 歳 性別： 保険の種類 介護度 利用している社会資源 疾患・病状 訪問目的	
振り返り・学び	
指導者サイン	

様式5

学籍番号：

氏名：

訪問看護ステーションでの学び

The page contains a large number of horizontal lines, suggesting a very long document or a corrupted scan. The lines are evenly spaced and extend across the width of the page.

様式6

学籍番号：

氏名：

_____地域包括支援センター見学実習 見学日： 月 日（ ）

学習目標・学習課題

振り返り・学び

指導者サイン

様式6

学籍番号：

氏名：

患者サポートセンター見学実習

見学日：

月

日（ ）

学習目標・学習課題

振り返り・学び

指導者サイン

様式7

学籍番号：

氏名：

在宅看護論実習の学び

Blank lined area for writing the student's reflection on the home nursing practice.

在宅看護論実習評価表

学籍番号: 氏名:
 実習期間: 年 月 日()～ 年 月 日()
 実習場所: 訪問看護ステーション; _____
 地域包括支援センター; _____
 東京女子医科大学附属足立医療センター 患者サポートセンター

項目	評価内容	自己採点	教 員			
			4 (A)	3 (B)	2 (C)	1 (D)
1 療養者と家族のニーズを総合的にとらえることができる。	1 療養者の身体的特徴が理解できる。		4	3	2	1
	2 療養者の精神的特徴が理解できる。		4	3	2	1
	3 療養者の社会的特徴が理解できる。		4	3	2	1
	4 療養者の生活環境が理解できる。		4	3	2	1
	5 介護者の状況と介護上で抱えている問題が把握できる。		4	3	2	1
	6 家族が担う介護内容が理解できる。		4	3	2	1
	7 訪問看護の目的が理解できる。		4	3	2	1
	8 療養者の身体側面のアセスメントができる。		4	3	2	1
	9 住環境のアセスメントができる。		4	3	2	1
	10 社会資源のアセスメントができる。		4	3	2	1
	11 介護力のアセスメントができる。		4	3	2	1
	12 経済力のアセスメントができる。		4	3	2	1
2 療養者と家族の生活状況に応じた援助を見学または一部実施ができる。	13 療養者と家族の自己決定を尊重した目標設定ができる。		4	3	2	1
	14 自立・健康維持・住環境・使用可能物品・介護力を考慮した援助を立案できる。		4	3	2	1
	15 療養者と家族の主体性や意思を尊重した援助を実施・評価できる。		4	3	2	1
3 在宅療養での社会資源の活用方法の実際と、多職種の連携・協働の必要性が理解できる。	16 病院の退院支援(患者サポートセンター)の機能・役割が理解できる。		4	3	2	1
	17 地域包括支援センターの機能・役割が理解できる。		4	3	2	1
	18 療養者が活用している社会資源の種類・内容と使用する利点が理解できる。		4	3	2	1
	19 訪問看護ステーションと他機関との連携のとり方が理解できる。		4	3	2	1
	20 訪問看護師と多職種との連携のとり方が理解できる。		4	3	2	1
4 訪問看護師としての基本的態度を学び、看護を学ぶものとしての責任ある行動がとれる。	21 訪問時・退室時の挨拶や言葉遣いが適切にできる。		4	3	2	1
	22 個人情報の保護を遵守した行動がとれる。		4	3	2	1
	23 自己の健康管理ができる。		4	3	2	1
	24 実習に関わる全ての場面で必要な相談・確認・連絡・報告が行える。		4	3	2	1
	25 看護学生として自己課題を意識し実習に取り組める。		4	3	2	1
学生コメント	評価を(点／)にした理由		出欠席(学生記載)			
			欠席時間数 時間			
教員コメント			点／			
			指導教員 印			

A:よくできた B:だいたいできた C:努力を要する D:かなり努力を要する

統合実習

I. 目的

既習の知識・技術・態度を統合し、管理実習・夜間実習・複数患者の受け持ちを通して、看護実践を養う

II. 目標

1. 複数患者の看護が実践でき、妥当性を客観的に振り返ることができる
2. 看護管理の実際を知り、保健医療チームにおける看護師の役割を学ぶ
3. 夜間における患者の療養生活を知り、看護の役割を理解できる
4. 医療安全を踏まえた診療の補助の実際を学ぶ
5. 専門職業人としての倫理観を高めるとともに、自己成長していくための今後の自己の課題を明確にできる

III. 行動目標

1. 複数患者の看護が実践でき、妥当性を客観的に振り返ることができる
 - 1) 複数患者を受け持ち、患者の優先順位を決定し、援助計画が立案できる
 - 2) 複数患者を受け持ち、患者の状況に合わせた援助を提供できる
 - 3) 実践した看護を指導者・教員と客観的に振り返ることができる
2. 看護管理の実際を知り、保健医療チームにおける看護師の役割を学ぶ
 - 1) 医療チームにおける看護の機能・役割が理解できる
 - 2) 多職種との連携の中での看護師の役割がわかる
3. 夜間における患者の療養生活を知り、看護の役割を理解できる
 - 1) 夜間の患者の様子がわかる
 - 2) 夜間業務の中での、看護業務、安全管理が理解できる
4. 医療安全を踏まえた診療の補助の実際を学ぶ
 - 1) 6Rを踏まえた与薬の実際の一部実施ができる
 - 2) その他の診療の補助技術の一部実施ができる
5. 専門職業人としての倫理観を高めるとともに、自己成長していくための今後の自己の課題を明確にできる
 - 1) 看護師に必要な知識・技術・態度について、考えを深めることができる
 - 2) 既習内容を振り返り、自己を評価し、研鑽することができる
 - 3) 臨床で遭遇する倫理的問題について考えることができる

IV. 実習目標・実習内容

実習目標	行動目標	学習内容	方法・留意点
1. 複数患者の看護が実践でき、妥当性を客観的に振り返ることができる	1) 複数患者を受け持ち、患者の優先順位を決定し、適した方法の援助を立案できる	(1) 対象の主訴 — 入院に至った経緯 (2) 入院後の治療・処置内容 (3) 健康段階 (4) 発症前の身体 — 心理 — 認知状態 (5) 入院前の生活様式 (6) 患者の個別条件、病態生理や治療・処置、ニーズとその関連性 (7) 看護問題の抽出 (8) 看護目標、看護計画の立案	看護を実践する上でのアセスメントを行う

	2) 複数患者を受け、患者の状況に合わせた援助を提供できる 3) 行った看護を指導者・教員と客観的に振り返ることができる	(9) 与薬、検査・処置等を含む1日のスケジュール立案 (10) 優先度を踏まえた、複数患者受け持ちの際のタイムスケジュール管理 (1) 看護計画の実施 (2) 安全 - 安楽を踏まえた日常生活援助技術の提供 (3) フィジカルアセスメント技術 (4) 指導技術 (1) 看護計画の実施に関する振り返り (2) 優先度に関する振り返り	優先順位の決定の根拠を明確に持ち、安全に援助を実施し、実施後に振り返りを行う 援助の内容、変更についてアセスメントし、教員 - 指導者に相談指導を受け、実施する
2. 看護管理の実際を知り、保健医療チームにおける看護師の役割を学ぶ	1) 医療チームにおける看護の機能・役割が理解できる 2) 多職種との連携の中での看護師の役割が理解できる	(1) 病院における看護の組織 - 管理体制が理解できる: 理念、方針 (2) 病院における看護組織が理解できる: 理念、目標、方針、組織図 (3) 病棟管理者の役割 - 機能的に理解できる: 師長・主任の役割、病棟の安全管理、病棟の人的管理、病棟の物的管理、病棟の情報管理 (4) リーダー役割が理解できる: 病棟全体把握、他部門調整、チーム内の患者把握、看護ケアの調整、緊急時の対応、状況変化に伴う医師の指示受け、次の勤務への引き継ぎ (5) メンバーの役割が理解できる: リーダー・メンバー間への報告・連絡・相談、ケア連携 (1) 保健医療チームの連携: 情報共有、役割分担、患者の状況を的確に対応するための組織の理解 (2) 多職種との連携が理解できるリハビリテーション部門との連携 栄養管理部との連携 薬剤管理部との連携 地域医療部門との連携 病院事務部門との連携 検査・外来部門との連携	実習初日に師長 - 指導者からオリエンテーションを受ける 看護師として必要な看護管理の視点をチームの一員としてシャドーイングを行いながら理解を深める 多職種との連携の実際を見学する 引き継ぎの際に行われる情報交換の実際を見学する 転院 - 退院 - 転院に伴う情報交換の実際を見学する 受け持ち患者の治療・処置・検査に付き添う

3. 夜間における患者の療養生活を知り、看護の役割を理解できる	1) 夜間の患者の様子がわかる 2) 夜間業務の中での看護業務、安全管理が理解できる	(1) 患者の夜間の過ごし方 (2) 夜間に多いニーズ (3) 家族の来院 (1) 夜間看護のための情報収集 (2) 日勤者との情報共有 (3) 優先度の判断 (4) 夜間業務の中での看護業務、安全管理 (5) チームでの看護の実際	夜間の患者の様子や家族との関わり、患者の安全への配慮等について見学する 夜間の管理体制について説明を受ける
4. 医療安全を踏まえた診療の補助の実際を学ぶ	1) 6R を踏まえた与薬の実際の一部実施ができる 2) その他の診療の補助技術の一部実施ができる	(1) 6Rの実施方法 (2) ダブルチェックの方法 (3) 与薬(経口 - 外用 - 注射)の準備を指導のもと一部実施 (4) ベッドサイドでの最終確認方法 (1) 血糖測定、経管栄養、吸引 - 吸入、浣腸・排便などの診療の補助技術の一部実施	指導者とともに診療の補助技術を一部実施する。実施にあたっては、目的・方法・留意点を明確にして臨む
5. 専門職業人としての倫理観を高めるとともに、自己成長のための今後の課題を明確にできる	1) 看護師に必要な知識・技術・態度について、考えを深めることができる 2) 既習内容を振り返り、自己を評価し、研鑽することができる 3) 臨床で遭遇する倫理的問題について考えることができる	(1) 実習を通して、看護師に必要な知識・技術・態度とは何かを考える (1) これから専門職業人として成長していくための自己の課題について考える (1) 複数受け持ちや見学実習を通して、看護における倫理について考える	既習の学びと今回の実習の特性を踏まえた学びを明確にして改めて自己の課題を見つめ直す機会とする 職業専門人として求められる看護師像を明確にして今後も努力を続けられるようにする 臨床で遭遇した倫理的問題について臨床と一緒に考える機会をもつ

V. 実習方法

1. 実習施設

- 東京女子医科大学附属足立医療センター
- 東京女子医科大学病院
- 東京女子医科大学附属八千代医療センター

2. 実習の組み立て

実習内容	時間配分	内 訳	実習時間	備 考
オリエンテーション	5 時間	医療安全1 時間 領域担当4 時間	(時間割を参照)	
臨地実習	80 時間	8 時間×10 日間	8 : 00~17 : 00	
実習のまとめ	5 時間	実習のまとめ・発表 (医療安全を含む)	(時間割を参照)	
合 計	90 時間			

3. 実習の進め方(例)

1) 1 週目

学生	月 日 ()	月 日 ()	月 日 ()	月 日 ()	月 日 ()
1	全体OR	複数患者(2 名)	複数患者(2 名)	複数患者(2 名)	複数患者(2 名)
2		複数患者(2 名)	複数患者(2 名)	複数患者(2 名)	複数患者(2 名)
3		複数患者(2 名)	複数患者(2 名)	複数患者(2 名)	複数患者(2 名)
4		管理	リーダー	メンバー	夜間
5		管理	リーダー	メンバー	夜間
6		管理	リーダー	メンバー	夜間

2) 2 週目

学生	月 日 ()	月 日 ()	月 日 ()	月 日 ()	月 日 ()
1	管理	リーダー	メンバー	夜間	病棟CF
2	管理	リーダー	メンバー	夜間	
3	管理	リーダー	メンバー	夜間	
4	複数患者(2 名)	複数患者(2 名)	複数患者(2 名)	複数患者(2 名)	
5	複数患者(2 名)	複数患者(2 名)	複数患者(2 名)	複数患者(2 名)	
6	複数患者(2 名)	複数患者(2 名)	複数患者(2 名)	複数患者(2 名)	

4. 事前準備のポイント

- ・ 本学の基本理念・基本方針について
- ・ 看護部の理念・方針について、看護部の組織図・機能図について
- ・ 看護単位の機能と特徴について、看護提供方法(看護方式)について
- ・ 看護基準・看護手順・看護体制について

5. 事前の看護技術学修

- ・診療の補助技術の復習: 静脈留置針挿入患者の与薬、採血、血糖測定の実施
- ・その他の診療の補助技術: 経管栄養、吸引、浣腸・適便などの自己学習

6. 統合実習に臨むにあたって

臨む姿勢、自己の課題

7. 実習のまとめ

実習を含む3年間の臨地実習を通して看護観を語り、深める。発表会を持つことにより、共有しあい、病棟指導者・教員の助言を得てさらに発展させる

※詳細については、実習前オリエンテーションで資料配布予定

8. タイムスケジュールと学習方法の詳細

1) 管理実習

時間	学習方法の詳細
8:00～(8:30～)	－ 病棟挨拶 － 看護師長へ挨拶し、学習目標を発表する － オリエンテーションを受ける － 看護師長のシャドーイング 原則として行動を共にする、ラウンド・管理報告 など － 適宜昼食 原則として看護師長と同じ時間に摂る
14:30	学びのまとめを記載する
15:00	看護師長と、記録をもとに振り返りを行う ※記録用紙に印鑑をいただく
15:30	－ 看護師長へ挨拶、帰校する － 帰学後、教員への報告する － 振り返りを含めて記録を仕上げる
17:00(17:30)	実習終了

2) リーダー実習／メンバー実習

時間	学習方法の詳細
8:00(8:30)	－ 病棟へ挨拶 － リーダー看護師／メンバー看護師へ挨拶し、学習目標を発表する。 － オリエンテーションを受ける － リーダー看護師／メンバー看護師のシャドーイング 原則として行動を共にする、ラウンド・情報交換・カンファレンス、 処置・検査の介助、日常生活の援助 など ・適宜昼食(原則的に指導者と同じ時間に摂る)
14:30	学びのまとめを記載する
15:00	リーダー看護師／メンバー看護師と、記録をもとに振り返りを行う ※記録用紙に印鑑をいただく
15:30	－ リーダー看護師／メンバー看護師へ挨拶、帰学する。 － 帰学後、教員へ報告する。 － 振り返りを含めて記録を仕上げる
17:00(17:30)	実習終了

3) 夜間実習

時間	学習方法の詳細
11 : 00	- 足立医療センターでの実習の場合 身支度を整えて<u>学校</u>に集合、出席を確認する - 本院での実習の場合 身支度を整えて<u>更衣室</u>に集合、出席を確認する * 八千代医療センターでの実習の場合 身支度を整えて()に集合、出席を確認する
12 : 20 ごろ ※各病棟に合わせる	- 病棟へ挨拶 - 指導者へ挨拶 - 指導者に学習目標を発表する - 日勤の看護師のシャドーイング 原則として行動を共にする、情報交換・カンファレンス、 処置・検査の介助、日常生活の援助 など ※各病棟の指示による
17 : 00 ごろ ※各病棟の指示 より指示される	- 適宜軽食 ※病棟の状況による - 夜間実習の指導者へ挨拶 - 指導者に学習目標を発表する - 夜間実習の指導者へのシャドーイング 原則として行動を共にする ラウンド、夜間帯の受け持ちの分け方、情報交換、処置や検査の介助、日 常生活の援助、翌日の準備、イブニングケア など
19 : 30	- 学びのまとめを記載する ※指導者が食事を摂るときは、休憩(食事)をとってもよい ・指導者と、記録をもとに振り返りを行う(記録がかけない場合は 口頭で報告・振り返りを行う) ※記録用紙に印鑑をいただく
19 : 50	- 病棟実習終了 - 更衣室に戻る 教員への報告
20 : 00	帰宅 記録物の完成は教員の指示を受ける

4) 複数受け持ち実習

(1) 1日目

	時間	学習方法の詳細
1日目	8:00～ (8:30)	- 病棟へ挨拶 - 受け持ち患者の決定(ひとりで2人の患者を受け持つ) - 患者へ挨拶 - 情報収集 - カンファレンスへの参加
	適宜昼食	
	14:30 15:00	指導者への報告 病棟実習終了 カンファレンスルームに戻り、病棟の計画を参考にして、翌日の看護計画を立案する
2～4日目	17:00 (17:30)	実習終了
	8:00～ (8:30)	- 病棟へ挨拶 - 立案した看護計画を提示し、指導者より指導を受け、計画の修正を行う - 修正された看護計画に沿って、指導者と一緒に行動する(原則見学)
	適宜昼食	
	14:30 15:00	1日の行動に沿い、振り返りを行う - 病棟実習終了 - 帰学し、本日の振り返り、翌日の看護計画を立案する
	17:00 (17:30)	実習終了

VI. 実習記録

別紙参照

VII. 評価

別紙参照

令和 年度 統合実習前の自己課題

学籍番号

名前

ここまでの学習や実習を通して自己の看護観を明確にしましょう。
また、その看護観を元に今の自分を分析し課題を明確にしてください。

看護技術について、統合実習に向けて自己課題や挑戦したいことを明確にしてください。

統合実習 様式 実習日 月 日（ ）

学籍番号

氏名

管理実習記録

1. 学習目標（実習目標に照らし合わせて具体的に記載する）

2. 振り返り・学び（実習目標・新たな気づきより）

3. 指導者からの助言

指導者サイン（ ）

教員サイン（ ）

統合実習 様式 実習日 月 日（ ）

学籍番号

氏名

リーダー実習記録

1. 学習目標（実習目標に照らし合わせて具体的に記載する）

2. 振り返り・学び（実習目標・新たな気づきより）

3. 指導者からの助言

指導者サイン（ ）

教員サイン（ ）

統合実習 様式 実習日 月 日（ ）

学籍番号

氏名

メンバー実習記録

1. 学習目標（実習目標に照らし合わせて具体的に記載する）

2. 振り返り・学び（実習目標・新たな気づきより）

3. 指導者からの助言

指導者サイン（ ）

教員サイン（ ）

統合実習 様式 実習日 月 日（ ）

学籍番号

氏名

夜間実習記録

1. 学習目標（実習目標に照らし合わせて具体的に記載する）

2. 振り返り・学び（実習目標・新たな気づきより）

3. 指導者からの助言

指導者サイン（ ）

教員サイン（ ）

- 186 -

関連図の凡例

 対象の基本属性

 実在（顕在）情報

 潜在情報

 看護問題

 顕在する情報のつながり

 潜在する情報のつながり

 治療・処置・介入

統合アセスメント（看護問題の抽出理由と優先度、看護の方向性について）

統合実習 様式7				月 日 ()		学籍番号				氏名	
患者 氏 歳 号室					患者 氏 歳 号室						
看護問題・看護目標					看護問題・看護目標						
情報	本日の点滴・内服・検査・処置 等			本日の看護内容とその根拠		情報	本日の点滴・内服・検査・処置 等			本日の看護内容とその根拠	
	時間	8	9	10	11		12	13	14	15	16
	患者名										
当日の変更											
その理由											
振り返り および 学び(患者の看護実践より)					振り返り および 学び(患者の看護実践より)						
振り返り および 学び(優先度について)											

統合実習 様式8

学籍番号

名前

統合実習を通しての学びと自己課題の達成度について

あなたの目指す看護師像

看護の統合と実践実習 評価表

グループ _____ G 学籍番号 _____ 氏名 _____

評価項目	評価内容	自己 評価	教 員			
			A	B	C	D
目標1 複数患者の看護が実践 でき、妥当性を客観的に 振り返ることができる	1. 複数患者を受け持ち、情報収集・アセスメントし全体像が把握できる		5	4	3	2
	2. 受け持ち患者の看護計画が立案できる		5	4	3	2
	3. 優先順位を考慮して自己の行動計画が立案・修正できる		5	4	3	2
	4. 行動計画に沿って、患者の状況に合わせた援助が実施できる		5	4	3	2
	5. 受け持ち患者へ安全性、安楽性、効率性、自立性を考慮し実施できる		5	4	3	2
	6. 個々の患者の看護の妥当性を客観的に評価できる		5	4	3	2
	7. 複数患者の看護の優先度について評価できる		5	4	3	2
目標2 看護管理の実際を知り、 保健医療チームにおけ る看護師の役割を学ぶ	1. 病院における看護組織の位置づけ・機能が理解できる		5	4	3	2
	2. 看護管理者の役割・機能が理解できる		5	4	3	2
	3. 多職種との連携の実際を理解できる		5	4	3	2
	4. 看護におけるリーダーシップ・メンバーシップが理解できる		5	4	3	2
目標3 夜間における患者の療 養生活を知り看護の役 割を理解できる	1. 夜間における患者の療養生活が理解できる		5	4	3	2
	2. 夜間業務の中での看護体制、安全管理が理解できる		5	4	3	2
目標4 医療安全をふまえた診 療の補助の実際を学ぶ	1. 原理・原則をふまえた診療の補助が実施できる		5	4	3	2
	2. 実施を通して、安全性を脅かす要因に気づき、予防策が考えられる		5	4	3	2
目標5 専門職業人としての倫 理観を高めるとともに、 自己成長のために今後 の課題を明確にできる	1. 今後専門職業人として成長していくための自己の課題を明確にすることができ		5	4	3	2
	2. 臨床で遭遇する倫理的問題について考えることができる		5	4	3	2
実習への取り組み	1. 指導者・教員 - メンバーとの報告・連絡 - 相談 - 確認がで き 責任あ る行動がとれる		5	4	3	2
	2. 主体性をもって誠実に実習に取り組むことができる		5	4	3	2
	3. 適切な個人情報の取り扱いができ、実習記録の提出期限を守ることが できる		5	4	3	2
<学生振り返り>		欠課 () 時間				
<教員コメント>		点 ⓪ 担当教員 学生サイン				